

令和6年度 学修行動調査レポート

令和7年7月

拓殖大学 FD委員会

はじめに

本学は、大学の大衆化と学生の多様化が一層進む中、大学教育の質を社会に保証していくことが求められており、これに対応するために各種の施策に取り組んでいる。

大学基準協会「大学評価研究」（第13号2014年8月）において、「現状の教育課程の内容が、学生の主体的な学修を十分に促す内容となっているか、学生が卒業までに教育目標に沿った学修成果を十分に達成できているかを検証し、今後の具体的な改善方策につなげていくPDCAサイクルを確立する必要がある。そのためには、学修時間・学修行動の実態把握が必要となる」との学修行動調査の必要性が述べられている。この趣旨を踏まえ、本学では、学生の質保証や学修成果の可視化への取組に向け、学生本人が、自らの課程を通じた学修成果を把握するために、教育の学修経験を問う「学修行動調査」を院生を含む全ての学生を対象に平成30(2018)年度から実施している。

令和2(2020)年度からは、学修行動調査結果に対する所見で、卒業・修了認定・学位授与の方針に掲げる目標値を学生が達成しているかを把握し評価を行うとともに、その結果を踏まえ、「教育課程や教育内容・方法などの改善方策」を示している。

目次

● 調査目的／調査概要	・ ・ ・ ・ ・ 3
● 回答者プロフィール	・ ・ ・ ・ ・ 4
● 授業中での経験	・ ・ ・ ・ ・ 13
● 授業時間外の学修態度	・ ・ ・ ・ ・ 20
● 本年度の週当たりの学修等時間	・ ・ ・ ・ ・ 25
● 入学時と比べ、身に付いた学修成果・経験	・ ・ ・ ・ ・ 32
● 学部設問項目	・ ・ ・ ・ ・ 44
● 学修行動調査に対する所見	・ ・ ・ ・ ・ 51

調査目的／調査概要

＜調査目的＞

本調査は、学生の主体的な学修を促す教育課程となっているか、卒業・修了時まで
教育目標に沿った成果が上がっているかなどを検証し、その結果を教育課程や授業の
改善に資することを目的に実施した。

＜調査概要＞

- ・ 調査方法：インターネット調査（Web調査：Takudai Portalからリンク）
- ・ 調査対象：拓殖大学 学部生、大学院生(約1万人)
- ・ 調査期間：2024年11月29日（金）～2025年2月21日（金）
- ・ 回答者数：2303名

	商学部	政経学部	外国語学部	工学部	国際学部	学年計
1年生	212	226	66	137	93	734
2年生	195	165	37	76	43	516
3年生	121	127	57	101	53	459
4年生	122	167	74	52	51	466
学部計	650	685	234	366	240	2303

	学年計
博士課程前期 1 年	55
博士課程前期 2 年	37
博士課程後期 1 年	6
博士課程後期 2 年	4
博士課程後期 3 年	13
修士課程 1 年	8
修士課程 2 年	5
大学院生計	128

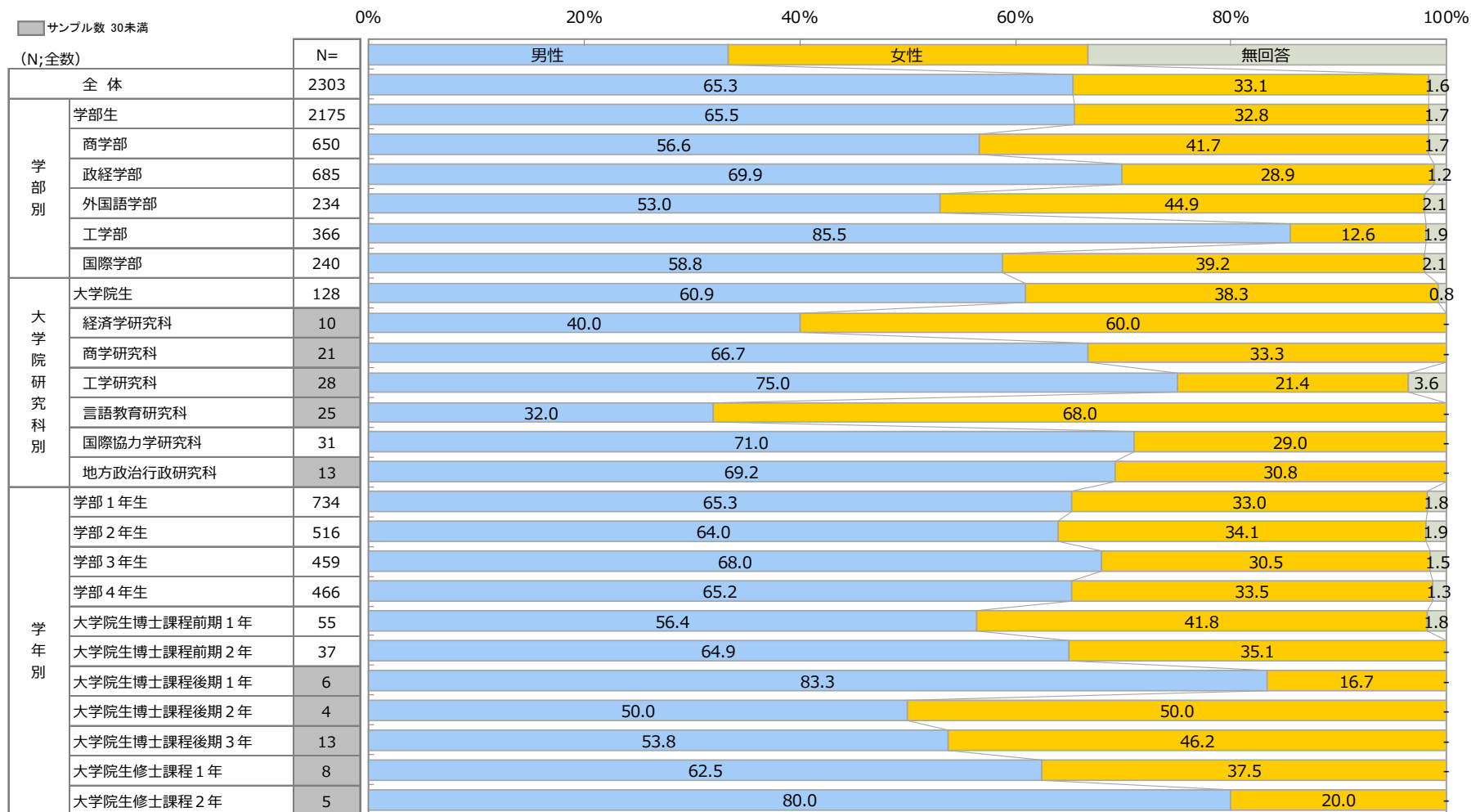
- ・ 調査主体：拓殖大学
- ・ 調査実施：ビデオリサーチ

回答者プロフィール

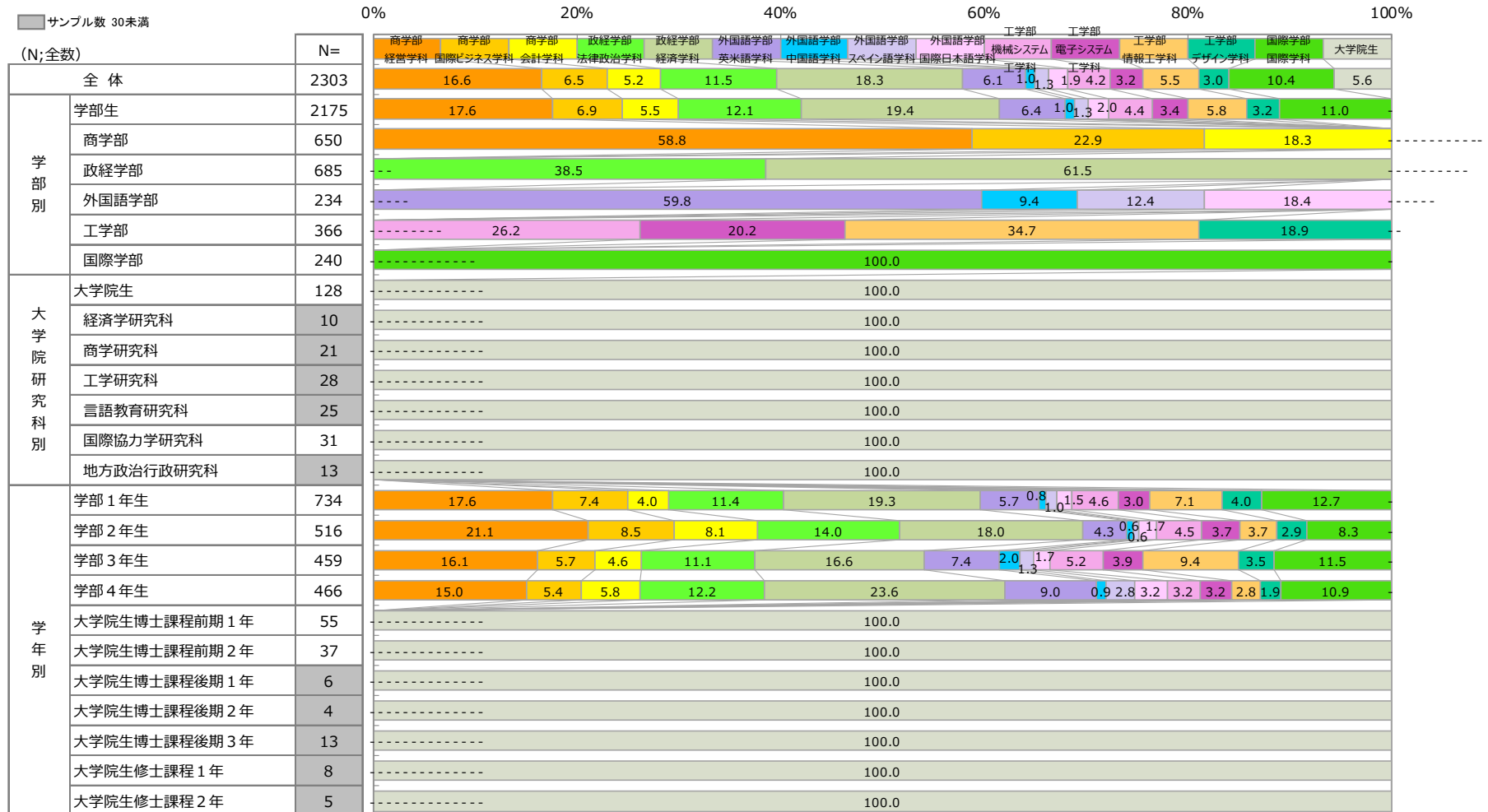
性別

Q1.あなたの性別をお知らせください。(SA)

- ・性別は、全体で「男性」65.3%、「女性」33.1%、「無回答」1.6%である。
- ・学部生、大学院生いずれも「男性」が「女性」を上回る。



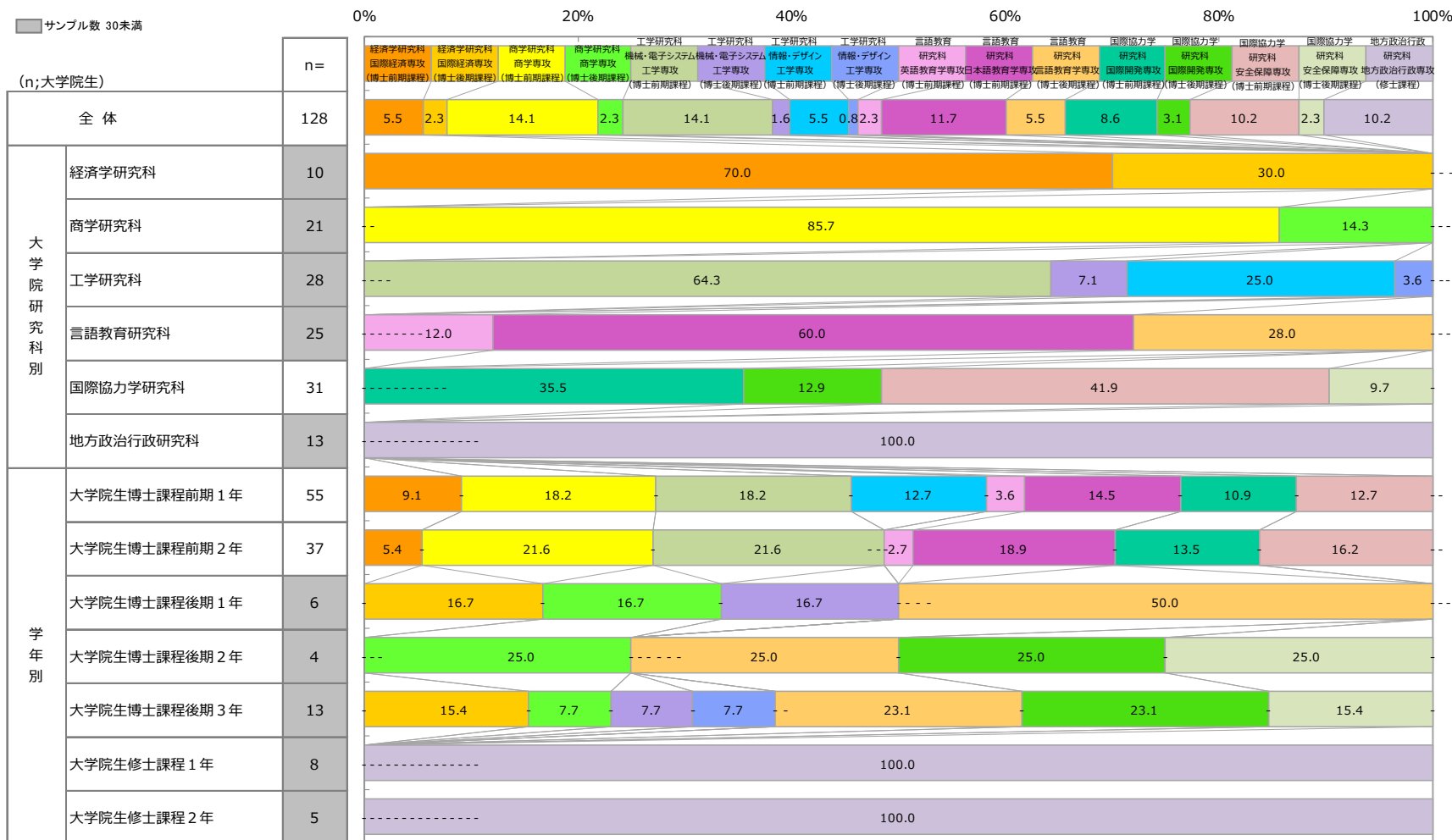
- ・所属は、全体で「政経学部 経済学科」が18.3%、「商学部 経営学科」が16.6%、「政経学部 法律政治学科」が11.5%、「国際学部 国際学科」が10.4%で10%を上回る。
なお「大学院生」は5.6%である。



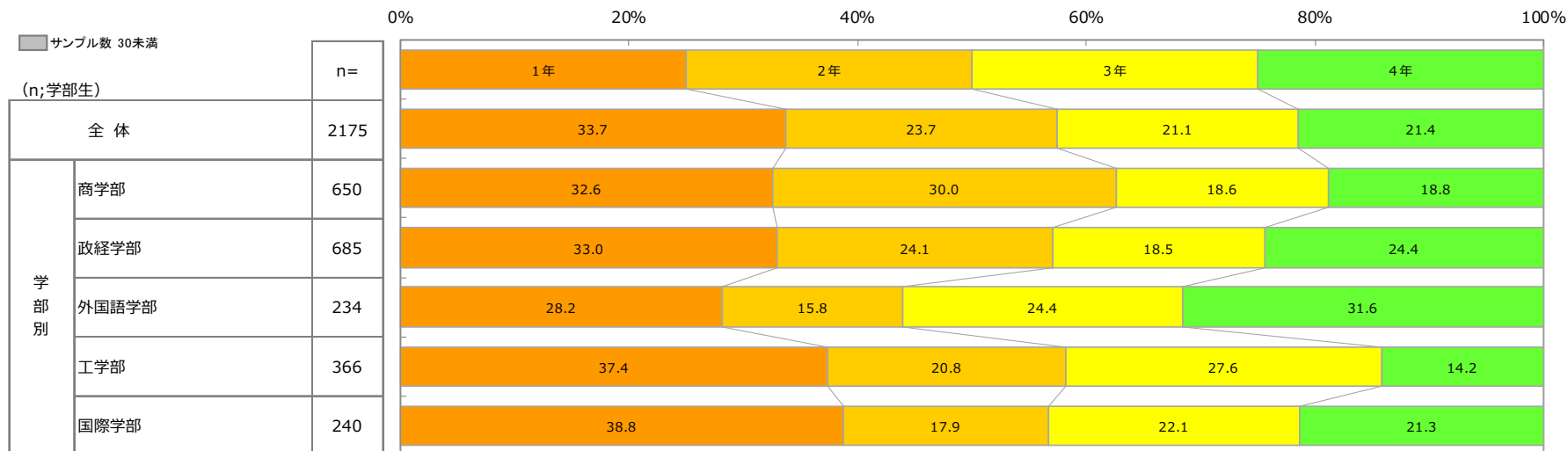
所属（大学院生）

Q2SQ.あなたの所属をお知らせください。（SA）

- ・大学院生の所属は、「商学研究科 商学専攻（博士前期課程）」、「工学研究科 機械・電子システム工学専攻（博士前期課程）」が14.1%、「言語教育研究科 日本語教育学専攻（博士前期課程）」が11.7%、「国際協力学研究科 安全保障専攻（博士前期課程）」、「地方政治行政研究科 地方政治行政専攻（修士課程）」が10.2%で10%を上回る。



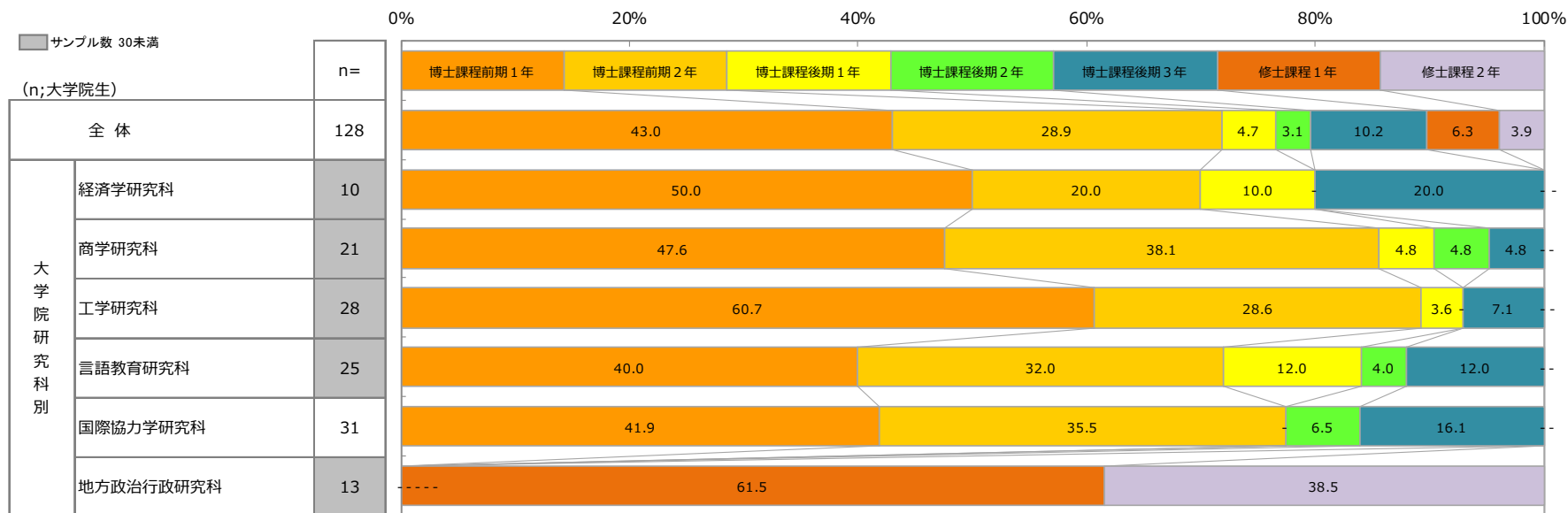
- ・学部生の学年は、「1年」が33.7%、「2年」が23.7%、「3年」が21.1%、「4年」が21.4%である。



学年（大学院生）

Q2SQ3.あなたの学年をお知らせください。（SA）

- ・大学院生の学年は、「博士課程前期 1 年」が43.0%、「博士課程前期 2 年」が28.9%である。「博士課程前期」が合計約7割を占める。



外国人留学生比率

Q3.あなたは外国人留学生ですか。(SA)

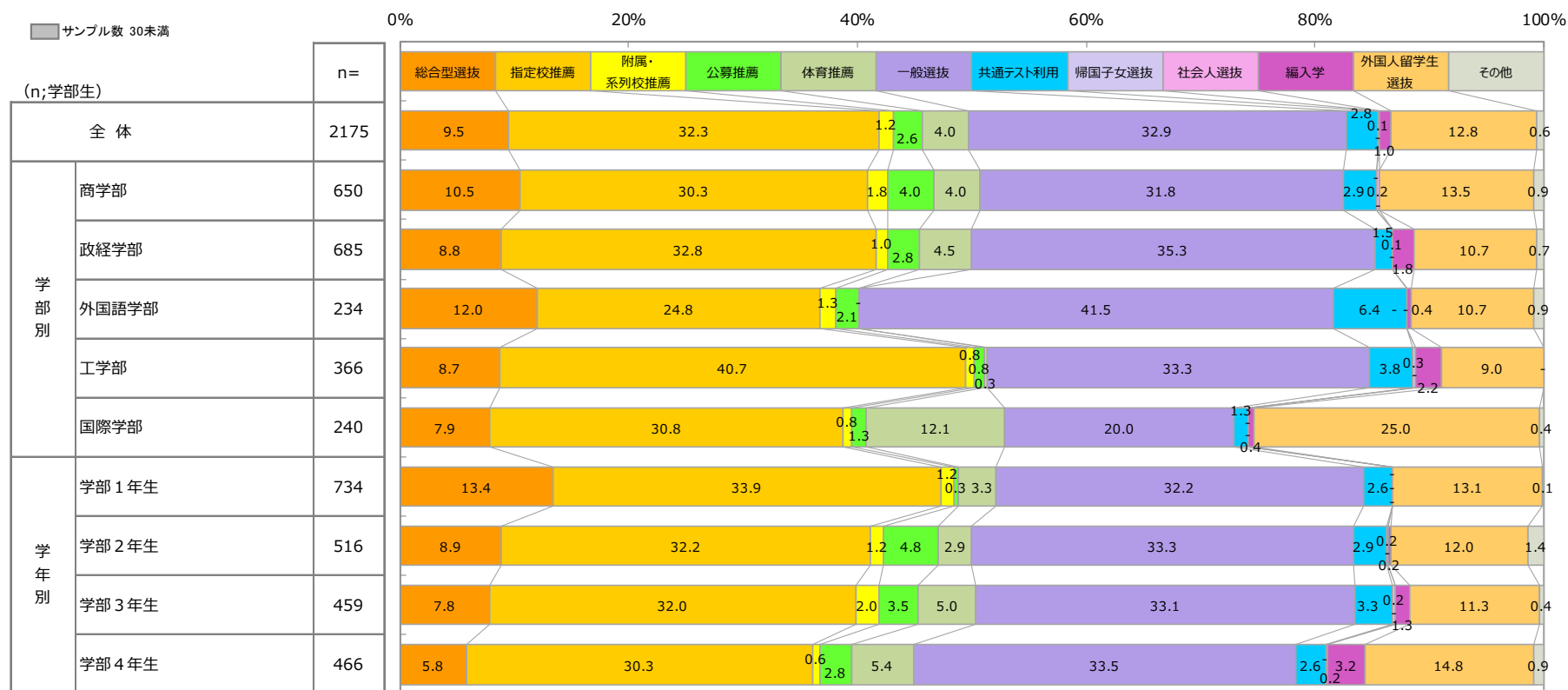
- 外国人留学生比率は、全体の19.6%。国際学部が31.3%で特に多い。
大学院生は約6割が外国人留学生と回答。



入試種類（学部生）

Q4. 拓殖大学へはどのような選抜方法で入学しましたか。
(SA)

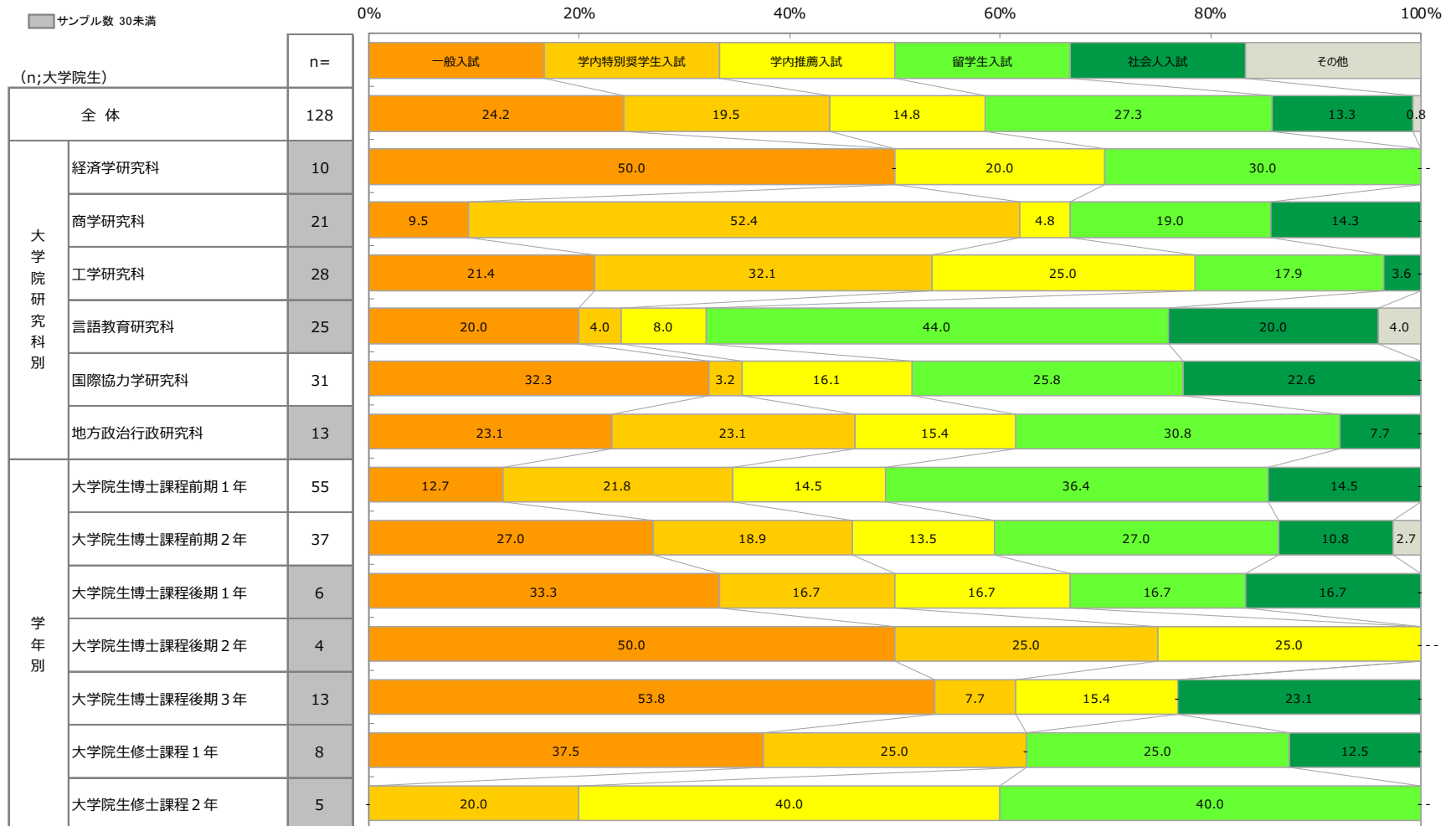
- 学部生の入試種類は、全体では「一般選抜」が32.9%で最も多く、「指定校推薦」が32.3%で続く。
- 学部別では、工学部と国際学部で「指定校推薦」が「一般選抜」を上回る。国際学部は「外国人留学生選抜」も多い。
- 商学部、政経学部、外国語学部は「一般選抜」が最も多い。
- 学年別では、学部1年生で「指定校推薦」が「一般選抜」を上回る（+1.7pt）。他の学年では「一般選抜」が最も多い。



入試種類（大学院生）

Q5. 拓殖大学大学院へはどのような選抜方法で入学しましたか。（SA）

- ・ 大学院生の入試種類は、「留学生入試」が27.3%で最も多く、次いで「一般入試」24.2%、「学内特別奨学生入試」19.5%と続く。

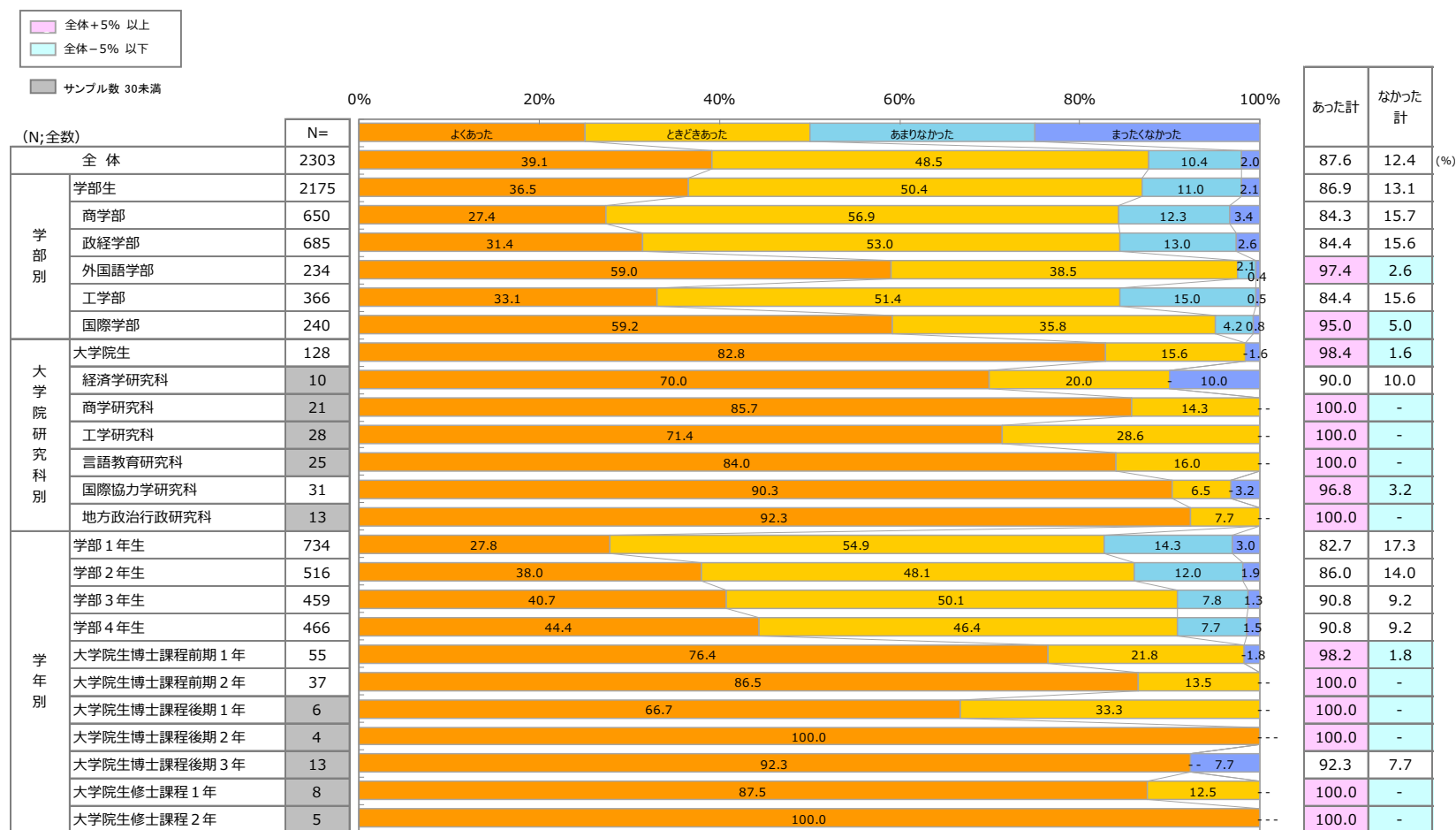


授業中での経験

自分の考えや課題を発表する授業有無

Q6.自分の考えや課題を発表する授業はありましたか。
(SA)

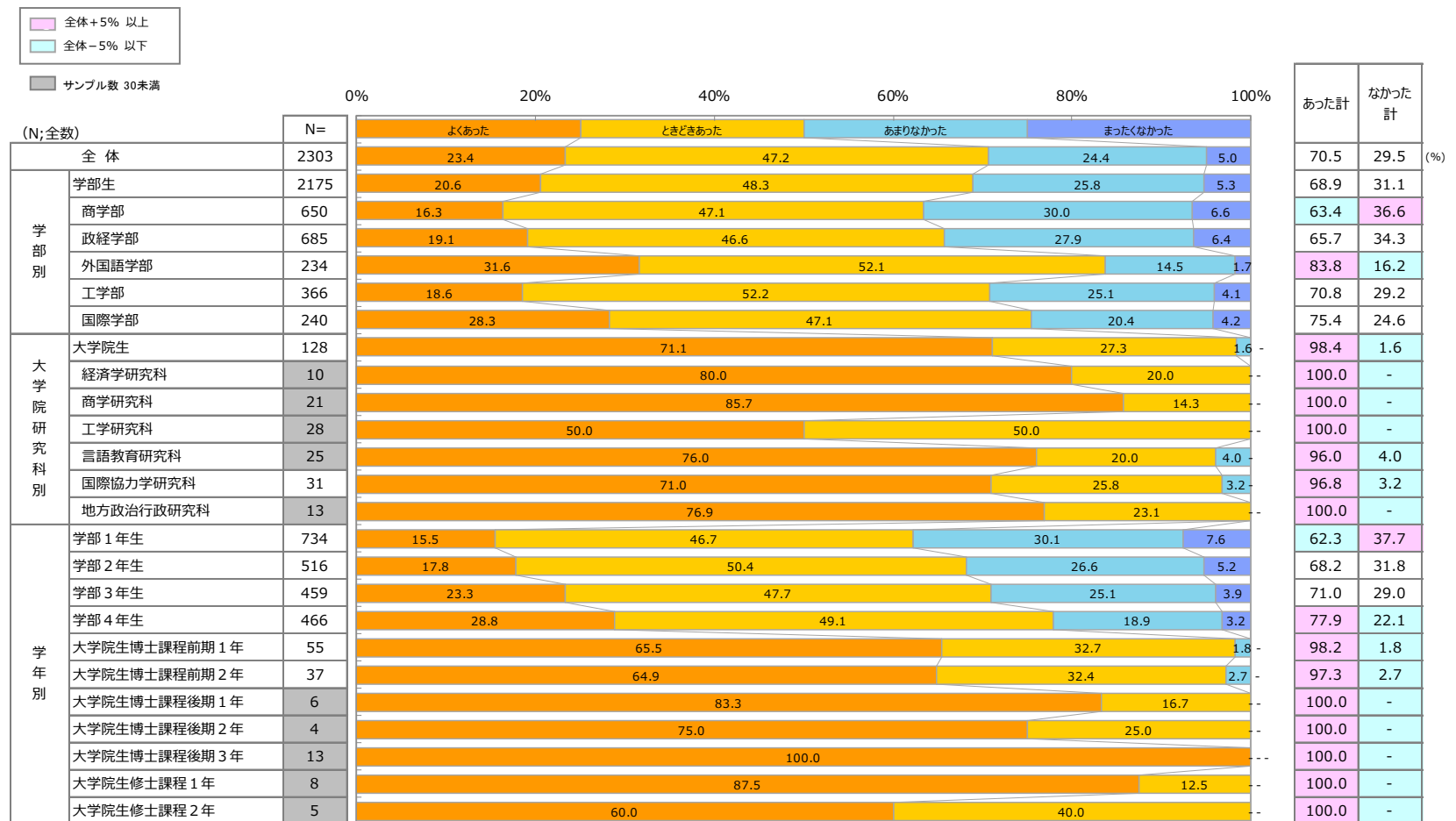
- ・自分の考えや課題を発表する授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の87.6%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の12.4%を上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を大きく上回る。
「あった計」をみると、外国語学部が97.4%で最も高く、国際学部が95.0%で続く。
また、大学院生は「あった計」が98.4%（全体より+10.8pt）に達する。
- ・学年別で学部生の「あった計」をみると、学部3年生と4年生がともに90.8%で1年生と2年生より高い。



教員への質問・意見を述べたことの経験有無

Q7.教員に質問したり、意見を述べたことはありましたか。(SA)

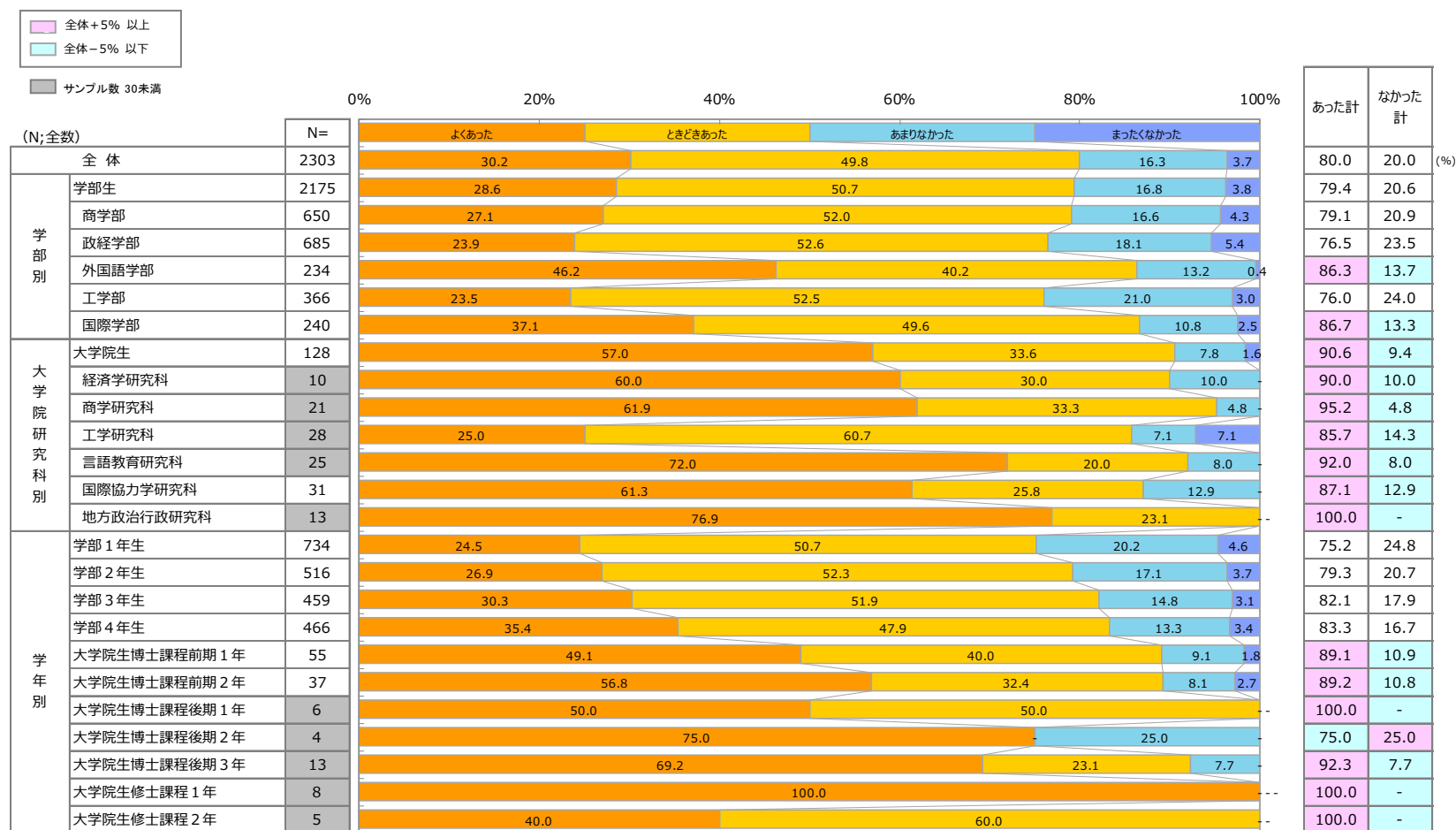
- ・教員への質問・意見を述べたことの経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の70.5%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の29.5%を上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。なお、「なかった計」は、全体に比べ商学部で5pt以上上回っている。「あった計」をみると、外国語学部が83.8%（全体より+13.3pt）で最も高く、国際学部が75.4%（全体より+4.9pt）で続く。また、大学院生は「あった計」が98.4%に達する。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と学年が上がるにつれ「あった計」が上がる。



学生同士が議論する授業有無

Q8.学生同士が議論する授業はありましたか。(SA)

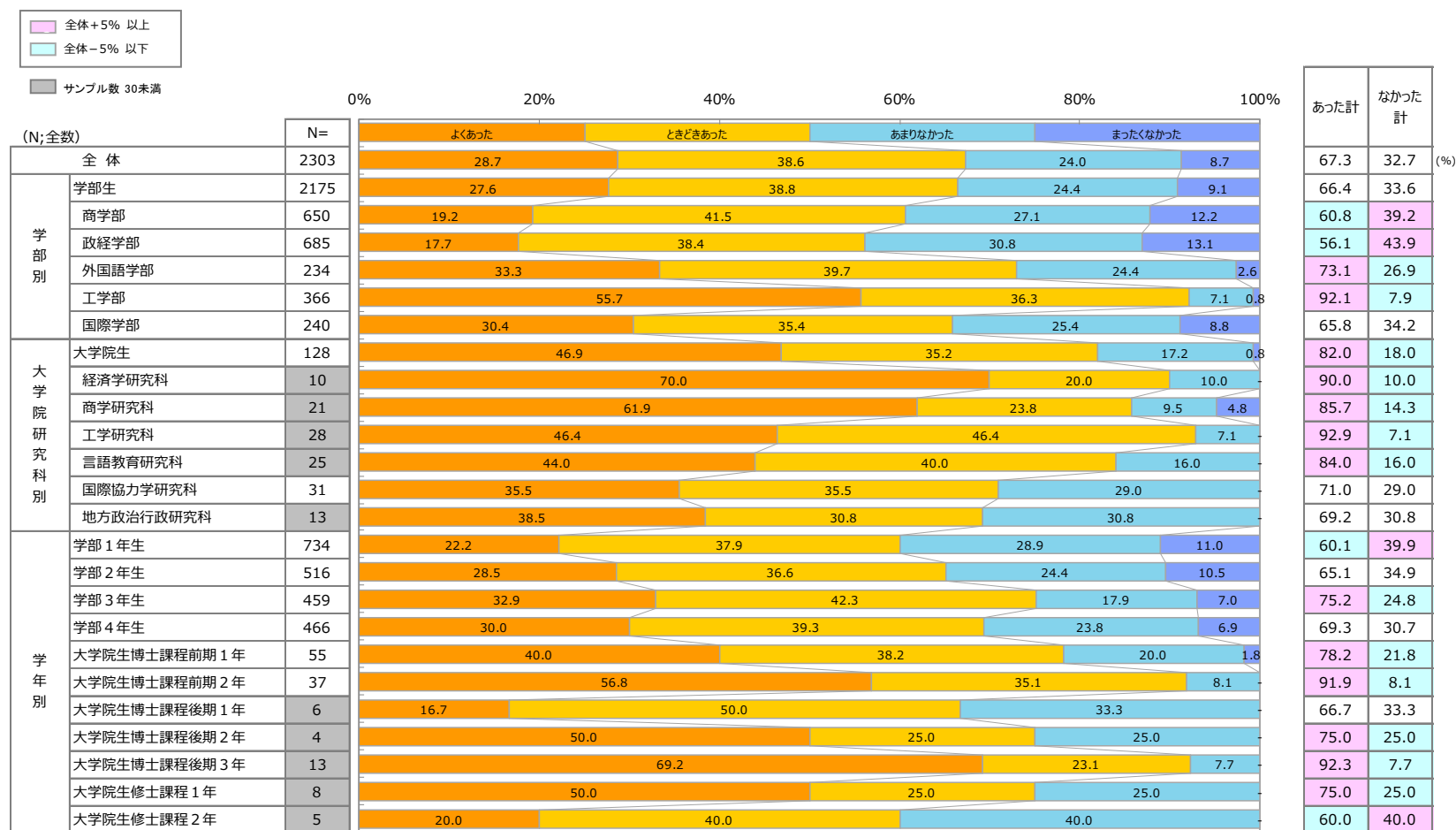
- ・ 学生同士が議論する授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の80.0%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の20.0%を上回る。
- ・ 学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。
「あった計」をみると、国際学部が86.7%（全体より+6.7pt）で最も高く、外国語学部が86.3%（全体より+6.3pt）で続く。また大学院生は「あった計」が90.6%。
- ・ 学年別では、学部1年生から4年生と学年が上がるにつれ「あった計」が上がる。



演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無

Q9. 演習、実験、実習、フィールドワークなどを通して体験する授業はありましたか。(SA)

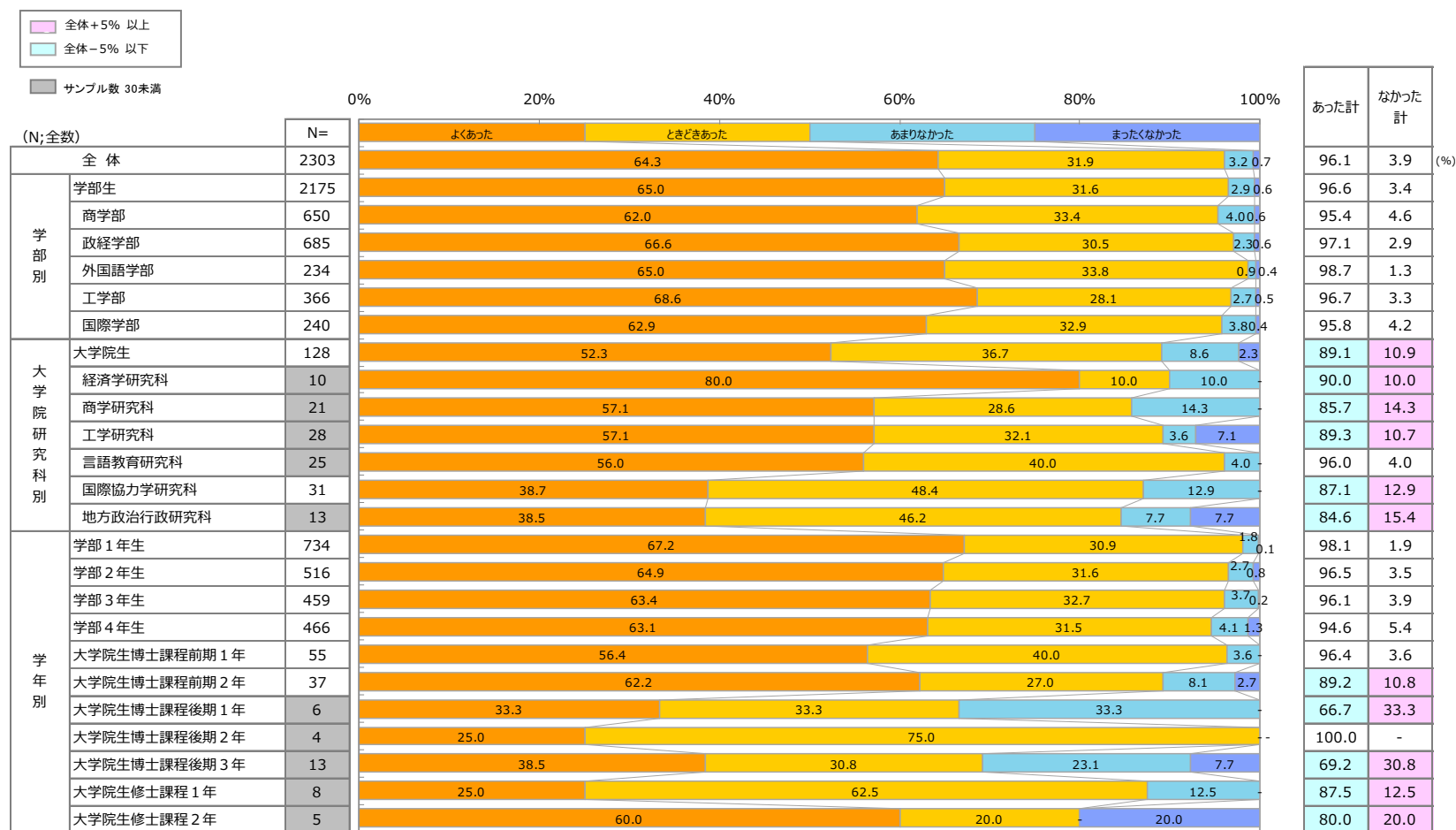
- ・ 演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の67.3%で、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の32.7%を上回る。
- ・ 学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。なお、「なかった計」は、全体に比べ商学部と政経学部で5pt以上上回っている。「あった計」をみると、工学部が92.1%（全体より+24.8pt）で最も高く、外国語学部が73.1%（全体より+5.8pt）で続く。また大学院生は「あった計」が82.0%。
- ・ 学年別で学部生の「あった計」をみると、3年生が75.2%で最も高く、続いて4年生の69.3%となった。



定期的な小テスト・レポートのある授業有無

Q10.定期的に小テストやレポートが課せられた授業はありましたか。(SA)

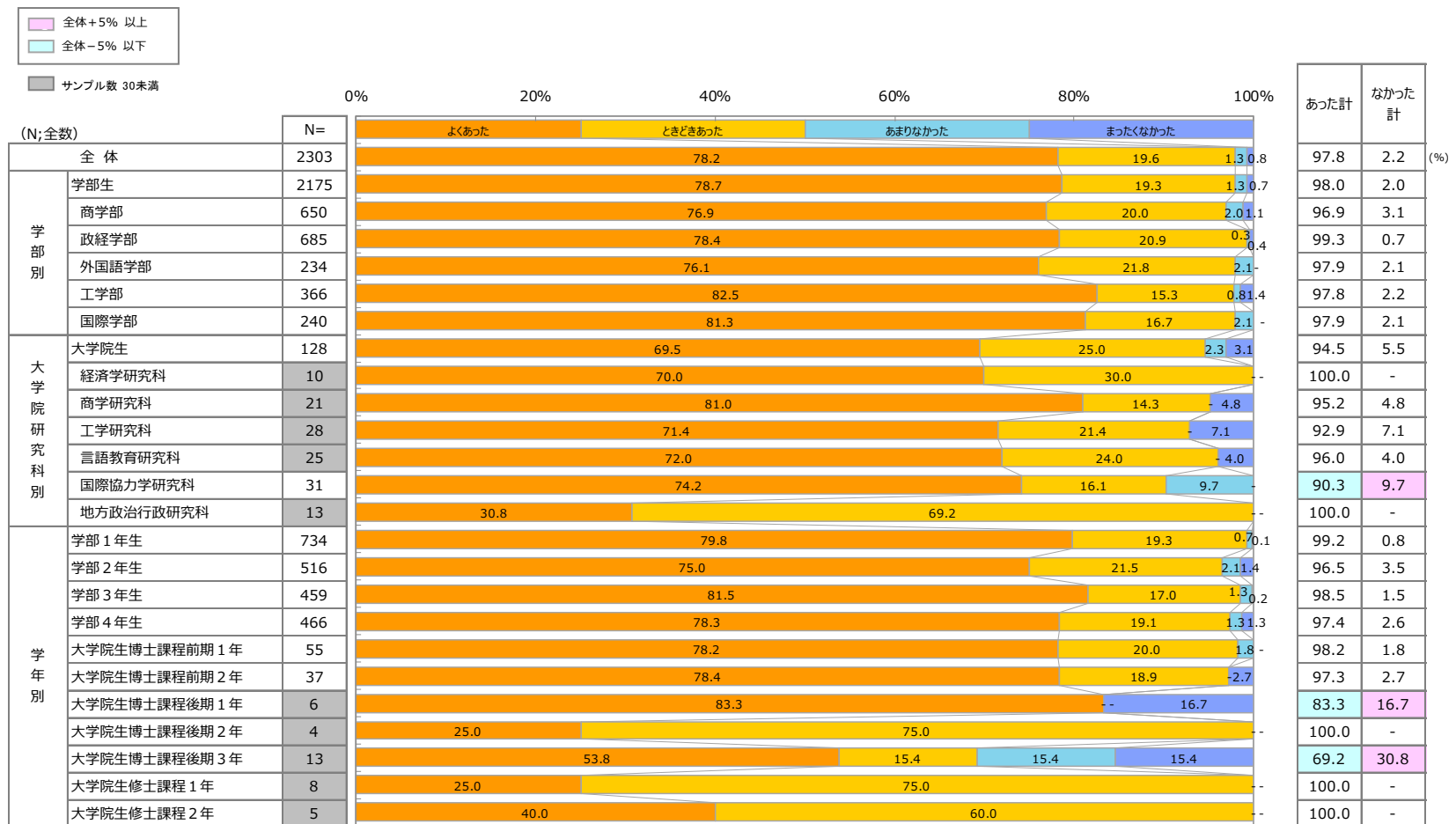
- 定期的な小テスト・レポートのある授業が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の96.1%に達した。
- 各学部をみても「あった計」は95%以上で大きな差はみられない。
また、大学院生の「あった計」は89.1%。
- 学年別で学部生をみると、学年が下がるにつれて「あった計」が上がる。



Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の 受け取りや提出を行った授業有無

Q11.Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業はありましたか。(SA)

- ・ Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業が「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は全体の97.8%に達した。
- ・ 各学部をみても「あった計」は95%以上で大きな差はみられない。
また、大学院生の「あった計」は94.5%。
- ・ 学年別で学部生の「あった計」をみると、1年生が99.2%で最も高く、続いて3年生の98.5%となった。

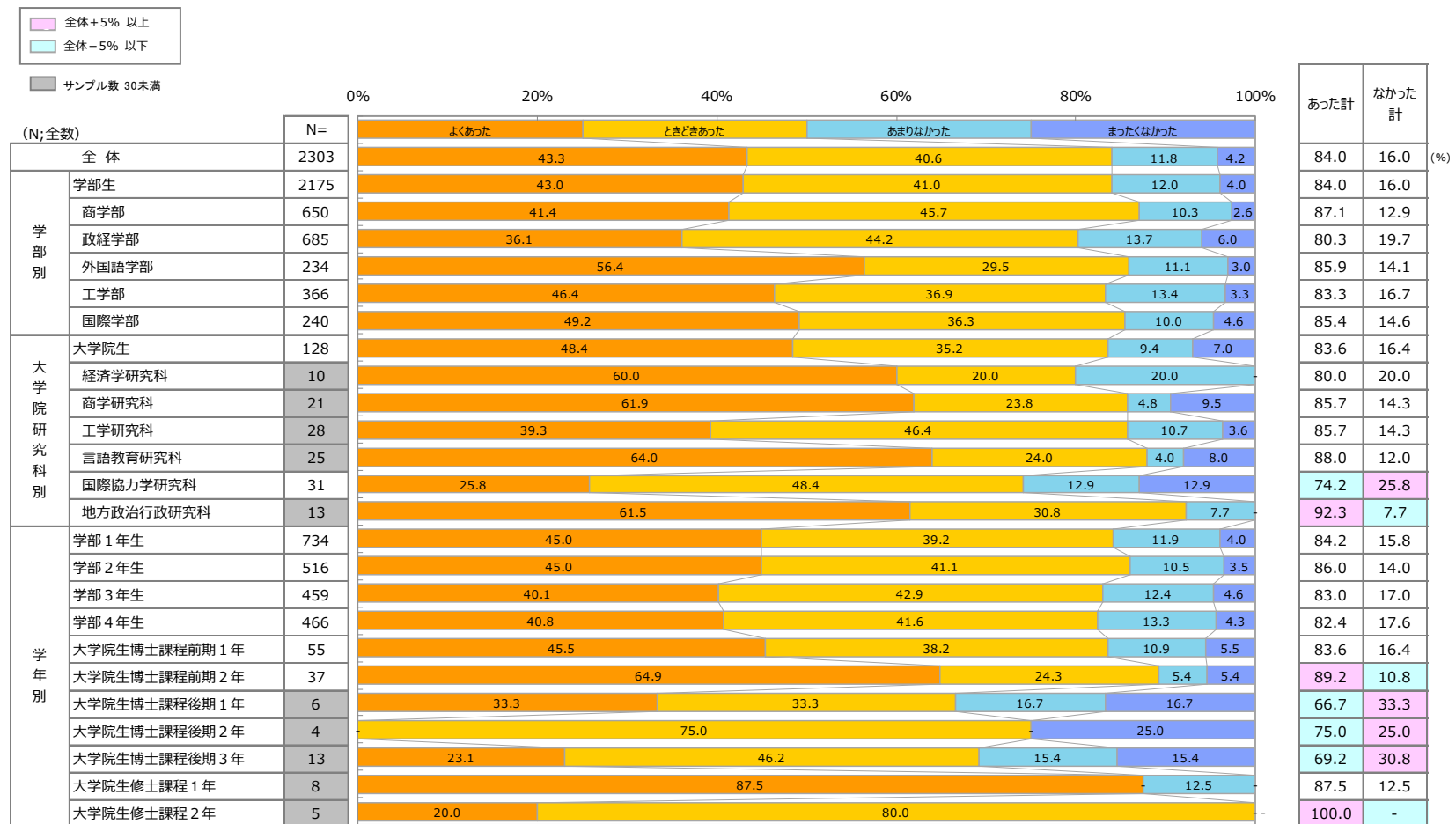


授業時間外の学修態度

他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無

Q12.他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強したことがありますか。(SA)

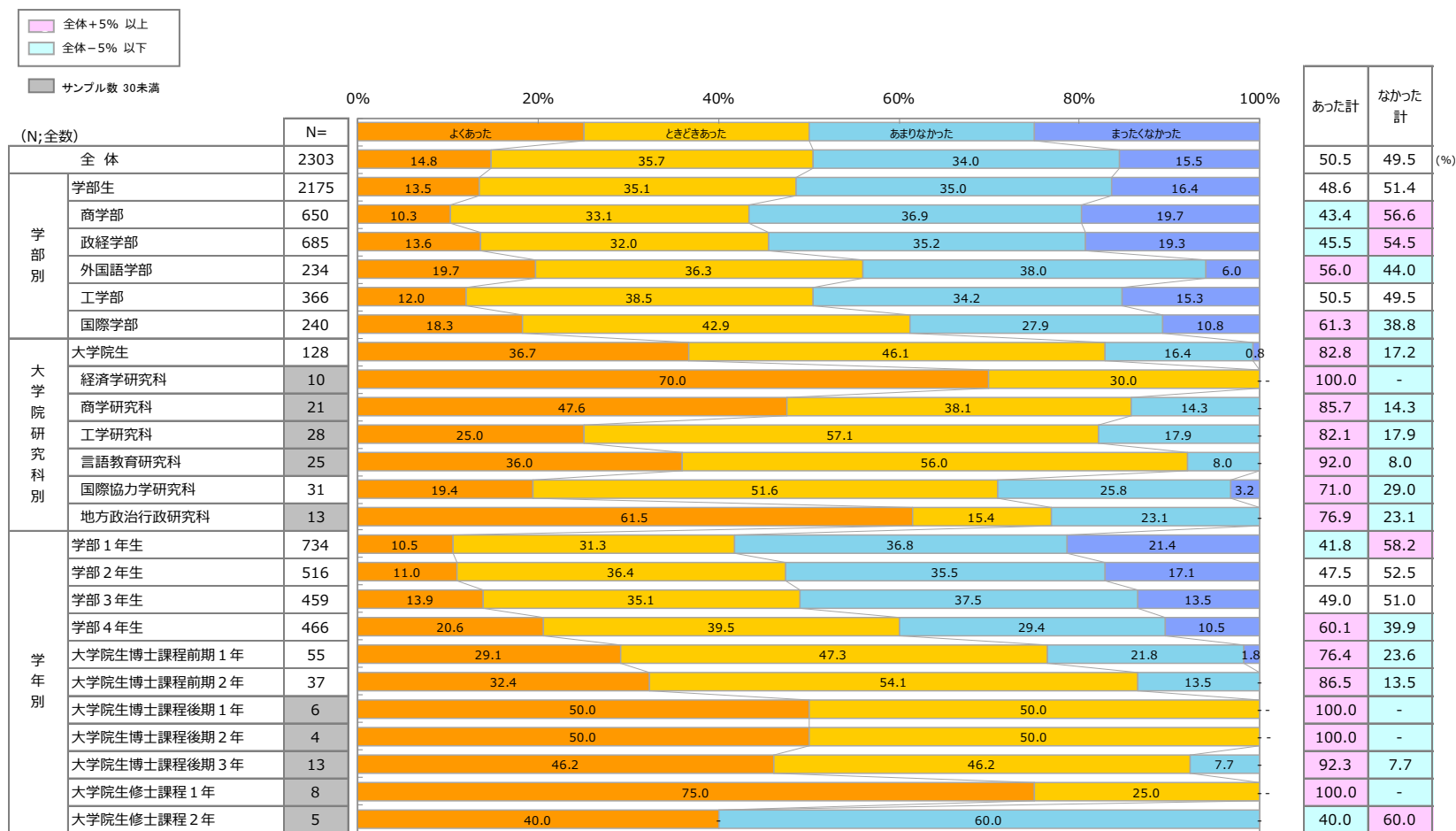
- ・他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の84.0%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の16.0%を上回る。
- ・学部別では、各学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。
「あった計」をみると、商学部が87.1%（全体より+3.1pt）で最も高い。大学院生は「あった計」が83.6%。
- ・学年別で学部生の「あった計」をみると、2年生が86.0%で最も高く、続いて1年生の84.2%となった。



教職員への学修に関する相談経験有無

Q13.教職員に学修に関する相談をしたことがありましたか。(SA)

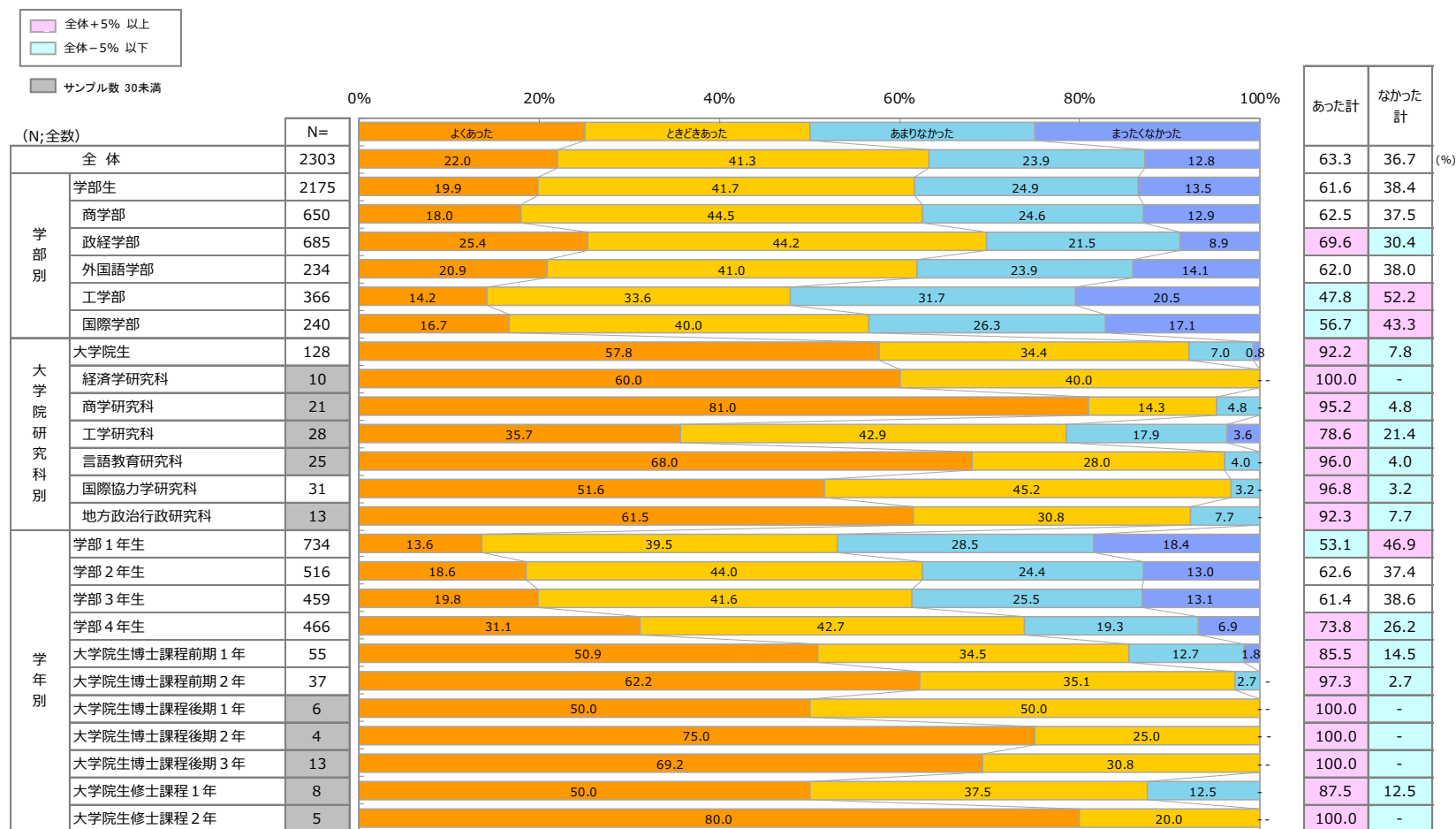
- ・教職員への学修に関する相談経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の50.5%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の49.5%と半々の結果。
- ・学部別では、外国語学部、工学部、国際学部で「あった計」が「なかった計」を上回る。「あった計」をみると、国際学部が61.3%（全体より+10.8pt）で最も高い。大学院生は「あった計」が82.8%と、学部生よりも高い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「あった計」が上がる。



授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無

Q14.授業や課題のために図書館で資料・文献を調べたことがありましたか。(SA)

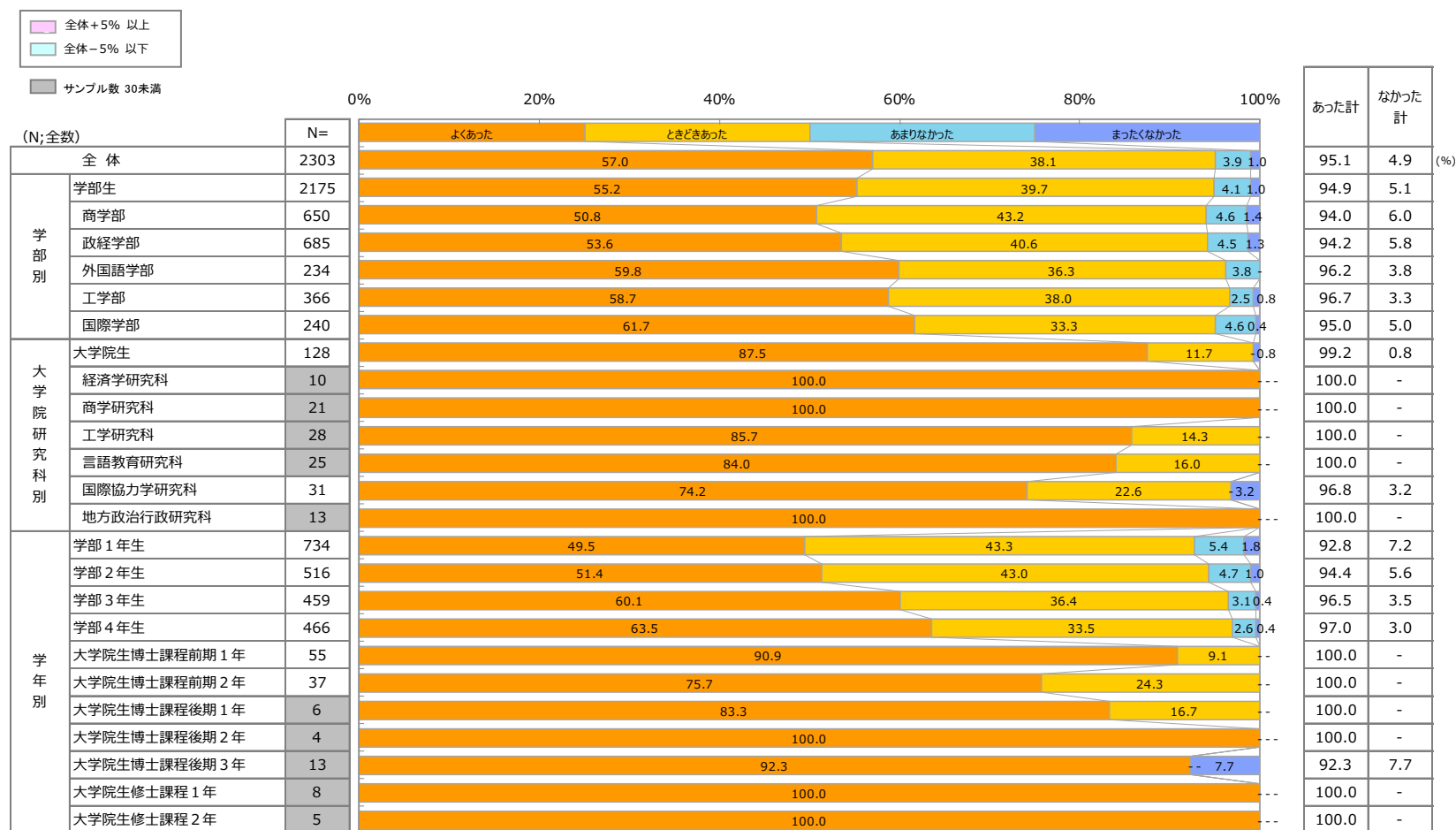
- ・授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験が「あった計（よくあった+ときどきあった）」は全体の63.3%と、「なかった計（あまりなかった+まったくなかった）」の36.7%を上回る。
- ・学部別では、工学部以外で「あった計」が「なかった計」を上回る。「あった計」をみると、政経学部が69.6%（全体より+6.3pt）で最も高い。大学院生は「あった計」が92.2%に達し、学部生よりも高い。
- ・学年別では、4年生が最も高く73.8%（全体より+10.5pt）。



授業や課題のためインターネットでの情報収集経験有無

Q15.授業や課題のためにインターネットで情報を集めたりしたことがありますか。(SA)

- ・授業や課題のためインターネットでの情報収集経験が「あった計（よくあった＋ときどきあった）」は全体の95.1%に達している。
- ・各学部をみても「あった計」は95%前後と大きな差はみられない。
大学院生は「あった計」が99.2%。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「あった計」が上がる。

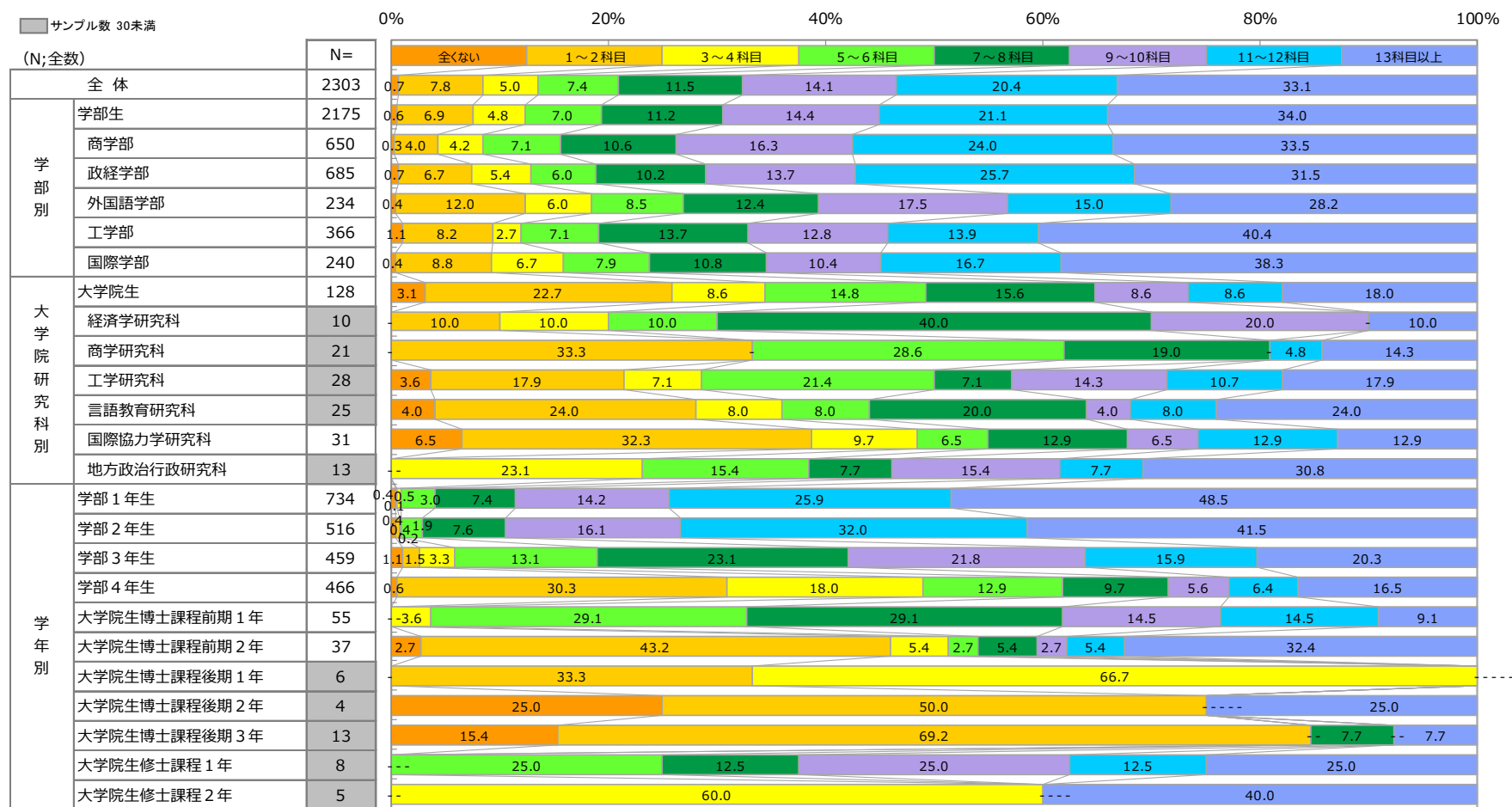


本年度の週当たりの 学修等時間

週当たりの授業出席科目数

Q16.どの程度授業に出席しましたか。(SA)

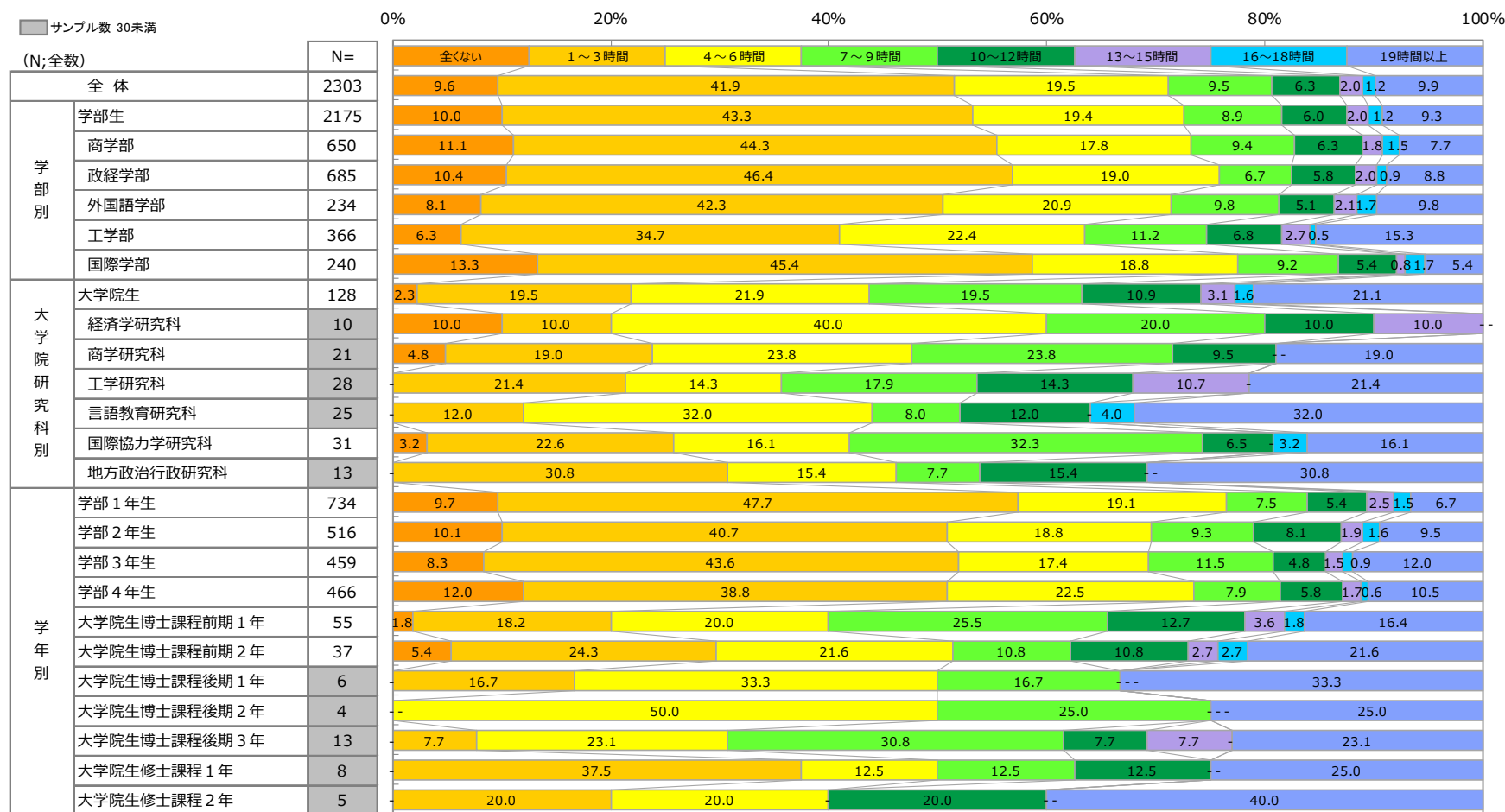
- ・週当たりの授業出席科目数は「13科目以上」が全体の33.1%で最も多い。「11～12科目」が20.4%、「9～10科目」が14.1%で続く。
- ・学部別では、全ての学部で「13科目以上」が最も多く、工学部が40.4%で最も高い。大学院生は「1～2科目」が22.7%と最も多く、以降、「13科目以上」が18.0%、「7～8科目」が15.6%と続く。
- ・学年別で学部生をみると、学部1年生と2年生は「13科目以上」が最も多い。3年生では「7～8科目」が23.1%、4年生では「1～2科目」が30.3%で最も多い。



週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間

Q17.授業時間以外に授業と関連した学修や経験をどの程度しましたか。(SA)

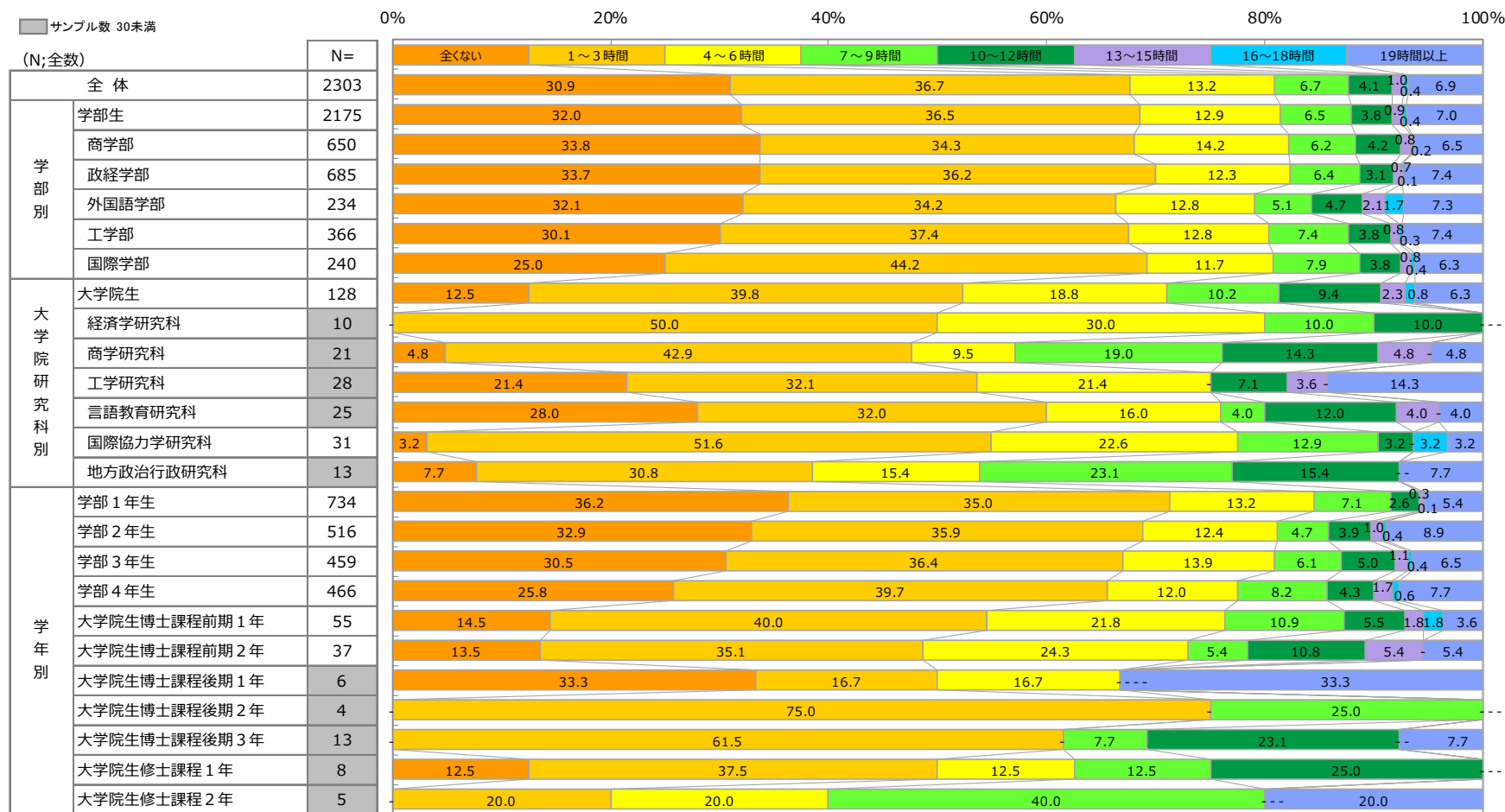
- ・週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間は全体でみると、「1～3時間」が41.9%で最も多い。以降、「4～6時間」が19.5%、「19時間以上」が9.9%で続く。なお「全くない」は9.6%。
- ・学部別では、全ての学部で「1～3時間」が最も多く、政経学部が46.4%で最も高い。なお、工学部は「19時間以上」が15.3%で他の学部より高い。大学院生は「4～6時間」が21.9%で最も多く、「19時間以上」が21.1%と続く。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「1～3時間」が最も多い。



週当たりの授業と関連しない読書時間

Q18.授業と関連しない読書をどの程度しましたか（マンガ・雑誌を除く）。（SA）

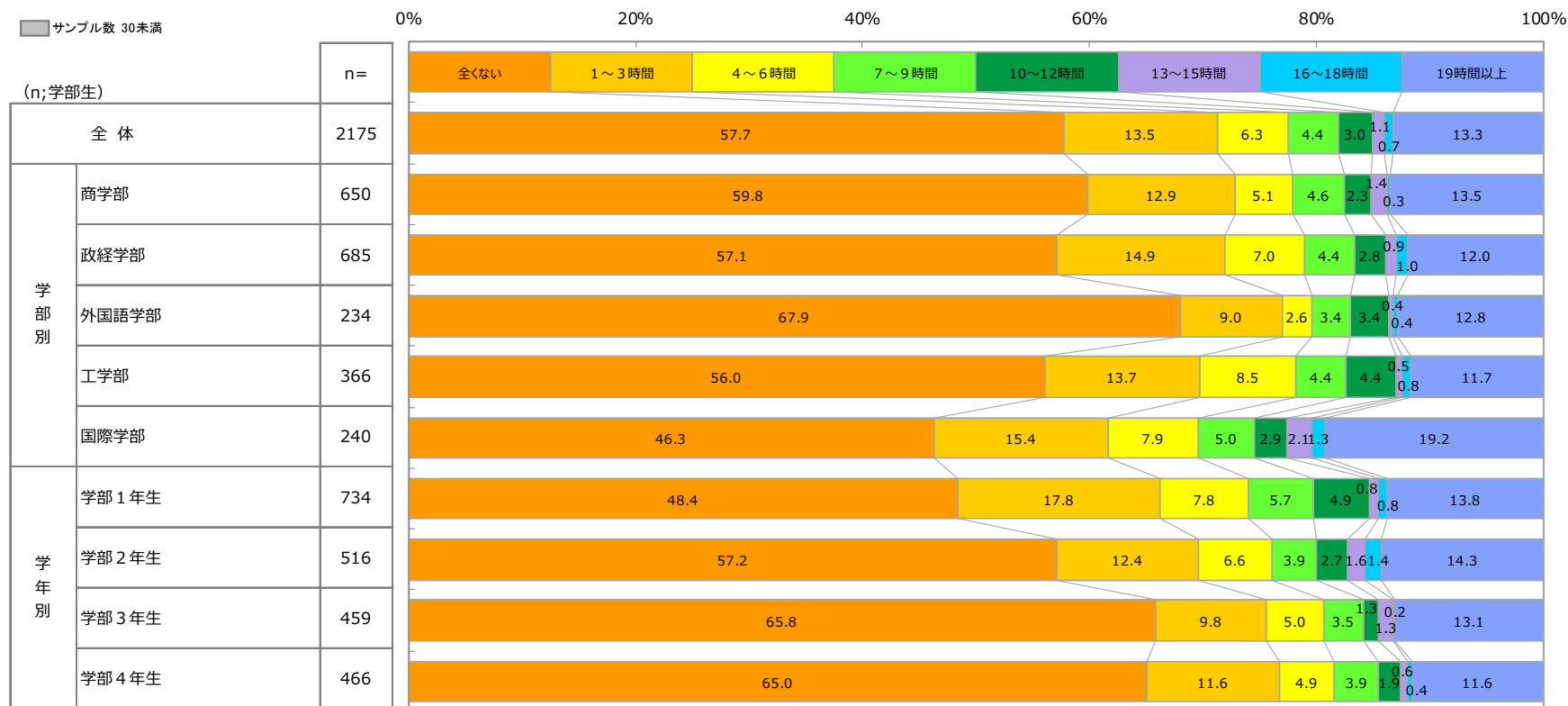
- ・週当たりの授業と関連しない読書時間は全体でみると、「1～3時間」が36.7%で最も多い。「全くない」は30.9%。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、国際学部（75.1%）が最も時間を割いており、工学部（69.9%）が続く。各学部で「1～3時間」は国際学部（44.2%）が最も高い。
- ・大学院生も「1～3時間」（39.8%）が最も多いが、「4～6時間」、「7～9時間」、「10～12時間」などで学部生より高く、学部生より時間を割いていることが窺える。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「1～3時間」が最も多い（「全くない」を除く）。



週当たりの部活動・サークル活動参加時間

Q19.どの程度部活動やサークル活動に参加しましたか。
(SA)

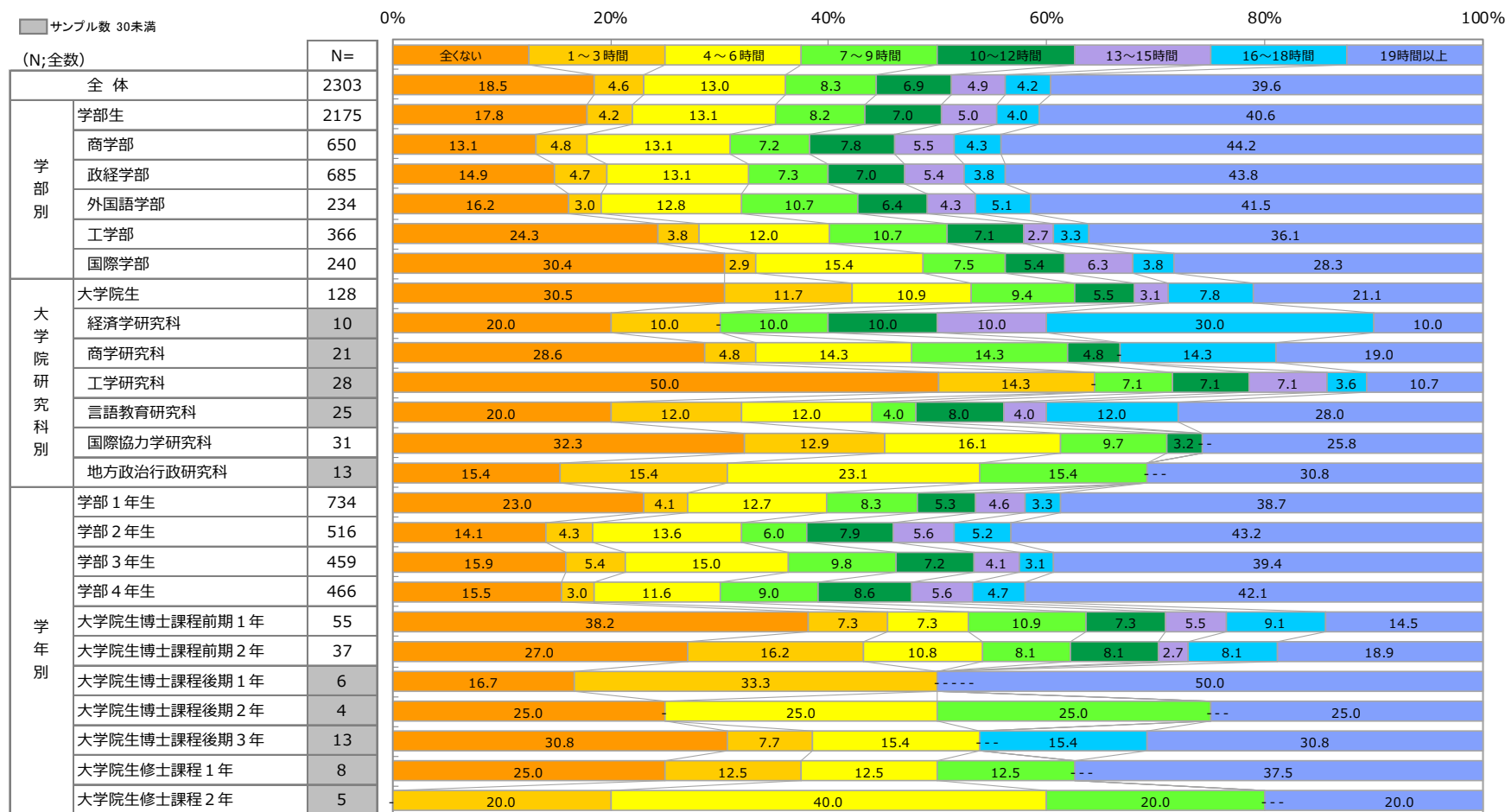
- 学部生の週当たりの部活動・サークル活動参加時間は全体でみると、「全くない」を除いて、「1～3時間」が13.5%で最も多い。「19時間以上」が13.3%で続く。
- 学部別で、1時間以上の合計をみると、国際学部（53.8%）が最も時間を割いており、工学部（44.0%）が続く。国際学部は「19時間以上」が19.2%と他の学部と比べて高くなっている。
- 学年別で学部生をみると、1年生の1時間以上の部活動・サークル活動の参加が最も多く（51.6%）、2年生（42.9%）と続く。



週当たりのアルバイト・就労時間

Q20.どの程度アルバイトや仕事をしましたか。(SA)

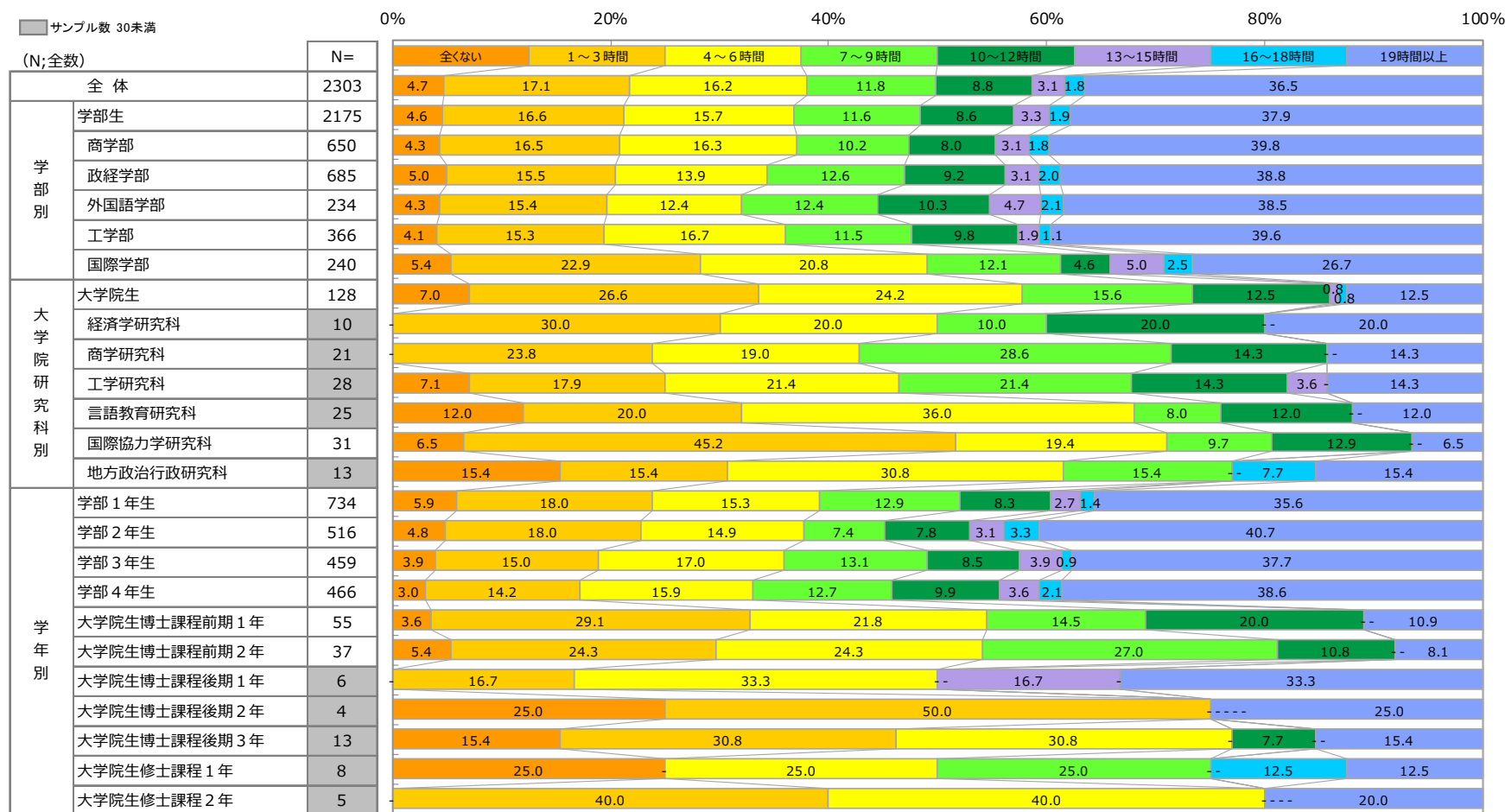
- ・週当たりのアルバイト・就労時間は全体でみると、「19時間以上」が39.6%で最も多い。「4～6時間」が13.0%、「7～9時間」が8.3%で続く（「全くない」を除く）。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、商学部（86.9%）が最も時間を割いており、政経学部（85.1%）、外国語学部（83.8%）が続く。
学部生は全ての学部で「全くない」を除き、「19時間以上」が最も多く、商学部（44.2%）、政経学部（43.8%）、外国語学部（41.5%）、工学部（36.1%）、国際学部（28.3%）の順で高い。
- ・大学院生も、「全くない」を除いて「19時間以上」が21.1%で最も多い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「19時間以上」が最も多い。



週当たりの個人的な趣味活動時間

Q21.どの程度個人的な趣味活動をしましたか。(SA)

- ・週当たりの個人的な趣味活動時間は全体でみると、「19時間以上」が36.5%で最も多い。「1～3時間」が17.1%、「4～6時間」が16.2%で続く。
- ・学部別で、1時間以上の合計をみると、学部間での差はさほどない（いずれも95%前後）。学部生は全ての学部で「19時間以上」が最も多い。
大学院生は「1～3時間」が26.6%で最も多い。
- ・学年別では、学部1年生から4年生までどの学年でも「19時間以上」が最も多い。

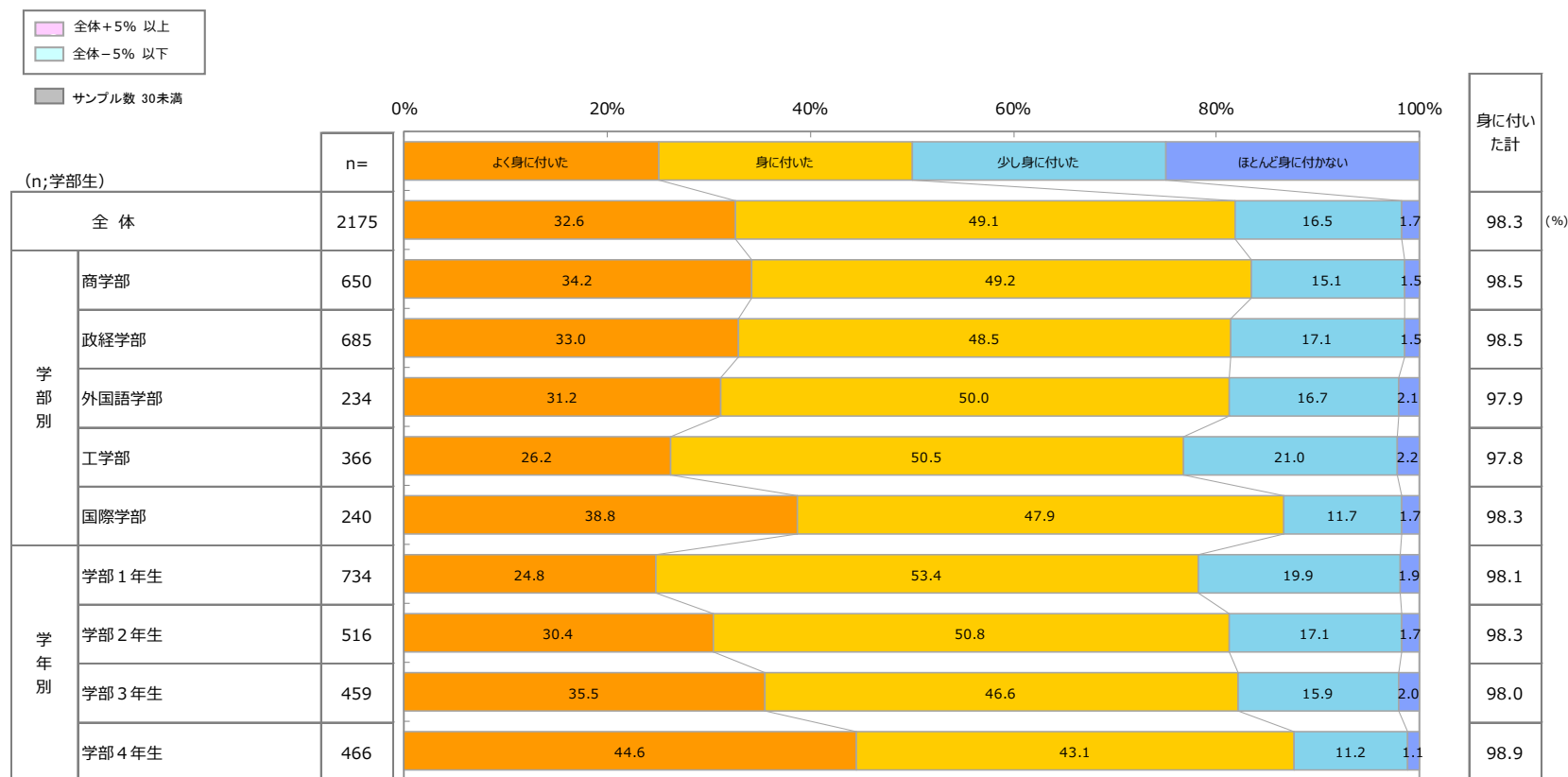


入学時と比べ、身に付いた
学修成果・経験

一般的な教養

Q22. 一般的な教養が身に付きましたか。(SA)

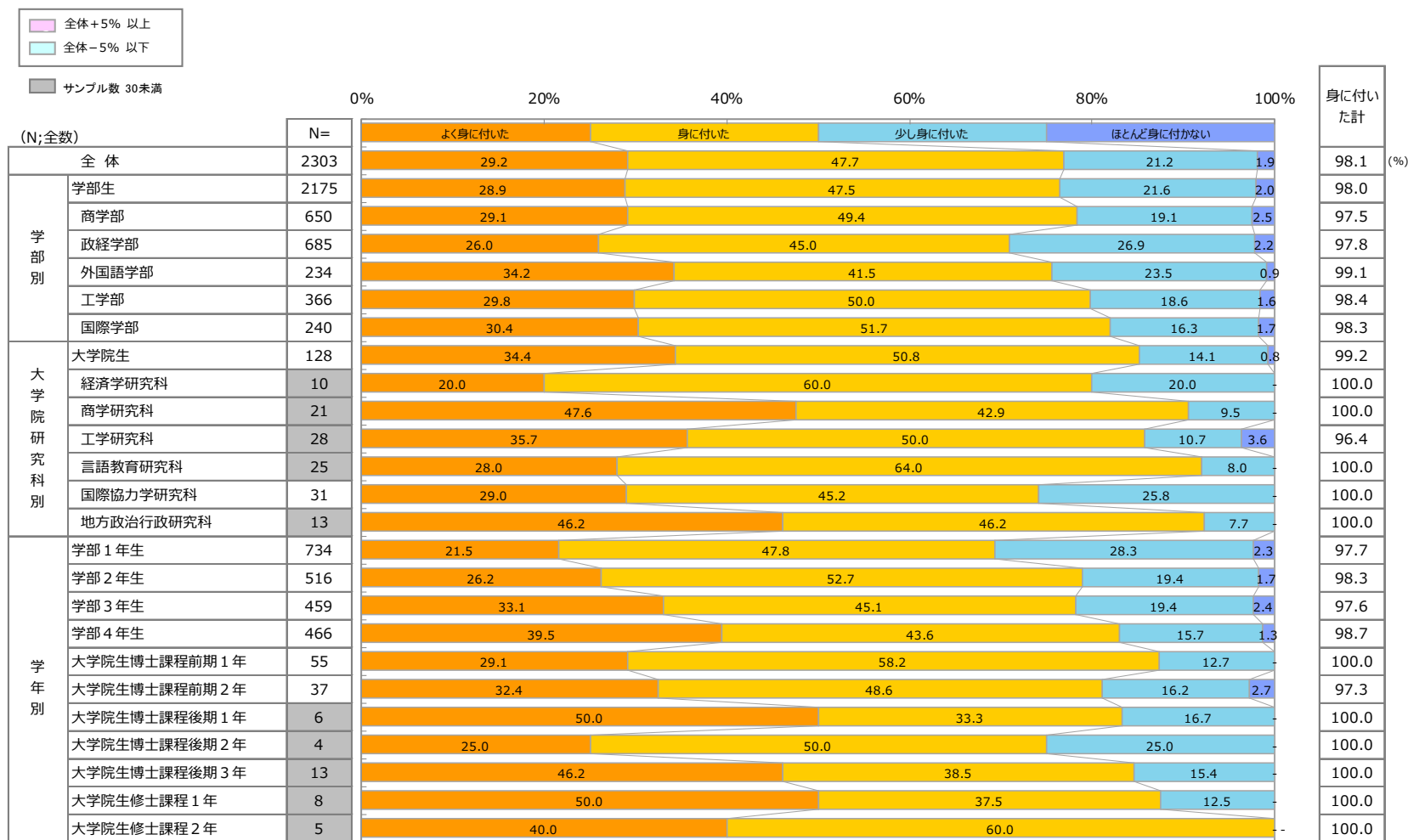
- 学部生の一般的な教養の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の98.3%に達し、「よく身に付いた」は32.6%となった。
- 学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」をみると、国際学部が38.8%で最も高く、商学部が34.2%、政経学部が33.0%と続く。
- 学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



専門分野に関する知識・技能

Q23.専門分野に関する知識・技能が身に付き了吗か。
(SA)

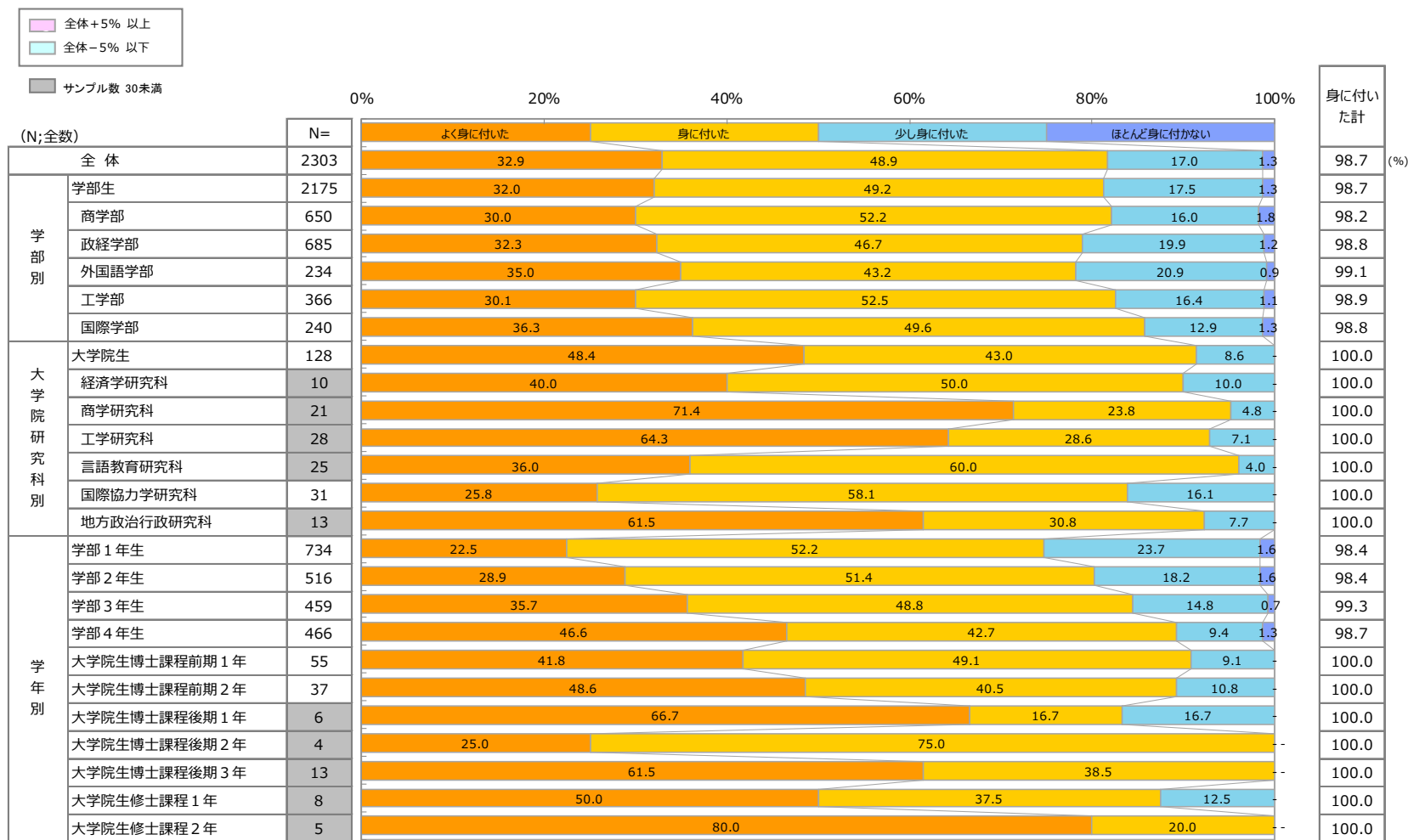
- 専門分野に関する知識・技能の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の98.1%に達し、「よく身に付いた」は29.2%となった。
- 学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」は外国語学部が34.2%で最も高く、国際学部が30.4%と続く。
大学院生は「身に付いた計」が99.2%に達し、「よく身に付いた」が34.4%となった。
- 学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力

Q24.情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力は身に付きましたか。(SA)

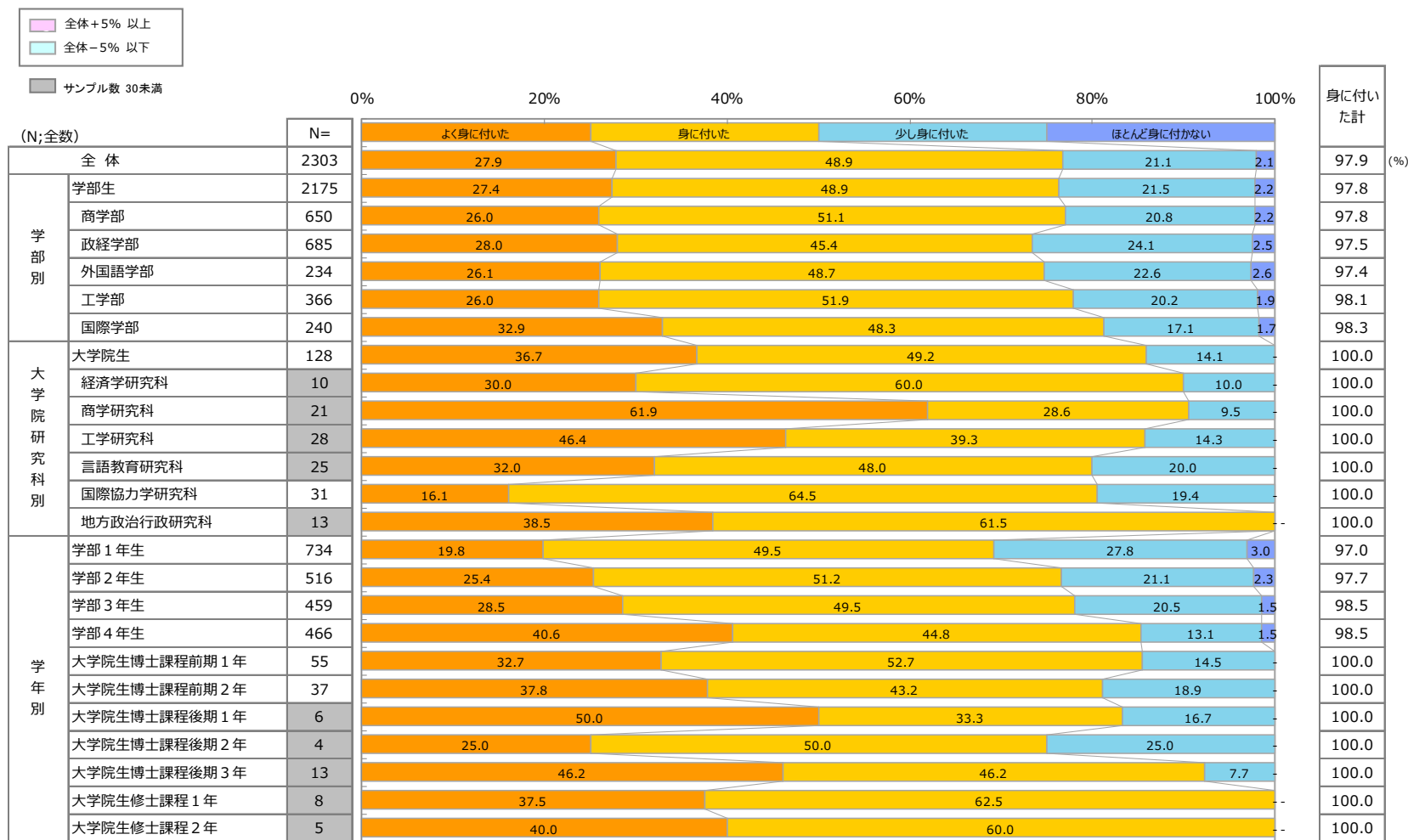
- ・情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の98.7%に達し、「よく身に付いた」は32.9%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」は国際学部が36.3%で最も高く、外国語学部が35.0%と続く。
大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が48.4%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力

Q25.物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力は身に付きましたか。(SA)

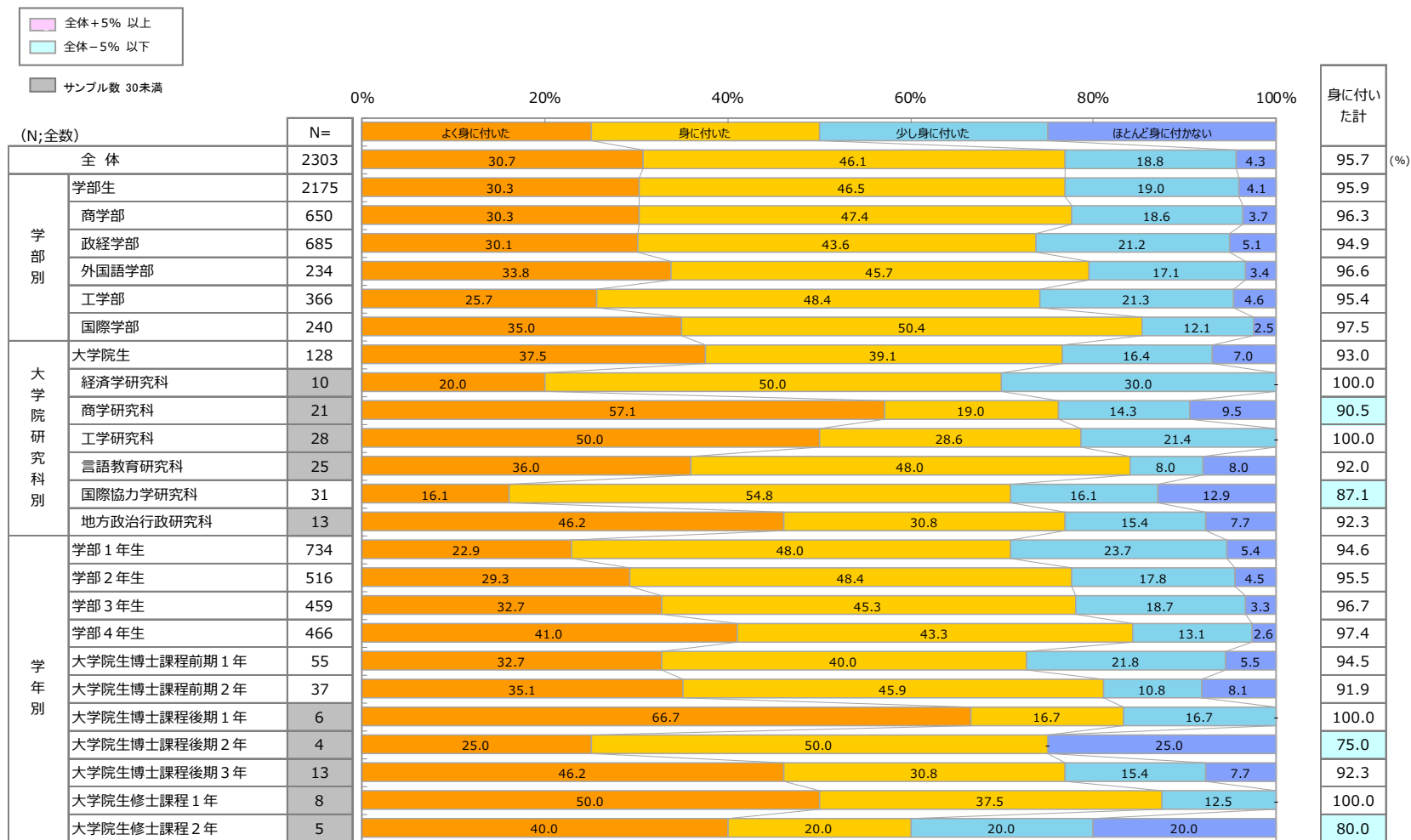
- 物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の97.9%に達し、「よく身に付いた」は27.9%となった。
- 学部別では、各学部で「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」は国際学部が32.9%で最も高く、政経学部が28.0%と続く。
大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が36.7%となった。
- 学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



他の人と協力して物事を進めていく力

Q26.他の人と協力して物事を進めていく力は身に付きましたか。(SA)

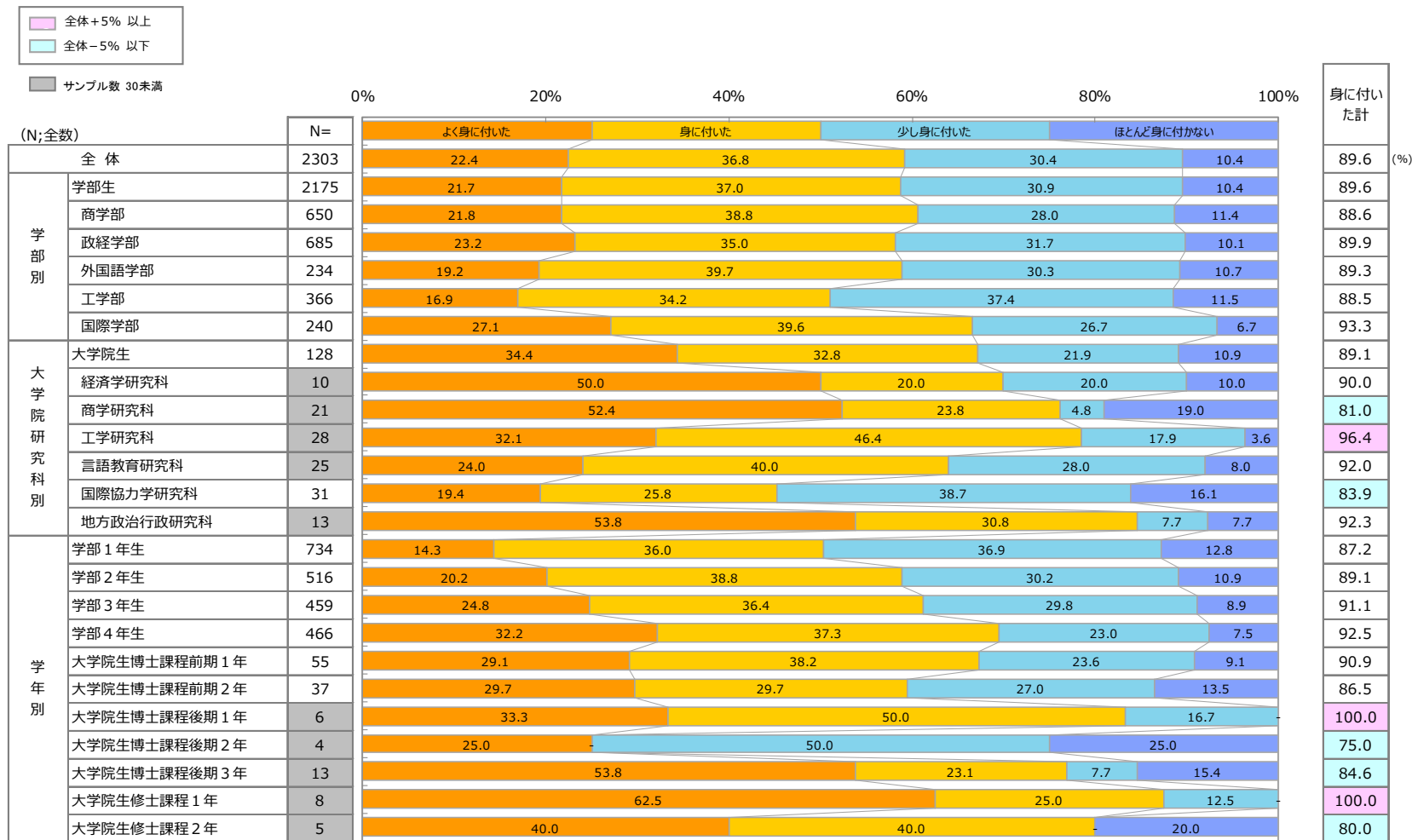
- ・他の人と協力して物事を進めていく力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の95.7%に達し、「よく身に付いた」は30.7%となった。
- ・学部別では、各学部で「身に付いた計」が90%以上。
「よく身に付いた」は国際学部が35.0%で最も高く、外国語学部が33.8%と続く。
大学院生は「身に付いた計」は93.0%で、「よく身に付いた」は37.5%。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



必要な場合のリーダーシップを発揮できる力

Q27.必要な場合のリーダーシップを発揮できる力は身に付きましたか。(SA)

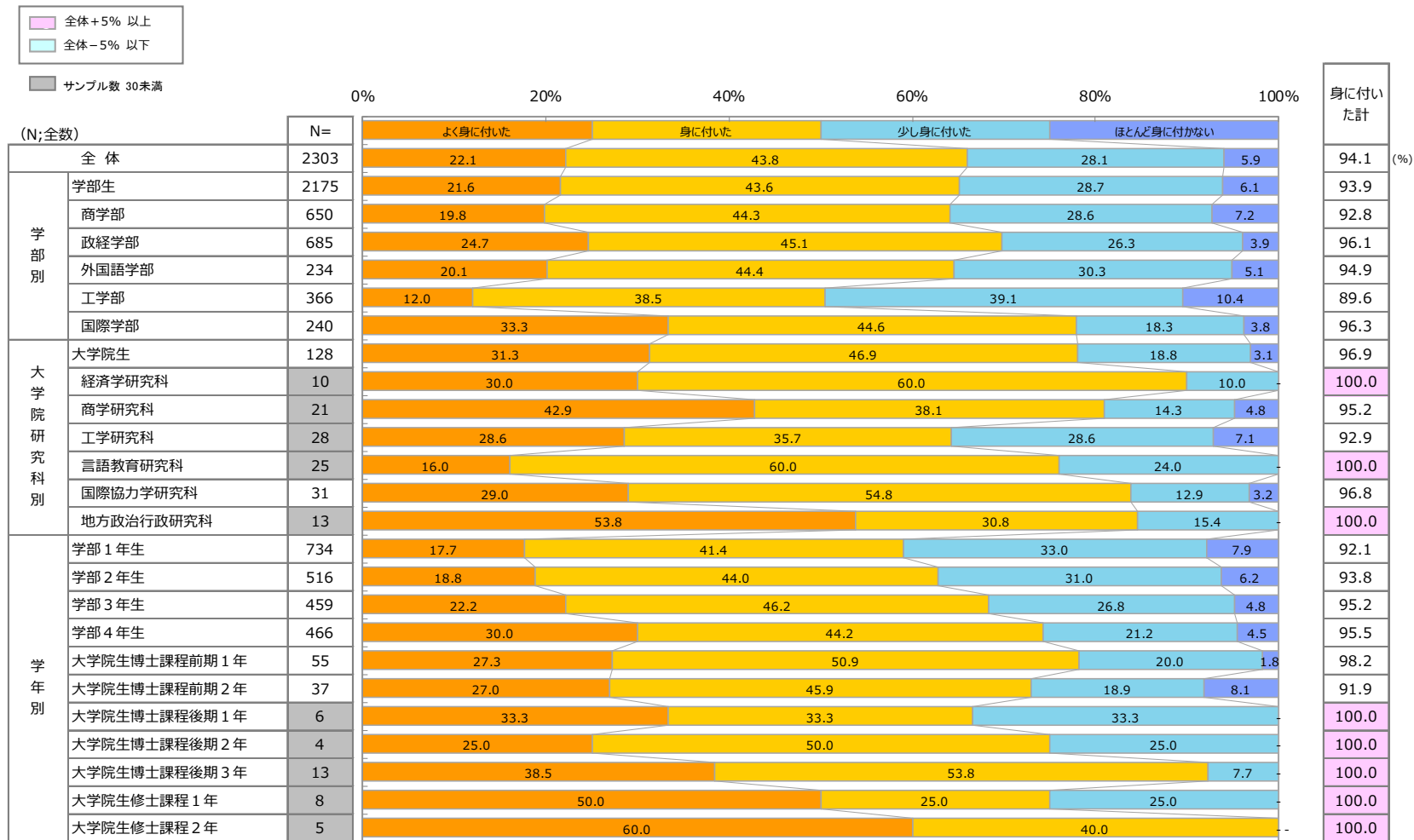
- ・必要な場合のリーダーシップを発揮できる力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の89.6%。「よく身に付いた」は22.4%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は国際学部が93.3%と最も高く、政経学部が89.9%で続く。「よく身に付いた」をみても、国際学部が27.1%と最も高く、政経学部が23.2%で続く。大学院生は「身に付いた計」が89.1%で、「よく身に付いた」は34.4%。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



社会（国民・地域・国際等）が直面する課題を 理解する力

Q28.社会（国民・地域・国際等）が直面する課題を理解する力は身に付き了吗。（SA）

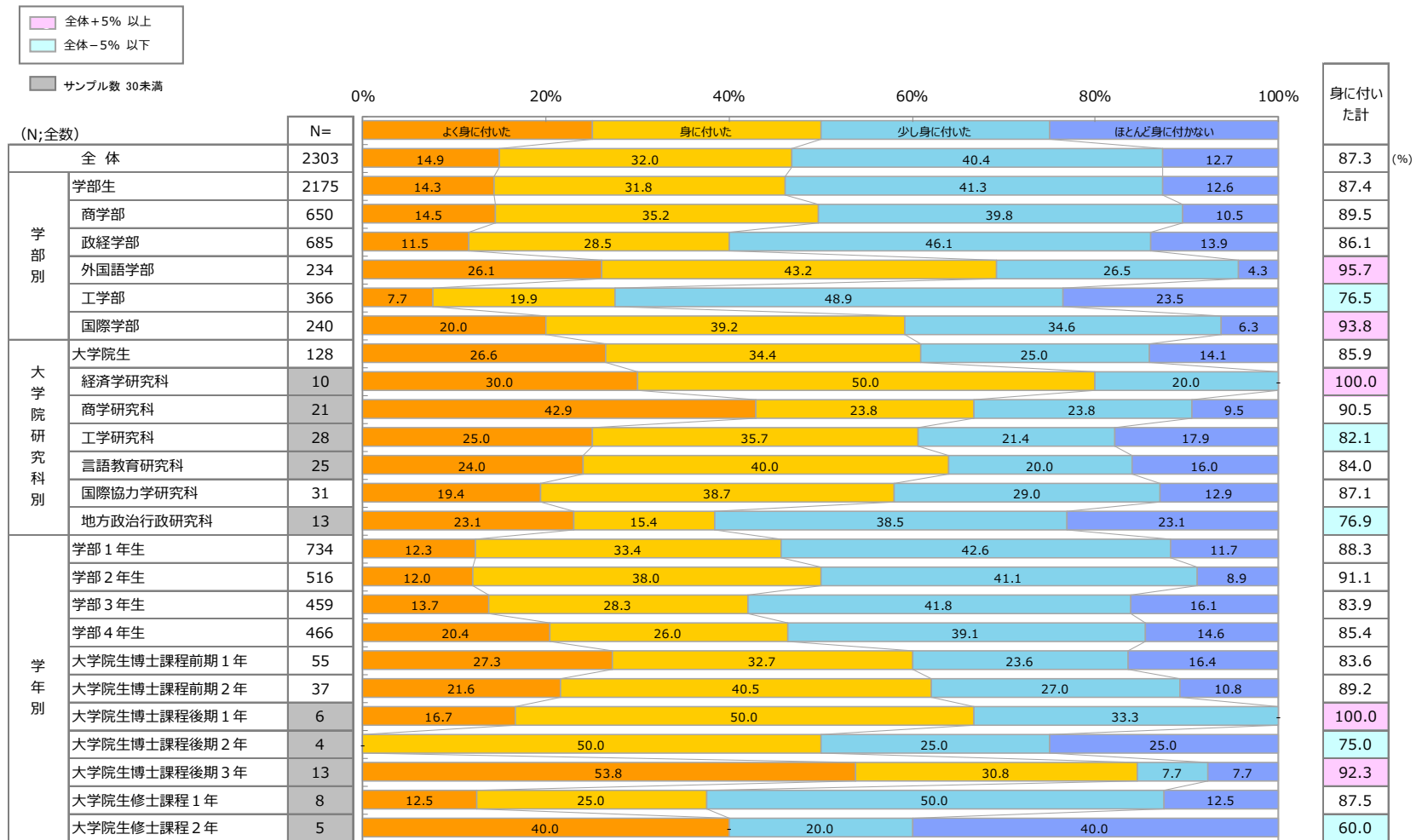
- ・社会（国民・地域・国際等）が直面する課題を理解する力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の94.1%に達し、「よく身に付いた」は22.1%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は国際学部が96.3%と最も高く、政経学部が96.1%で続く。「よく身に付いた」をみても、国際学部が33.3%と最も高く、政経学部が24.7%で続く。大学院生は「身に付いた計」が96.9%に達し、「よく身に付いた」が31.3%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



外国語の運用能力

Q29.外国語の運用能力は身に付きましたか。(SA)

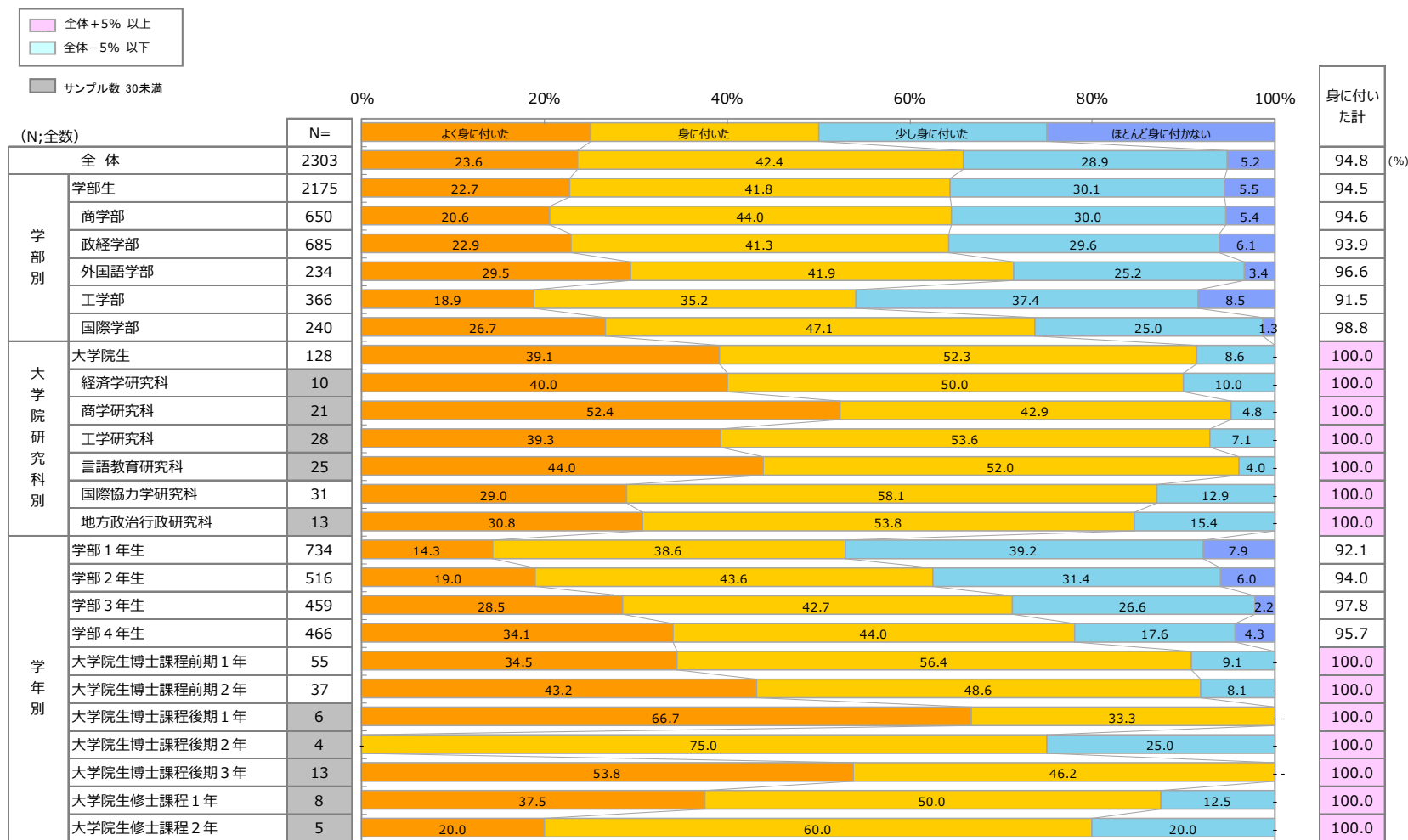
- 外国語の運用能力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の87.3%となり、「よく身に付いた」は14.9%となった。
- 学部別では、「身に付いた計」は外国語学部が95.7%と最も高く、国際学部が93.8%で続く。「よく身に付いた」をみても、外国語学部が26.1%と最も高く、国際学部が20.0%で続く。大学院生は「身に付いた計」が85.9%で、「よく身に付いた」が26.6%となった。
- 学年別で学部生をみると、「よく身に付いた」は学部1年生から3年生は12~13%程度に対し、4年生は20.4%。



学修した内容をまとめて、それを発表する力

Q30.学修した内容をまとめて、それを発表する力は身に付きましたか。(SA)

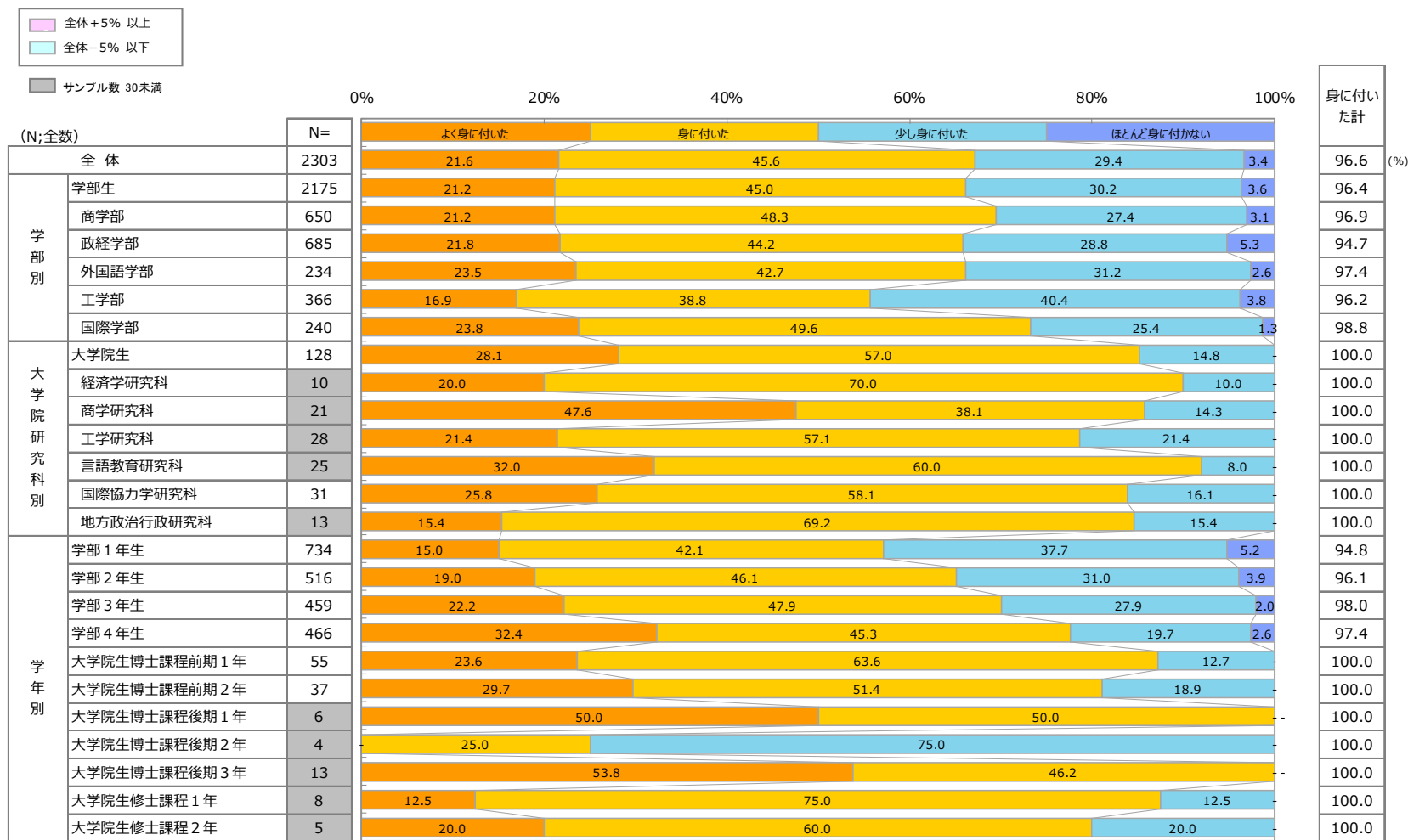
- 学修した内容をまとめて、それを発表する力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の94.8%に達し、「よく身に付いた」は23.6%となった。
- 学部別では、各学部で「身に付いた計」が90%以上。
「よく身に付いた」をみると、外国語学部が29.5%と最も高く、国際学部が26.7%で続く。
大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が39.1%となった。
- 学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



表現すべき内容を文章にして書ける力

Q31.表現すべき内容を文章にして書ける力は身に付きま
したか。(SA)

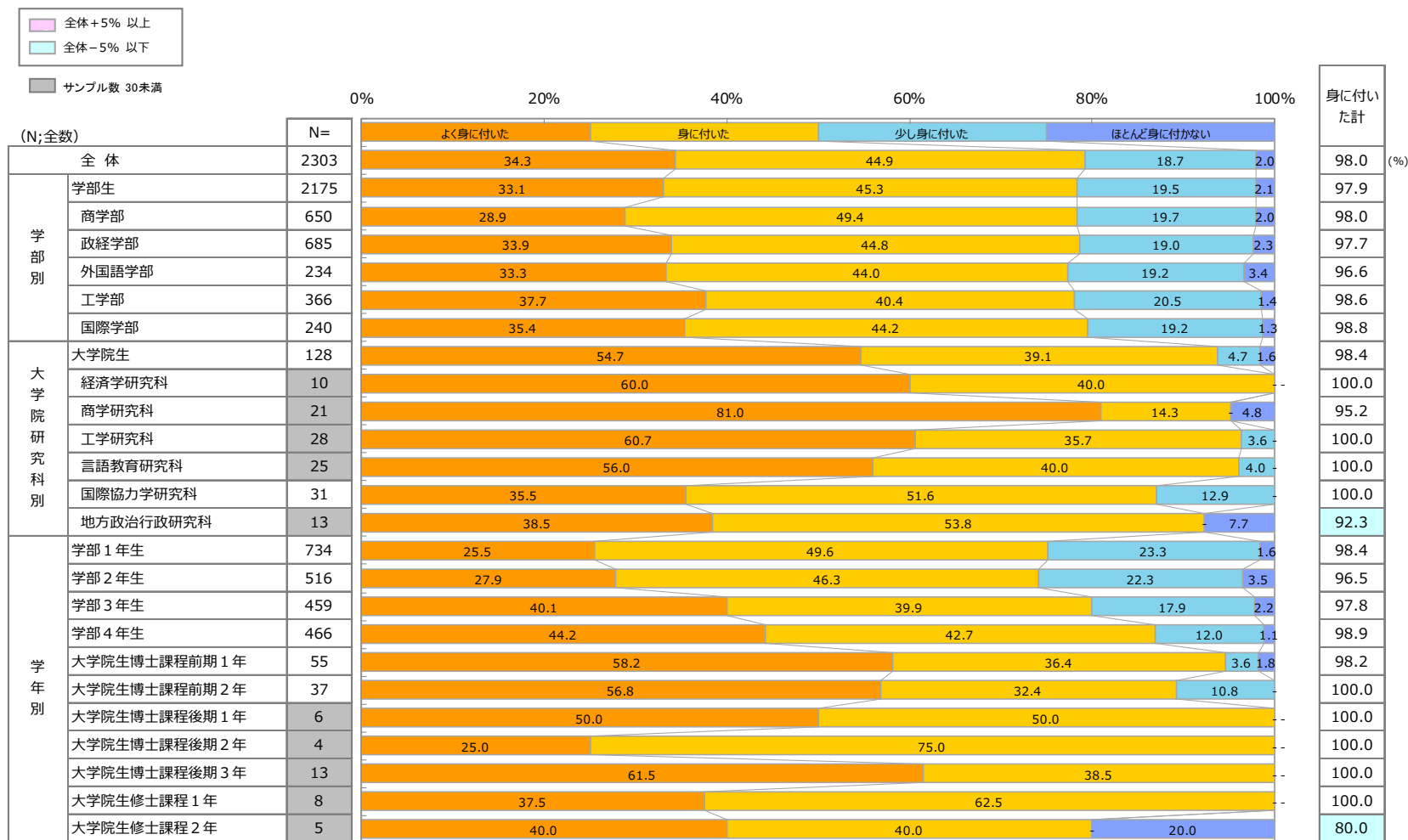
- ・表現すべき内容を文章にして書ける力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の96.6%に達し、「よく身に付いた」は21.6%となった。
- ・学部別では、「身に付いた計」は、全ての学部で90%以上。
「よく身に付いた」をみると、国際学部が23.8%と最も高く、外国語学部が23.5%で続く。
大学院生は「身に付いた計」が100.0%に達し、「よく身に付いた」が28.1%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。



パソコンで文書や資料を作成する力

Q32.パソコンで文書や資料を作成する力は身に付きましたか。(SA)

- ・パソコンで文書や資料を作成する力の「身に付いた計（よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた）」は全体の98.0%に達し、「よく身に付いた」は34.3%となった。
- ・学部別では、どの学部でも「身に付いた計」が95%以上。
「よく身に付いた」をみると、工学部が37.7%と最も高く、国際学部が35.4%で続く。
- ・大学院生は「身に付いた計」が98.4%に達し、「よく身に付いた」が54.7%となった。
- ・学年別では、学部1年生から4年生と上がるにつれ「よく身に付いた」が上がる。

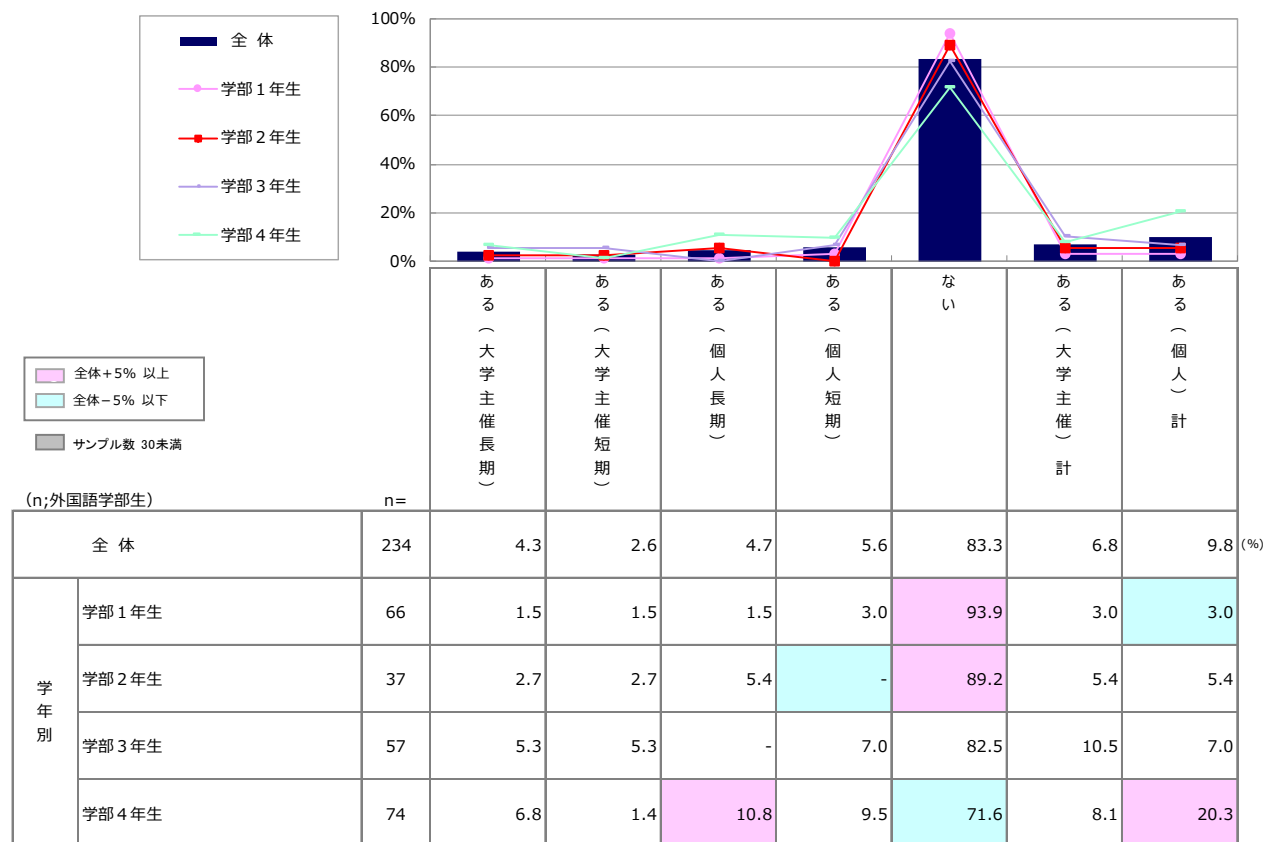


学部設問項目

海外での語学研修経験

Q33.海外で語学研修をしたことがありますか（入学以来本年度3月までの実施予定も含む）。（MA）
（外国語学部生のみ）

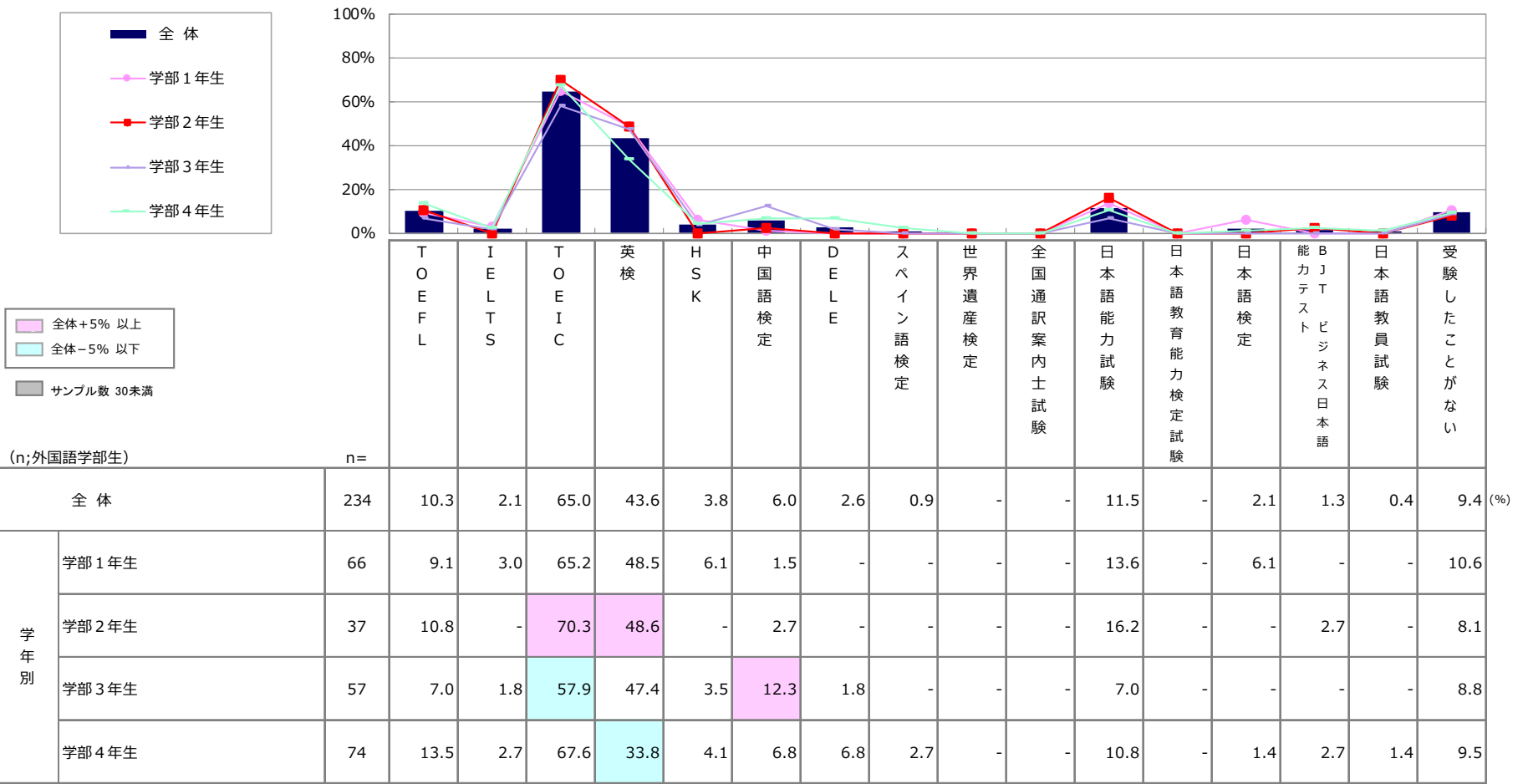
- ・外国語学部生の海外での語学研修経験は「ない」が83.3%。
「ある（個人）」計は9.8%と、「ある（大学主催）」計（6.8%）を上回る。
- ・学年別では、1年生は「ある（個人短期）」が3.0%、2年生は「ある（個人長期）」が5.4%で高い。
3年生は「ある（個人短期）」が7.0%で高いが、
合計でみると、大学主催の語学研修経験の方が個人の語学研修経験よりも高い。
4年生は「ある（個人長期）」が10.8%、「ある（個人短期）」が9.5%と、
個人の語学研修経験の方が大学主催の語学研修経験よりも高い。



語学検定試験受検有無

Q34.語学に関する検定試験を受検したことがありますか。
(MA) (外国語学部生のみ)
※以下の検定試験を受検したことがない方は、何もチェックせずに、次に進んでください。

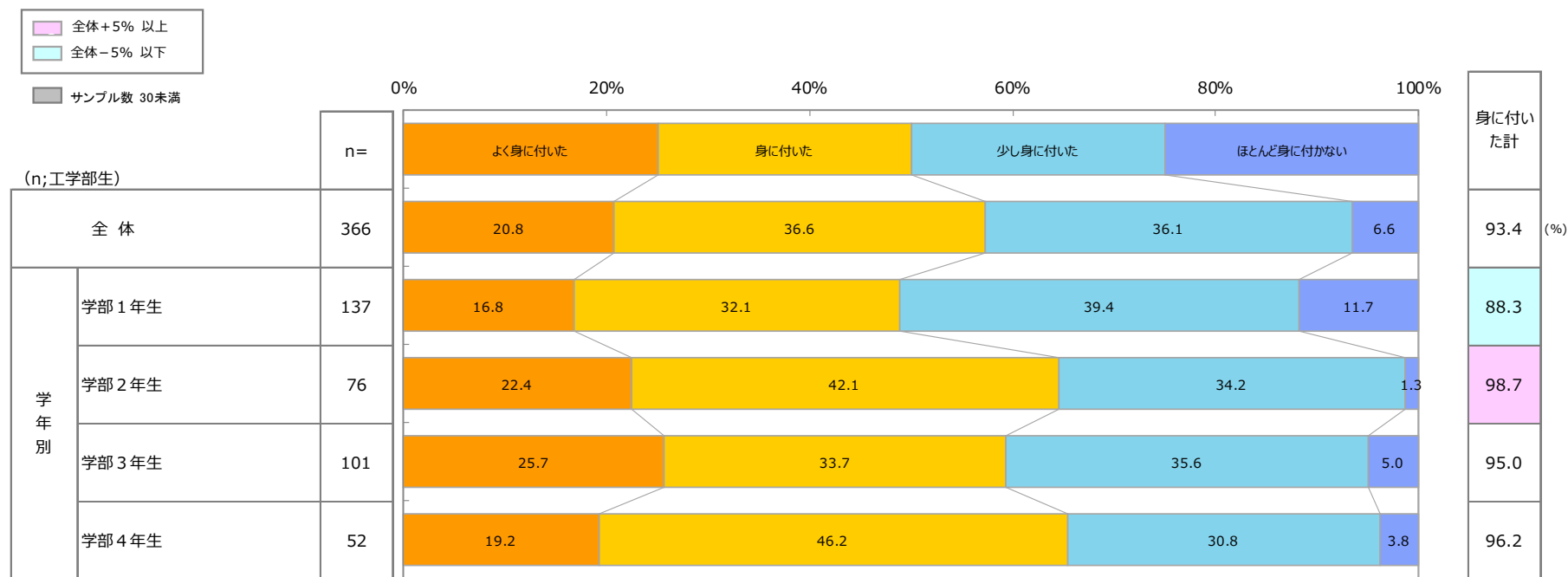
- ・受検経験がある語学検定試験は「TOEIC」が65.0%、「英検」が43.6%と英語の検定が上位にあがり、「日本語能力検定」が11.5%で続く。
- ・学年別でみると、「TOEIC」は2年生が70.3%と最も高く、3年生が57.9%と最も低い。「英検」は2年生が48.6%と最も高く、4年生が33.8%と最も低い。「日本語能力検定」は2年生が16.2%と最も高く、3年生が7.0%と最も低い。



リーダーシップ能力や課題に対する解決能力

Q35.実験・実習・演習によって、リーダーシップ能力や課題に対する解決能力が身に付き了吗か。(SA)
(工学部生のみ)

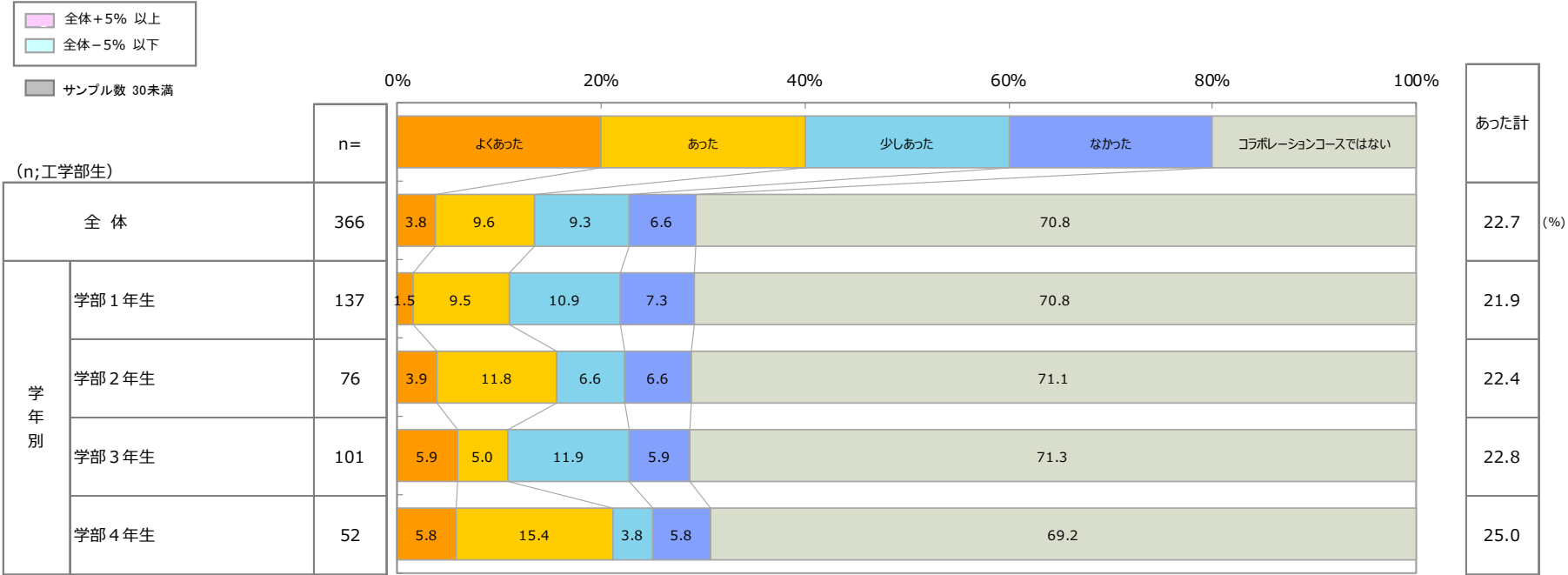
- 工学部生のリーダーシップ能力や課題に対する解決能力の「身に付いた計（よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた）」は全体の93.4%に達し、「よく身に付いた」は20.8%となった。
- 学年別では、2年生～4年生が「身に付いた計」が95%以上。1年生は88.3%。
「よく身に付いた」をみると、3年生が25.7%と最も高く、2年生が22.4%で続く。



コラボレーションコースでの他学科の教員や学生と話す機会の有無

Q36. (コラボレーションコースの学生への質問) コラボレーションコースの授業を履修して、他学科の教員や学生と話す機会がありましたか。
(SA) (工学部生のみ)

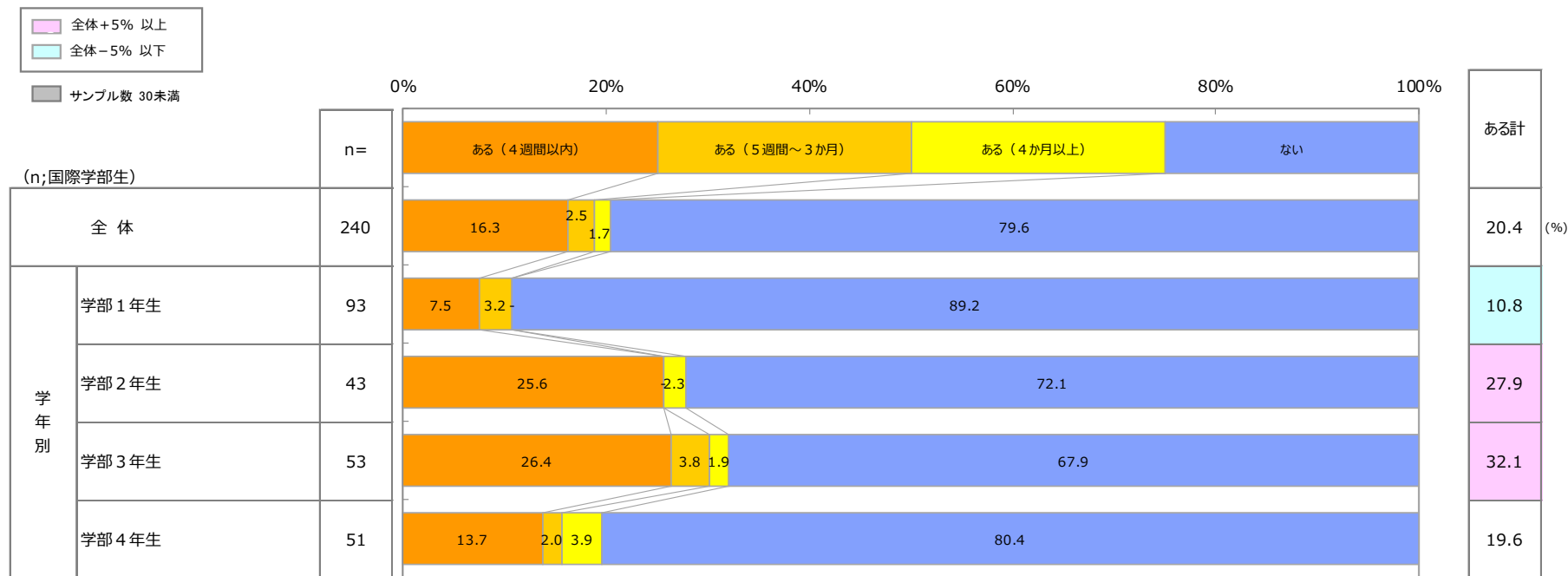
- ・コラボレーションコースでの他学科の教員や学生と話す機会が「あった計（よくあった+あった+少しあった）」は工学部生全体の22.7%。
- ・学年別でみると、学部1年生から4年生と上がるにつれ「あった計」が上がる。



海外研修経験

Q37.海外研修に参加したことがありますか、あるいは3月までに参加する予定がありますか。(海外短期研修・語学留学、海外ゼミ合宿、個人研修奨学金、長期留学、海外インターンシップ等) (SA)
(国際学部生のみ)

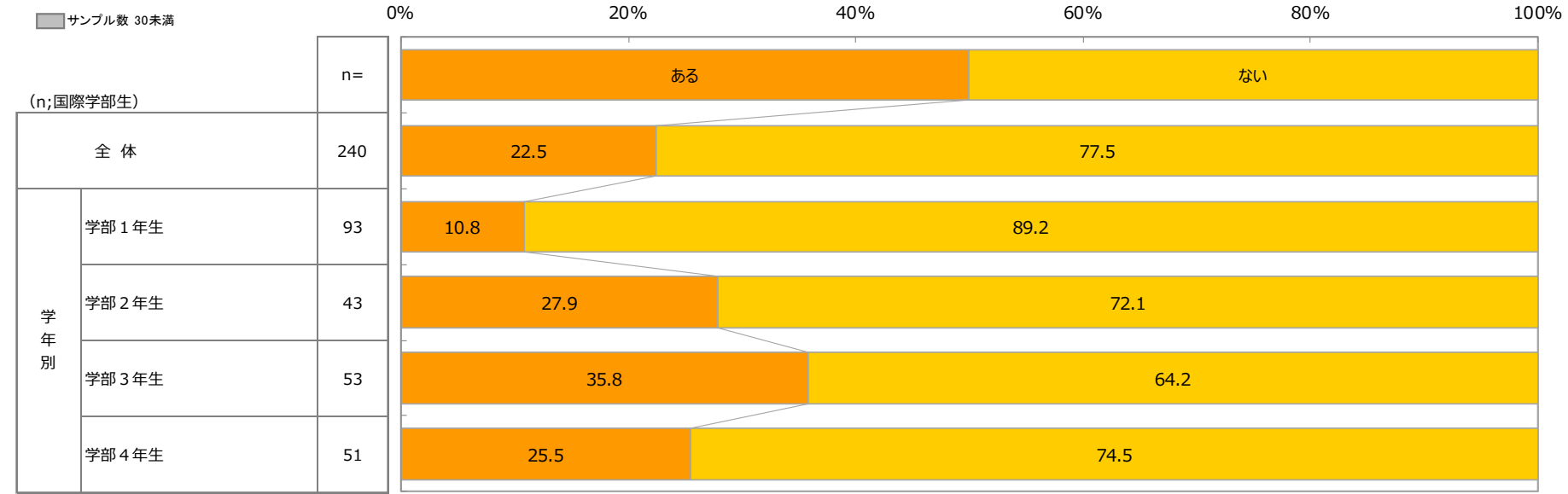
- 国際学部生の海外研修経験が「ある計（ある（4週間以内）+ある（5週間～3か月）+ある（4か月以上））」は全体の20.4%、「ない」が79.6%。
- 学年別では、「ない」を除いて全ての学年で「ある（4週間以内）」が最も多い。「ある（4週間以内）」では、3年生が26.4%と最も高く、2年生が25.6%で続く。



国内、国外におけるボランティア・NGO活動参加有無

Q38.入学以来、国内、国外におけるボランティア活動や
NGO活動に参加したことがありますか。(SA)
(国際学部生のみ)

- ・国際学部生の国内、国外におけるボランティア・NGO活動参加経験は「ある」22.5%。
- ・学年別でみると、参加経験率は3年生が35.8%で最も高く、1年生が10.8%で最も低い。



学修行動調査結果 に対する所見

1. 本年度の授業の中での経験について

令和4年度、令和5年度（以下「過去2年間」という。）の結果と比較すると、No.1～4の設問項目は3年連続で上昇しており、特にNo.3、4では大幅な改善が見られた。一方、No.5、6に関しては引き続き90%を大きく超える高い水準を維持しており、Blackboard、E-mail等を活用した教材・課題の受け取りや定期的な課題の出題が定着している様子が窺える。

No.	設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度
1	自分の考えや課題を発表する授業	83.3	84.8	87.6
2	教員への質問・意見を述べたことの経験	67.9	67.8	70.5
3	学生同士が議論する授業	73.1	74.0	80.0
4	演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業	58.5	60.7	67.3
5	定期的な小テスト・レポートのある授業	95.6	95.3	96.1
6	Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業	98.1	97.6	97.8

※「あった計（よくあった＋ときどきあった）」の比率（単位：％）

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

過去2年間の結果と比較すると、No.1は3年連続で上昇しており、学生間の学び合いが進んでいる様子が窺える。一方、No.2、3については令和5年度に一度数値が下がったものの、今年度はそれを大きく上回る結果となった。No.4はおおむね高水準を維持しており、インターネットでの情報収集が継続的に行われている様子が窺える。

No.	設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度
1	他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	77.5	80.3	84.0
2	教職員への学修に関する相談経験	43.5	42.6	50.5
3	授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験	56.9	52.8	63.3
4	授業や課題のためインターネットでの情報収集経験	95.4	94.8	95.1

※「あった計（よくあった＋ときどきあった）」の比率（単位：％）

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

過去2年間の結果と比較すると、No.4が再び「1～3時間」が最多となっており、令和5年度の「19時間以上」から減少に転じた。これは、コロナ禍後の活動の平常化に伴い、参加の頻度や時間にバラつきが出てきたことが要因と考えられる。その他の設問項目は大きな変化はなく、学生生活の安定した傾向が見られる。

No.	設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度
1	授業出席科目数	13科目以上(29.6%)	13科目以上(32.7%)	13科目以上(33.1%)
2	授業時間以外での授業関連学修・経験時間	1～3時間(41.1%)	1～3時間(42.1%)	1～3時間(41.9%)
3	授業と関連しない読書時間	1～3時間(38.3%)	1～3時間(34.5%)	1～3時間(36.7%)
4	部活動・サークル活動参加時間	1～3時間(13.6%)	19時間以上(15.0%)	1～3時間(13.5%)
5	アルバイト・就労時間	19時間以上(38.3%)	19時間以上(43.1%)	19時間以上(39.6%)
6	個人的な趣味活動時間	19時間以上(33.8%)	19時間以上(39.7%)	19時間以上(36.5%)

※各設問項目において最も選択された選択肢の比率（単位：％）

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

過去2年間の結果と比較すると、No. 3、5、6、10、11において引き続き上昇傾向が見られた。特に、「協働力」と「リーダーシップ」の上昇は、対人関係や主体性に関する能力の向上が継続していることが窺える。また、「外国語運用能力」についても、大幅に上昇しており、語学教育の成果が表れている。一方、「発表能力」は令和4年度から5年度にかけて大きく伸びた後、今年度はほぼ横ばいとなっている。

No.	設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度
1	一般的な教養	97.5	98.4	98.3
2	専門分野に関する知識・技能	97.9	98.5	98.1
3	情報収集力	98.4	98.6	98.7
4	課題発見・解決能力	97.7	97.4	97.9
5	協働力	94.1	94.3	95.7
6	リーダーシップ	84.3	85.4	89.6
7	社会が直面する課題の理解	93.3	92.8	94.1
8	外国語運用能力	84.1	83.6	87.3
9	発表能力	92.5	94.9	94.8
10	文章表現能力	95.0	96.3	96.6
11	パソコンで資料を作成する力	97.6	97.7	98.0

※「身に付いた計(よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた)」の比率(単位: %)

(2)長所と課題

設問項目の大半が90%以上の高水準となっており、学修成果は概ね達成されていると考えられる。「リーダーシップ」と「外国語運用能力」も80%後半となっており、引き続き教育効果の向上が窺える。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

今回の結果では、大きな課題は見られない。「情報収集力」、「協働力」、「リーダーシップ」、「文章表現能力」、「パソコンで資料を作成する力」は3年連続で数値が上昇しており、令和4年度から対面授業の割合を増やし、授業時間を90分から105分に変更した効果が現れていると考えられる。一方、「発表能力」は令和5年度に大きく伸びた後、今年度はほぼ横ばいとなった。今後もアクティブラーニングなどの学修者主体の手法を活用し、さらなる学修成果の定着と発展を図ることが求められる。

1. 本年度の授業の中での経験について

令和6年度は「教員への質問・意見を述べたことの経験有無」の「あった」の計では、全学部生平均が68.9%（令和5年度66.8%、令和4年度66.0%）であるのに対し、商学部は63.4%（令和5年度59.7%、令和4年度59.3%）と－5.5%（令和5年度－7.1%、令和4年度－6.7%）になっている。また、「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無」の「あった」の計の全学部生平均が66.4%（令和5年度60.1%、令和4年度57.6%）であるのに対し、商学部は60.8%（令和5年度51.8%、令和4年度53.4%）と－5.6%（令和5年度－8.3%、令和4年度－4.2%）となっている。3年間の経年比較でも、この二項目が特に弱い。

それでも、令和5年度、令和4年度に比べて改善が見られ実数も上向きである点は評価できる。令和6年度の商学部はすべての項目で全学部生の平均を下回っているものの総平均では－5%以内に収まっており、大教室で実施している専門科目が多いことを斟酌すると、「多くの受講生を抱えながらも、一方的な授業にならないよう配慮している教員が多いのではないか」との分析も成り立つ。ただし、「これでよし」とはできない。「FDの意義は今後に向けて100%に近づける処方を見出すことである」と認識し、取り組みの課題と捉えていきたい。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

令和6年度は「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無」、「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無」で、「あった」の商学部の平均が全学部生の平均を上回っている。そのうち、3年間の経年比較では、「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無」（令和6年度87.1%、令和5年度84.5%、令和4年度79.6%）が年を追うごとに高くなっている。

仮定ではあるが、「コロナ禍後の学生生活として、学生間のコミュニケーションが取れるようになったのではないかと推察できる。ただし、「教職員への学修に関する相談経験有無」で「あった」の計の全学部生の平均が48.6%（令和5年度41.5%、令和4年度41.0%）であるのに対し、商学部は43.4%（令和5年度35.6%、令和4年度37.3%）と－5.2%（令和5年度－5.9%、令和4年度－3.7%）とマイナス幅が大きい。この数値自体は上昇傾向にあるが、数値自体が低い。大学での学修では自主性が重んじられ、「自らノックしないと扉は開かない」ものだが、「ノックのできない学生」が半数を超えている実情は無視できないと認識している。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

令和6年度は「週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間」で、「全くない」が11.1%（令和5年度10.0%、令和4年度10.9%）、「1～3時間」が44.3%（令和5年度45.6%、令和4年度46.3%）と、商学部では半数以上の学生がこれらに時間を割いていない。「週当たりの授業と関連しない読書時間」では「全くない」だけで33.8%（令和5年度39.2%、令和4年度31.4%）を占めており、「1～3時間」の34.3%（令和5年度33.2%、令和4年度37.0%）を加えると、商学部では3人に2人以上の学生が時間を割いていない。

「週当たりの部活動・サークル活動参加時間」では「全くない」が59.8%（令和5年度61.7%、令和4年度61.0%）、「週当たりのアルバイト・就労時間」では「全くない」が13.1%（令和5年度14.6%、令和4年度16.5%）、「週当たりの個人的な趣味活動時間」では「全くない」が4.3%（令和5年度4.7%、令和4年度3.9%）となっている。

数値の多寡がどれだけの意味を持つかは一概には言えないが、ここで取り上げた項目の多くが認知能力のみならず非認知能力を高めることに繋がる。一人ひとりの学生に対し、状況を把握していく必要性を認識している。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

3年間の経年比較をしても、多少の差異はあるものの概ね100%近く、あるいは90%超の回答が寄せられている。総じて高等教育機関として、一定の役割を果たしていることを示している。

(2)長所と課題

3年間の経年比較でも、校内での日常的な授業等を通じた学びである「一般的な教養」や「専門科目」に対する学修成果で、100%近い学生が「身についた」と回答している。4年間の学びを通じて認知能力の向上を学生自身が実感できている点が長所である。

一方で、依然高い数値ではあるものの「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」、「外国語の運用能力」では「身についた」との回答が90%を切っている。継続した学修において確かな学力の定着は見られるが、非認知能力である「リーダーシップの醸成」と「外国語を通じたコミュニケーション能力の向上」が課題であり、注力する必要がある。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

ICTの進展は目覚ましいものがある。AIを授業や学生の学修指導にどう活用していけば良いのか戸惑う声も少なくない。こうした点については、FD等の研修機会を利用してボトムアップを図ることが求められる。

また、学生が「アクティブラーニング疲れ」を起こさないよう、105分授業に取り入れる際も手段が目的化しないようにしなければならない。学修効率の向上が目的のはずなのに、アクティブラーニングすること自体が目的にならないよう、今後研修の機会を設けたい。

5. 学部・研究科設問項目について

「海外での語学研修経験」の大学主催・個人の計では、1年が6.0%（令和5年度7.9%、令和4年度9.4%）、2年が10.8%（令和5年度13.7%、令和4年度14.3%）、3年が17.5%（令和5年度24.2%、令和4年度9.1%）、4年が28.4%（令和5年度30.8%、令和4年度33.4%）となっている。最終的には3割程度の学生が何かしらの「海外での語学研修経験」をしているが、1年から経験する学生は多くない。

しかし、「語学検定試験受験有無」では「受験したことがない」と回答した学生の全体の平均は9.4%（令和5年度7.9%、令和4年度6.0%）であり、資格取得への関心は高く、TOEICや英検、日本語能力試験での受験が多い。

「国内、国外のボランティア・NGO活動参加有無」では、「参加経験がない」と回答した人の平均は77.5%（令和5年度79.1%、令和4年度73.9%）と比較的多い。リーダーシップ能力や課題に対する解決能力では「身についた」と回答した人が93.4%（令和5年度93.8%、令和4年度93.0%）を占めており、商学部としての取組みに成果は見られるが、全体を俯瞰すると、商学部では外向きより内向きな学生が多い印象を与える数値である。

1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表する授業有無」、「教員への質問・意見を述べたことの経験有無」、「学生同士が議論する授業有無」、「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業有無」の項目は、政経学部の学問的性質や定員などの要因もあり、全学の中ではやや低調であるが、令和4・5年度と比較すると、いずれの項目も上昇傾向にある。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験有無」、「教職員への学修に関する相談経験有無」、「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験の有無」は、令和4・5年度と比較すると、いずれの項目も上昇傾向にある。

その一方で、「授業や課題のためインターネットでの情報収集経験有無」は95%前後で横ばいである。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間」は、60%弱の学生が0-3時間、「週当たりの授業と関連しない読書時間」は、約65%弱の学生が0-3時間、「週当たりの部活動・サークル活動参加時間」は、全くないが約60%の一方1-3時間が約15%、「週当たりのアルバイト・就労時間」と「週当たりの個人的な趣味活動時間」は、19時間以上が約40%で、学生の時間に関する項目は、いずれも横ばいである。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

「一般的な教養」、「専門分野に関する知識・技能」、「情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力」、「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」、「他の人と協力して物事を進めていく力」、「社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力」、「学修した内容をまとめて、それを発表する力」、「表現すべき内容を文章にして書ける力」、「パソコンで文書や資料を作成する力」は、いずれも90%を越える水準で推移している。

その一方で、「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」と「外国語の運用能力」は、80%台で推移しており、90%には届かないものの、令和4・5年度と比較すると、それぞれ5ポイント、3ポイント程度上昇している。

(2)長所と課題

政経学部の学びでは、学習成果の達成状況において、いずれも高水準を維持しているといえる。また、従来、大講義室での講義に代表されるような単一方向での授業が多い傾向にあるところ、自分の考えや課題を発表したり、教員へ質問や意見を述べたり、学生同士で議論したりするなどの学生主体の体験型授業の経験が増加傾向にあり、この点が長所であるといえる。

その一方で学生主体の体験型授業の数値は、全学的に見ればまだまだ向上の余地があるといえる。学問分野によって授業にも特徴があるという理解に立ちつつ、学生主体の体験型授業をどのように増やしていくかが課題となる。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

政経学部では、カリキュラム改定により、従来のプログラムによる学修に加えて、複数のプログラムを新設した。これらのプログラムは、いずれも座学のみではなく、実習なども伴う点で、学生主体の体験型学習の機会を増やす側面も有している。もっとも、これらのプログラムは始まったばかりであることから、従来の授業における課題を解決する一助となるよう、プログラム学修を学生によりよく勧奨していくことが有効であると思われる。

外国語学部 - 1

1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表する授業」「教員への質問・意見を述べた経験」は、学内でも特に高い割合を示しており、学生の主体的な学びが定着していることがわかる。「学生同士が議論する授業」も大きく伸びており、アクティブ・ラーニングの浸透が窺える。

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度
自分の考えや課題を発表する授業有無	95.2	96.1	97.4
教員への質問・意見を述べた経験有無	79.8	81.9	83.8
学生同士が議論する授業有無	79.8	79.9	86.3
演習・実習・フィールドワークなど体験授業有無	56.0	59.1	73.1
定期的な小テスト・レポートのある授業有無	94.0	95.7	98.7
Bb、E-mail等で教材・課題の受け取りや提出を行う授業有無	98.2	98.8	97.9

※「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(単位: %)

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

昨年懸念された「図書館で資料・文献を調べた経験」の割合は大きく回復した。授業の中での資料活用の促しや工夫が反映された結果だと考えられる。学生間の学び合いや教職員との相談も着実に広がりを見せている。

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度
他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	81.5	81.9	85.9
教職員への学修に関する相談経験	45.2	51.2	56.0
授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験	47.6	45.3	62.0
授業や課題のためインターネットでの情報収集経験	95.2	94.5	96.2

※「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(単位: %)

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

授業外の授業関連学修時間は「1～3時間」が最多で全体の4割を占め、「授業と関連しない読書時間」も「1～3時間」が34.2%と最も多い。

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度
授業出席科目数	13科目以上33.3%	13科目以上29.9%	13科目以上28.2%
授業時間外の授業関連学修・経験時間	1～3時間38.1%	1～3時間42.1%	1～3時間42.3%
授業と関連しない読書時間	1～3時間43.5%	全くない38.2%	1～3時間34.2%
部活動・サークル活動参加時間	全くない66.7%	全くない63.0%	全くない67.9%
アルバイト・就労時間	19時間以上45.8%	19時間以上48.4%	19時間以上41.5%
個人的な趣味活動時間	19時間以上37.5%	19時間以上43.7%	19時間以上38.5%

※各項目設問において最も選択された選択肢の比率(単位: %)

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

多くの項目で高い割合が維持されており、全体として着実な学修成果が見られる。「専門知識」や「情報収集力」は引き続き高い割合を示している。一部の項目では前年よりやや減少も見られるが、全体として大きな変動はない。

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度
一般的な教養	95.8	99.2	97.9
専門分野に関する知識・技能	98.2	98.4	99.1
情報収集力	98.8	98.8	99.1
課題発見・解決能力	96.4	98.8	97.4
協働力	94.6	93.7	96.6
リーダーシップ	82.1	85.8	89.3
社会が直面する課題の理解	88.7	92.5	94.9
外国語運用能力	96.4	96.1	95.7
発表能力	94.0	98.8	96.6
文章表現能力	95.2	98.0	97.4
パソコンで資料を作成する力	97.6	98.0	96.6

※「身に付いた計(よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた)」の比率(単位:%)

(2)長所と課題

学生が自分の考えを発表したり、教員や学生同士と意見交換を行ったりする授業が多く、主体的な学びが実践されていることや、専門知識や情報収集力などの学修成果を実感している学生が多いことは長所と言える。一方で、授業外での学修時間は限られており、自主的な学習への取り組みには課題が残る。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

授業内容の定着を図るため、確認課題を課すなど、復習を促す工夫が求められる。また、図書館での調査や、資料収集などの課題を通じて、授業外での学びと授業をつなぐことも有効である。こうした実践を教員間で共有し、継続的に改善していくことが望まれる。

5. 学部・研究科設問項目について

(1) 海外での語学研修経験の有無

経験のない学生が圧倒的に多いという状況が依然として続いている。

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度
ない	85.1	83.1	83.3
ある(大学主催)	6.0	10.6	6.8
ある(個人)	9.5	7.1	9.8

(2) 語学検定試験受験の有無

TOEICの受験率が最も高い。日本語能力試験の受験率はR5で減少したがR6は大きく増加した。一方で、語学検定を受験していない学生の割合も年々増加している。

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度
TOEIC	63.1	65.0	65.0
英検	59.5	53.5	43.6
日本語能力試験	9.5	3.9	11.5
中国語検定	16.1	11.8	6.0
ない	6.0	7.9	9.4

1. 本年度の授業の中での経験について

「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」があったという回答が92.1%と前回、前々回のと同様に学部生全体の値よりも高く工学部の授業の特徴が表れている。「自分の考えや課題を発表する授業」があったという回答は84.4%と前回と同程度で学部生全体の値よりやや低いが8割以上があったという結果は十分高いと考えられる。「教員への質問・意見を述べたことの経験」があったという回答は70.8%と前回、前々回からやや減少しているが、学部生全体の値68.9%と同程度であり問題ないと思われる。「学生同士が議論する授業」があったという回答は76.0%で前回、前々回より段階的に増加しているが、学部生全体の値よりも低い、工学部の学部レベルで扱う内容は客観性が高く議論の余地が少ないことも影響しているかもしれない。「定期的な小テスト・レポートのある授業」があったという回答は96.7%で前回と同様に極めて高いレベルにある。ただし、学部生全体の値ともほぼ同じで、工学部だけでなく大学の学部教育全体の授業の特徴であると言える。「Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業」があったという回答についても97.8%と前回、前々回と同様に極めて高いレベルにあるが、この回答についても大学の学部教育全体の授業の特徴であると言える。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験」があったという回答は83.3%と前回と同程度であり、学部生全体の値にも近く、学生同士と一緒に課題等に取り組んでいる様子がうかがわれる。ただし、誰かの答えをただ写しているだけでないことの確認は必要だと思われる。「教職員への学修に関する相談経験」があったという回答は50.5%で、前回とほぼ同じであり、学部生全体の値とも近い値になっている。約半数の学生が相談の経験があるということであるが、実際に授業で質問に来る学生は限られているという印象とは乖離しているように思われる。「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験」があったという回答は47.8%と前回、前々回よりは若干改善されているが、全学部で最低の値になっている。図書館よりもインターネットでの検索や生成系AIの利用が進んでいるためだと考えられるが、情報の信頼性の観点からは工学部生の図書館の利用が拡大していくことが望ましい。「授業や課題のためインターネットでの情報収集経験」があったという回答は96.7%で、前回、前々回と同様に極めて高いレベルにあり、前述のように図書館の利用経験が伸びない原因と考えられる。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「週当たりの授業出席科目」は13科目以上が40.4%で他学部よりも高いが、6科目以下が19.1%とやや多い、2極化が進んでいるようにも見られるが、4年生は卒業研究などだけという学生も多いので、1～3年と4年生を分けて集計した方がよいと思われる。「週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間」は前回、前々回と同様に19時間以上が全学部中で最多(15.3%)になっており、「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」が多いという工学部の特徴から授業外で課題に取り組む時間が多いことが考えられる。一方、「まったくない」を含む3時間以下の割合が41.0%あり、一定数の学生が課題に真面目に取り組んでいないのではないかと懸念がもたれ、改善が必要だと思う。「週当たりの授業と関連しない読書時間」は10時間以上が12.3%、「全くない」が30.1%と前回、前々回と同様な水準であった。他学部とも大きな差はないため工学部だけの特徴ではないが、「全くない」が3割を占めるのは残念に思う。「週当たりの部活動・サークル活動参加時間」は、「全くない」が56.0%で、前回、前々回と比べて、参加している学生が段階的に増加していることがわかる。これは全学部に通じた傾向で、コロナの5類移行後に部活動・サークル活動が活発さを取り戻してきていることを表していると考えられる。「週当たりのアルバイト・就労時間」は、前回、前々回と同様に、19時間以上が最も多く36.1%を占める。他学部に比べると若干少ないが、ほぼ半数にあたる学生が10時間以上働いており、学習への影響が懸念される。「週当たりの個人的な趣味活動時間」は、前回、前々回と同様に、19時間以上が最も多く39.6%となっている。また、「アルバイト時間」「授業外での学習時間」「読書時間」「部活動」などの時間の使い方とどのように関連しているのかそれぞれの項目を独立して評価しても学生像は見えにくく、学生の時間の使い方を類型化して調べるなどの工夫が必要だと思われる。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1) 学修成果の達成状況

「一般的な教養」が身に付いた学生の割合は、前回、前々回、また他学部とも同様に極めて高い値97.8%になっている。「よく身に付いた」の割合は、他学部よりも低い。工学部のカリキュラムにおける専門科目の比率が高いことに関連していると思われる。「専門分野に関する知識・技能」が身に付いた学生の割合は、前回、前々回、また他学部とも同様に極めて高い値98.4%になっている。「よく身に付いた」と「身に付いた」の合計は国際学部以外の学部よりも高い値になっており、工学部の「一般教養」と「専門科目」の比率を反映していると考えられる。「情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力」が身に付いた学生の割合は、前回、前々回、また他学部とも同様に極めて高い値98.9%になっている。「よく身に付いた」と「身に付いた」の合計は国際学部以外の学部よりも高い値(82.6%)になっており、専門分野と同様に「情報収集能力」を伸ばすカリキュラムになっていることがうかがわれる。「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」が身に付いた学生の割合は、前回、前々回、また他学部とも同様に極めて高い値98.1%になっている。「よく身に付いた」と「身に付いた」の合計は国際学部以外の学部よりも高い値(77.9%)になっており、「課題発見・解決能力」の学習成果も得られていることがわかる。「他の人と協力して物事を進めていく力」が身に付いた学生の割合は、前回、前々回、また他学部とも同様に高い値95.4%になっている。一方、「よく身に付いた」と「身に付いた」の合計は他学部よりも低く、個別のテーマを設定する卒業研究を含めて「個人の解決能力」を伸ばすカリキュラムになっていると考えられる。「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」が身に付いた学生の割合は、前回、前々回、また他学部とも同様に高い値88.5%になっている。一方、「よく身に付いた」と「身に付いた」の合計は他学部よりも低い。これは、グループよりも個別の成果が求められる工学部の特徴が表われていると考えられる。「社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力」が身に付いた学生の割合は、前回、前々回とも同様に高い値89.6%になっている。前回までと同様に「よく身に付いた」と「身に付いた」の合計は他学部よりも低い。これは「社会(国民・地域・国際等)」という区分された枠組みではなく、科学技術という普遍的な課題を対象とする工学部の特徴があらわれていると考えられる。「外国語の運用能力」が身に付いた学生の割合は、前回、前々回とも同様に他学部よりも低い値76.5%になっている。「外国語」に対して苦手意識を持っている学生が工学部に多いとは思われるが、工学部の学生に求められる外国語の運用能力は他学部とは異なっていると考えられるので、苦手意識を克服して学習成果を感じられるような取り組みが必要だと思われる。「学修した内容をまとめて、それを発表する力」が身に付いた学生の割合は、前回、前々回とも同様に高い値89.6%になっている。前回までと同様に「よく身に付いた」と「身に付いた」の合計は他学部よりも低い。これは、段階的に学修を積み重ねる工学部のカリキュラムにおいて、学修結果をまとめて発表する機会が4年生の卒業研究に集中していることが、1～3年を含めた全体的な評価を下げる原因になっているのではないかと推察される。「表現すべき内容を文章にして書ける力」が身に付いた学生の割合は、前回、前々回とも同様に極めて高い値96.2%になっている。前回までと同様に「よく身に付いた」と「身に付いた」の合計は他学部よりも低い。これは、文章以外の図表、数式、数値、プログラムなどの表現方法を取る場合が他学部よりも多い工学部の特徴が表われていると考えられる。ただし、文章表現能力を向上させることの重要さが低いわけではないので、今後も引き続き改善に取り組む必要があると思われる。「パソコンで文書や資料を作成する力」が身に付いた学生の割合は、前回、前々回とも同様に極めて高い値98.6%になっている。また、「よく身に付いた」の割合は前回に引き続き他学部よりも高い値になっており、前問の「文書表現能力」の不足をその他の表現方法やツールの操作技術で補って資料作成を十分にできていることがわかる。

(2) 長所と課題

演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業のために、週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験に時間を掛けている学生が多く、専門分野に関する知識・技能を身に付けられている点が工学部の長所といえる。一方、外国語の運用能力や表現すべき内容を文章にして書ける力を身に付けたと考える学生の割合が他学部よりも低いことが課題と考えられる。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

理系文系と2分してしまうことには問題があるが、「英語(外国語)」や「文章表現」に苦手意識を持つ学生が工学部に多いのも事実である。これらの能力について工学部の学生に対して求められている内容は、限定的で他学部とは異なっているが、高校までの学習ではその違いを意識する機会が少ないと思われる。

英語については、これまでもプレースメントテストに基づく能力別の少人数のクラスでの教育を行い、「ESP」でSTEM分野の英語を扱うなど対策を進めてきたが、科学技術に関する発表や論文などについてインターネットの映像や音声を使って身近に触れる機会を増やしていきたい。

文書表現についても、「日本語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」や「テクニカルライティング」などの工学部共通科目を用意しており、各学科において演習科目などでプレゼンテーションを取り入れるなど、対策を進めている。学生自身が発表する機会を増やしていくことに加えて、よい発表に触れることも大事だと考えており、対外発表への参加などを積極的に進めていきたい。

5. 学部・研究科設問項目について

工学部設定項目の「実験・実習・演習によって、リーダーシップ能力や課題に対する解決能力」が身に付いたと回答した学生の割合は、前回、前々回に引き続き高い値 93.4%になっていて、工学部の特徴である実習形式の授業の効果が表れている。学年別の集計では、前回までは学年の進行によって「よく身に付いた」「身に付いた」の合計が上昇していく結果がみられたが、今回は2年生の割合が特異的に高くなっていることがわかる。新入生教育などの改善結果なのか、母集団によるゆらぎなのかは、現時点では判断できないが、今後の継続的な調査によって明らかになると思う。

1. 本年度の授業の中での経験について

「学生同士が議論する授業有無」は、「あった」の合計が86.7%となった。3年連続で5学部中もつとも高い。「自分の考えや課題を発表する授業の有無」でも「あった計」が95.2%と全学部中2位となった。この二つの設問では、いずれも全学平均よりも5ポイント以上高くなっている。学生が能動的に学びを深めていく場が、確保されていることがうかがわれる。「教員への質問・意見を述べたことの経験有無」も3年連続で7割近くが「あった」と回答しており、教員に対して発言をする雰囲気が保たれていると判断できる。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「教員への学修に関する相談経験」は「よくあった」「ときどきあった」の合計が61.3%と、過去2年間に比べ15ポイント以上上昇している。全学平均と比べても5ポイント以上高くなっている。1. の教室だけでなく、教室外でも教員とのコミュニケーションがより盛んに行われていることがうかがわれる。「他の学生と授業内容について話す、一緒に勉強する。」は、3年連続で8割前後の学生が「よくあった」「ときどきあった」と回答しており、学修についての教室外コミュニケーションも活発であることが推定される。

一方で「授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験」に「よくあった」「ときどきあった」割合は56.7%となっており、全学平均よりも5ポイント以上低い。3年続けて6割前後の値となっている。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「週当たり授業出席科目数」に13科目以上と答えた割合は38.3%(全学部中2位)であった。過去2年間も39.1%(1位、令和5年度)、35.8%(1位、令和4年度)であり、国際学部生がたくさんの授業を履修していることがわかる。

一方で「週当たり授業時間以外での授業関連学修時間」で「全くない」と回答した者が13.3%と全学部でもっとも高くなっている。昨年度も17.7%と全学部中もっとも高かった。授業をたくさん履修しているので授業外学修の時間が少なくなってしまうこともあるけれども、「週当たりの授業と関連しない読書時間」「週当たりの部活動・サークル活動参加時間」の両質問で1時間以上と答えた者の比率は、3年連続で全学部を通じもっとも高い。このことから授業に出席している以外の時間は、授業とは直接関連しない学修、部活動に向けられていることが推定される。

「週当たりのアルバイト・就労時間」で19時間以上は28.3%と全学部中もっとも低い。授業で忙しく、アルバイトをする時間が確保できないという解釈も可能であろう。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

「一般的な教養」「情報を収集する力、そこから必要な情報を得る力」「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」「他の人と協力して物事を進めていく力」については、令和4年度からの3年間で「よく身についた」と答える者の比率がほぼ3割を超えており、全学部中1位または2位となっている。教養、情報収集、問題解決能力、協働という社会人としての基礎的な能力が、国際学部での学びを通じて効果的に身につけていることがうかがわれる。

一方で「専門分野に関する知識・技能」が「よく身についた」は30.4%と全学部中2位であった。ただ、昨年度の25.6%(全学部中5位)から大幅に上昇している。

「必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」「社会が直面する課題を理解する力」「外国語の運用能力」の3設問については、「よく身についた」「身に付いた」「少し身に付いた」の合計が9割を超えている。この3年間では全学部中1位または2位の高い割合となっている。

「学修した内容をまとめて発表する力」「表現すべき内容を文章にして書ける力」「パソコンで文書や資料を作成する力」については「よく身についた」の回答比率が、この3年間を通じ全学部で1位または2位となっており、アウトプット能力についても達成感をもつ者が多いことがわかる。

(2) 長所と課題

国際学部は開発途上国を中心とした社会の諸課題の発見とその対応策の提案ができる人材を輩出することを、学部教育の大きな柱としている。今回ならびに過去2年間の調査結果からは、その目的を果たしていることが確認できる。一方で教室外において授業に関連した調べ物をする機会をあまりもたない傾向がある。学修は教室の中だけで終わらないということを周知することが課題としてあげられる。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

調査結果全体を通じてうかがわれるのは、国際学部生の積極性、前向きに物事に取り組む姿勢である。5学部との比較でそれは明確である。これは国際学部生の良さといっている。ただし、問題は積極性や前向きの中味である。教室では積極的であっても、それが教室外での、たとえば図書館利用などに結びついていない。授業を通じて習得する知識やスキルは重要ではあるが、それだけでは十分ではないことをいかに学生たちに理解してもらうのが、今後の授業運営、カリキュラム編成において重要である。

入学直後の初年度ゼミ(クラスゼミナール)を始めとした1年生の授業を通じ、読書の大切さを伝えていくことが改善策として考えられる。

5. 学部・研究科設問項目について

「海外研修経験」の経験者比率は、3年間で20%前後を推移しており、経験者比率は安定している。応募者不振で未開催の研修もあり、学生への研修参加の呼びかけを強化する必要がある。「国内外でのボランティア、NGO活動への参加」は3年間で20%台を推移しており、一定数の学生が参加していることがわかる。

1. 本年度の授業の中での経験について

令和5年度も回答数が極めて少なかった($n=10$)が、令和4年度と比較すると総じて上昇がみられる。教員へも質問、意見を述べており、意思疎通ははかられている。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

全員がよく教職員と話し合うことができている一方で学生同士の話し合う機会がそれに比較して十分ではない。ともに学びあう風土を醸成していかなければならない。インターネットでよく情報収集し、図書館をよく使用しているなど情報の入手には積極的である。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

読書時間が1-3時間の者が半数と読書量が足りていない。その原因としてアルバイトの時間の多さがある。7-9時間以上の者が6割と趣味活動の時間が少ないことからみても余裕がないことが判明する。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

専門分野に関する知識・技能はよく身に付いた、身に付いたが8割と達成できている。課題発見能力も身に付いており、情報収集力やリーダーシップにも相応の自信を見せている。他者とも一定の協業ができるようになってきている。

(2)長所と課題

文章表現力が高く、社会課題の理解力、外国語の運用能力はよく身につけている。

毎年この調査への解答が少ないように所属へのロイヤリティが乏しいところやアルバイト時間が長いことには留意を要する。またインターネットでよく情報収集しているが、どこまで生成AIに聞くかなど著作権も含めて以前にも増して注意して指導していかなければならない。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

大きな課題はなく、コミュニケーションや教育内容に問題はないが、今後はさらにコミュニケーションを密にしてこうした調査へも協力を得られるようにしたい。

1. 本年度の授業の中での経験について

アンケート結果において、「よくあった」「ときどきあった」を集計すると、「(Q6) 自分の考えや課題を発表する授業」(R6: 100%, R5: 91.7%, R4: 94.7%)、「(Q7) 教員への質問・意見を述べたことの経験」(R6: 100%, R5: 91.7%, R4: 100%)、「(Q8) 学生同士が議論する授業」(R6: 95.2%, R5: 66.7%, R4: 84.2%)、「(Q9) 演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」(R6: 85.7%, R5: 83.3%, R4: 78.9%)、「(Q10) 定期的な小テスト・レポートのある授業」(R6: 85.7%, R5: 91.7%, R4: 89.5%)、「(Q11) Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業」(R6: 95.2%, R5: 100%, R4: 94.7%)であった。

この結果から、令和4年度から6年度までの比較において、学修環境は全体的に向上していることがわかる。特に(Q6) 自分の考えや課題を発表する授業」が令和6年度において100%となっている点は望ましい結果である。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

アンケート結果において、「よくあった」「ときどきあった」を集計すると、「(Q12) 他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験」(R6: 85.7%, R5: 91.7%, R4: 63.2%)、「(Q13) 教職員への学修に関する相談経験」(R6: 85.7%, R5: 91.7%, R4: 79.0%)、「(Q14) 授業や課題のため図書館で資料・文献を調べた経験」(R6: 95.2%, R5: 91.7%, R4: 89.5%)、「(Q15) 授業や課題のためインターネットでの情報収集」(R6: 100%, R5: 91.7%, R4: 100%)であった。

この結果から、令和4年度から6年度までの比較において、「(Q12) 他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験」と「(Q13) 教職員への学修に関する相談経験」が微減している点は中止すべきである。一方、図書館やインターネットを通じた情報収集について向上している点は望ましい結果である。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

アンケート結果において、授業時間以外の学修時間が週当たり1～3時間(R6: 19.0%, R5: 0%, R4: 21.1%)、4～6時間(R6: 23.8%, R5: 41.7%, R4: 10.5%)、7～9時間(R6: 23.8%, R5: 0%, R4: 15.8%)、10～12時間(R6: 9.5%, R5: 16.7%, R4: 10.5%)、13～15時間(R6: 0%, R5: 8.3%, R4: 5.3%)、16～18時間(R6: 0%, R5: 0%, R4: 5.3%)、19時間以上(R6: 19.0%, R5: 33.3%, R4: 31.6%)であった。

この結果から、授業時間以外にも多くの時間を学修に費やす学生がいる一方で、少ない学修時間で済ませる学生も存在していることがわかる。令和4年度から6年度までの比較では、「19時間以上」「16～18時間」「10～12時間」「13～15時間」「10～12時間」の学生の割合が減っている一方で、「7～9時間」「4～6時間」の学生が増えていることは、全体的に学習時間が減っている可能性があり、注視していく必要がある。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

アンケート結果において、「よく身に付いた」「身に付いた」を集計すると、「(Q23)専門分野に関する知識・技能」(R6:90.5%, R5:91.7%, R4:89.5%)、「(Q24)情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力」(R6:95.2%, R5:100%, R4:84.2%)、「(Q25)物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」(R6:90.5%, R5:91.7%, R4:73.7%)、「(Q26)他の人と協力して物事を進めていく力」(R6:76.1%, R5:66.7%, R4:63.1%)、「(Q27)必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」(R6:76.2%, R5:66.7%, R4:52.7%)、「(Q28)社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力」(R6:81.0%, R5:58.4%, R4:47.4%)、「(Q29)外国語の運用能力」(R6:66.7%, R5:50.0%, R4:57.9%)、「(Q30)学修した内容をまとめて、それを発表する力」(R6:95.3%, R5:83.3%, R4:84.2%)、「(Q31)表現すべき内容を文章にして書ける力」(R6:85.7%, R5:83.3%, R4:68.4%)、「(Q32)パソコンで文書や資料を作成する力」(R6:95.3%, R5:100%, R4:73.7%)であった。

この結果から、「(Q26)他の人と協力して物事を進めていく力」「(Q27)必要な場合のリーダーシップを発揮できる力」「(Q28)社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力」「(Q29)外国語の運用能力」が身に付いたと回答する学生が増えており、授業の中で、一方向的な講義だけでなく、学生同士で取り組む形式が導入されている可能性について示唆される。

(2)長所と課題

長所としては、過去に指摘されていた図書館やインターネットを通じた情報収集に関する課題について、令和6年度の結果を見る限りではある程度解決されていると思われる。また、学修環境における「自分の考えや課題を発表する授業」が増えている点は、商学研究科のこれまでの取り組みが実を結びつつあることがうかがえる。一方、学修時間の減少については、長所の裏返しとして、AI等による効率的に情報収集できるようになったことの表れなのかもしれないが、課題として注視する必要がある。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

商学研究科では、以前より、研究進捗の確認、学生間の交流と学修機会の提供、研究成果の可視化、学生の自己成長の促進を目的として、7月と10月に修士論文中間報告会を開催している。また、「研究の進め方ワークショップ」と称して、リサーチクエスションの立て方など基本的な研究方法についての底上げに努めており、引き続きこうした取り組みを継続していきたい。

一報、図書館やインターネットを通じた情報収集に関する課題について数字上は解決の方向にあるが、AIによる情報収集は必ずしも学生の思考能力の向上に寄与するとは限らず、運用については検討が必要である。

1. 本年度の授業の中での経験について

令和6年度の工学研究科では、「自分の考えや課題を発表する授業があった」とする回答が100%となり、過去の令和4年度(96.7%)、令和5年度(95.2%)と比較しても、さらに高い水準に達している。この結果は、学習者が知識を受け取るだけでなく、自らの意見を整理し発信する機会が、教育の中に制度的に組み込まれていることを示しており、大学院教育として望ましい傾向である。

また、「学生同士の議論があった授業」は92.9%にのぼり、前年度(76.2%)と比較して大幅な改善が見られた。これは協働的学習の促進を示すものであり、学生同士の意見交換を通じて多角的な視点を養う取り組みが実を結んでいると評価できる。さらに、演習や実験、実習、フィールドワークなど体験的な授業についても、令和6年度は89.3%と非常に高い割合を占めており、過年度と比較しても引き続き高水準を維持している。したがって、体験型授業を重視したカリキュラム設計が有効に機能していると考えられる。これらの授業は、知識の理解にとどまらず、問題発見力や探究心を育む重要な機会として位置づけられるべきである。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

授業外の学修態度については、教員に質問や意見を述べた経験の有無から間接的にうかがうことができる。令和6年度では85.7%の学生が「経験があった」と回答しており、依然として高水準を維持している。

ただし、令和4年度の93.3%、令和5年度の95.2%と比べると若干の減少が見られ、授業外での能動的な学修機会の確保については、今後検討の余地がある。この傾向は、教員の研究や業務の多忙化、また学生側の遠慮や接点不足などが影響している可能性があるため、学生が質問や相談をしやすい仕組みの整備が求められる。例えば、研究室内の定期的な面談や、少人数制の相談時間の導入などが効果的である。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

調査項目には具体的な週当たりの学修時間は示されていないが、発表や議論、実践型授業に積極的に取り組む姿勢や、教員との対話機会の多さから、全体として一定以上の学修時間が確保されていると推察される。

特に、複数年度にわたって高い回答率が維持されていることから、学修習慣が継続していることがうかがえる。学生が自ら計画的に時間を管理し、研究や課題に取り組む姿勢や文化が形成されていることは、今後の教育活動において大きな資産となる。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

体験型授業の実施率の高さや、自発的な意見発表、学生同士の議論の活発化は、知識理解のみならず、論理的思考力、表現力、問題解決能力といった学修成果が着実に身につけていることを示唆している。特に、令和6年度の各項目における90%超の肯定的回答は、教育効果が定量的にも裏付けられているといえる。また、グループでの議論やプレゼンテーションを通して、他者の意見を尊重しながら自分の考えを伝える力が着実に伸びている。

(2)長所と課題

長所としては、授業内外における発表・対話・体験活動の多さがあげられ、これが学生の主体的学びを支えている。一方で、教員への質問や意見に関する割合が若干減少した点については注意が必要であり、教員と学生の距離感や接触機会の調整が求められる。特に、研究に直結する課題へのフィードバックの質やタイミングは、学生の学修モチベーションを大きく左右する要因となるため、今後も継続的な改善が必要である。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

授業外での対話や指導の質を高めることが重要である。一方、工学研究科という特性を踏まえれば、学会発表のための用意は当然ながら、質疑応答後に指導教員は元より、他の教員や院生と意見交換できる時間や制度を設けることで、学生の学修意欲をさらに高めることが可能となる。また、オンラインツールの活用はできているため、学生同士が学び合えるピア・サポートの制度化も検討に値する。

5. 学部・研究科設問項目について

総じて、令和4年度以降一貫して高い水準を維持しており、特に令和6年度はすべての主要項目において90%以上の肯定的回答を示している。これは、教育カリキュラムの妥当性と運用の安定性の両面から高く評価できる。

一方で、対話的学修の維持・発展には継続的な働きかけが必要であり、授業時間外の学びや教員との関係構築を促進する施策が今後の検討課題として挙げられる。そのためには、専用の場所を提供できる体制が必要である。本研究科が掲げる「課題発見・解決型人材の育成」という理念を実現するためにも、学生の学修意欲を支える仕組みづくりが不可欠である。

また、学修成果としては、「専門分野に関する知識・技能」や「課題解決能力」、「プレゼンテーション能力」など、大学院生に求められる基礎的かつ応用的な能力が着実に身に付いている点が特筆される。

一方、「社会が直面する課題を理解する力」や「外国語の運用能力」については向上の余地があると考えられる。特に、理系の専門性を土台にしつつも、学外との接点や国際的な場面での発信力を高める取り組みは、今後さらに重視されるべきである。

今後、工学研究科における教育活動は一層多様化し、より実践的かつ対話的な方向へと発展していくことが求められる。したがって、それらの実績をさらに広げるためにも、研究と教育、そして成果を世に出す為の社会との接点を意識した教育の質的向上が期待される。

言語教育研究科

1. 本年度の授業の中での経験について

「自分の考えや課題を発表」については、前年度と同様に「あった」が100.0%であった。「教員への質問・意見」は96.0%であった。一方、「学生同士が議論する授業」については、「あった計」が92.0%と、前年度より高くなった。「演習、実験、実習、フィールドワークなど体験授業」は「あった計」が84.0%で、前年度より高くなった。全般的に前年度より充実度が高くなったと言える。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「他の学生との授業内容に関する話し合い」は88.0%で、前年度に比べ15%ほど上がり、学生間の意見の交流もかなりなされている。「教職員への相談」は92.0%（前年度比約20%増）とかなり増えており、教員と学生間のコミュニケーションもしっかり行われている。「授業のための図書館での資料等調査」は96.0%（前年度比2.7%増）、「インターネットでの情報収集」を経験した学生の割合は100.0%（前年度比6.7%増）であり、例年通り利用率は高く、本年度は非常に高くなっている。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

「授業出席科目数」は「1～2科目」が24.0%と最も多い。前年度は「3～4科目」および「5～6科目」が8.0%、次いで「7～8科目」が20.0%であった。これは回答者の学年による差が現れたと考えられる。「授業時間以外での授業関連学修・経験時間」は「4～6時間」が32.0%で、前年度とほぼ同じである。「授業と関連しない読書時間」は「全くない」という回答者から「19時間以上」という回答者まで個人差が大きく、これは例年通りである。一方、「アルバイト時間」は「全くない」が20.0%、「19時間以上」が28.0%で、昨年度より全体的に増加している。「個人的な趣味活動時間」は、ほぼ前年度並みである。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1) 学修成果の達成状況

ほとんどの項目は前年度並みである。「専門分野に関する知識・技能」「必要な情報を得る力」「課題を発見し、解決の方向を考える力」「学修した内容をまとめ、発表する力」「パソコンで文書を作成する力」が「身に付いた」はいずれも100%であった。「他の人と協力して進める力」が「身に付いた」は92.0%（前年度よりやや増）、「リーダーシップ能力」が「身に付いた」は92.0%（前年度比12.0%増）と前年よりかなり増えてきている。

(2) 長所と課題

「専門分野に関する知識・技能」から「物事の課題を発見し、その解決の方向性を考える力」まで全体的に昨年同様、平均的な結果となっている。本研究科は、昨年に引き続き外国語の修得に限定されずにバランスの良い教育が行われているのが長所と言える。また、「他の人と協力して物事を進めていく力」及び「リーダーシップ能力」の評価も昨年に比べて伸びており、この傾向が減少しないように努めることが課題となる。

(3) 教育課程や教育内容・方法などの改善方策

以下の2点が今後の改善策として考えられる。①人数が少ないゼミ形式の授業が多い中、ゼミの中だけでなく学年や専門を超えた学生同士の勉強会等の中での交流を促進することが望まれる。発表会前の合同練習会や博士後期課程の学生を中心とした勉強会などの取り組みをさらに奨励してゆきたい。②リーダーシップ能力についても、学生主体の活動機会を増やしていくことを引き続き支援していきたい。

また、外国語の運用能力の項目で「ほとんど身につかなかった」という学生が16.0%いたので、改善を図りたい。

国際協力学研究科- 1

1. 本年度の授業の中での経験について

「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(%)比較

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度	大学院全体
自分の考えや課題を発表する授業	100	100	96.8	98.4
教員への質問・意見を述べたことの経験	97.8	94.7	96.8	98.4
学生同士が議論する授業	89.1	78.9	87.1	90.6
演習、実習、フィールドワーク等体験授業	56.5	63.2	71.0	82.0
定期的な小テスト・レポートのある授業	91.3	84.2	87.1	89.1
Blackboard、E-mail等を活用し教材・課題の受け取りや提出を行った授業	97.8	89.5	90.3	94.5

回答者が19～46人と統計分析としては十分ではない数であるため、年によるばらつきが大きい結果となっている。「授業での経験」については、令和5年に数値が若干落ちているが、令和6年にはそれが回復していることが読み取れる。学生が積極的に議論したり発表したりする環境は十分に確保されているが、「フィールドワーク」が他の研究科と比べ、若干少ないことが課題と言えるかもしれない。ただ、それもここ3年で改善されてきている。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

「あった計(よくあった+ときどきあった)」の比率(%)比較

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度	大学院全体
他の学生と授業内容について話し合ったり一緒に勉強した経験	78.3	68.4	74.2	83.6
教職員への学修に関する相談経験	73.9	73.7	71.0	82.8
図書館で資料・文献を調べた経験	95.7	100	96.8	92.2
インターネットでの情報収集経験	97.8	89.5	96.8	99.2

ほぼ全員の学生が、授業外の時間で、図書館で調べたり、インターネットで情報を収集したりしていることがわかる。また7割程度の学生が、学生同士や教員と授業外でも議論を交わしたことがあることがわかる。そういう学習環境は整っているようである。

3. 本年度の過当たりの学修等時間について

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度	大学院全体
過当たりの授業出席科目数	1-2科目30.4%, >13科目28.3%	1-2科目42.1%, >13科目21.1%	1-2科目32.3%, >13科目12.9%	1-2科目22.7%, >13科目18%
過当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間	4-6時間30.4% 7-9時間21.7%	13-15時間36.8% 4-6時間31.6%	7-9時間32.3% 1-3時間22.6%	4-6時間21.9% >19時間21.1%
過当たりの授業と関連しない読書時間	1-3時間34.8% 4-6時間26.1%	1-3時間31.6% >19時間21.1%	1-3時間51.6% 4-6時間22.6%	1-3時間39.8% 4-6時間18.8%
部活動・サークル活動時間	全くない54.4%	全くない42.3%	全くない46.3%	全くない57.7%
過当たりのアルバイト時間	全くない37% 4-6時間13%	全くない26.3% 1-3時間15.8%	全くない32.3% >19時間25.8%	全くない30.5% >19時間21.1%
過当たりの個人的な趣味活動時間	1-3時間32.6% 4-6時間26.1%	1-3時間26.3% >19時間26.3%	1-3時間45.2% 7-9時間19.4%	

回答者の学年の偏りによって、授業数などは、年によって大きく変動するのがわかる。授業外での学習時間は、年によってばらつきが大きく、博士前期課程と後期課程では、大きく学習時間が異なると分析される。部活動、アルバイト等に咲いている時間は、それほど多くはなく、学習とアルバイトなどのバランスがとれていることが読み取れる。

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

「身に付いた計(よく身に付いた+身に付いた+少し身に付いた)」の比率(%)比較

設問項目	令和4年度	令和5年度	令和6年度	大学院全体
一般的な教養	96.5	97.7	98.3	98.3
専門分野に関する知識・技能	97.8	100	100	99.2
情報を収集する力	97.8	100	100	100
物事の課題を発見し、解決を考える力	100	100	100	100
他の人と協力して物事を進めていく力	87	73.7	87.1	93
リーダーシップを発揮できる力	87	78.9	83.9	89.1
社会が直面する課題を理解する力	100	100	96.8	96.9
外国語の運用能力	91.3	73.7	87.1	85.9
学修した内容をまとめて、発表する力	100	94.7	100	100
表現すべき内容を文章にして書ける力	100	100	100	100
パソコンで文書や資料を作成する力	97.8	94.7	100	98.4

身に付いた力(学習成果)については、90～100%の学生が、「一般的な教養」「専門分野に関する知識・技能」「情報を収集する力」「物事の課題を発見し、解決を考える力」「社会が直面する課題を理解する力」「学修した内容をまとめて、発表する力」「表現すべき内容を文章にして書ける力」「パソコンで文書や資料を作成する力」について「身に付いた」と回答しており、確かな手ごたえを感じていることが読み取れる。一方、「他の人と協力して物事を進めていく力」「リーダーシップを発揮できる力」の値が、決して低くはないものの他と比べると少し数値が下がっているため、チームでの作業に少し改善点があるように見受けられる。

(2)長所と課題

長所としては、個々人が学習を深める環境や、成長に手ごたえを感じる環境は十分に整っていることが読み取れる。課題としては、チームでの作業、あるいはフィールドワークなどの機会が少ないことが見えてきた。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

個々人の学習環境はかなり整備されているので、それに加えて、リーダーシップやチームワークを涵養するために、よりフィールドワークなどのアクティブ・ラーニングを充実させていくことが重要になってくるのだろう。

地方政治行政研究科- 1

1. 本年度の授業の中での経験について

- ・本調査時点の本研究科在籍総14名の内13名が回答した。内訳は、修士課程1年8名、同2年5名であり、その内外国人留学生は6名である。
 - ・本所見のカッコ付の項目は、昨年度から変化のあった項目である(左側の数値は昨年度のもの)。本所見1と2にあるいずれの項目も、「あった計(よくあった+ときどきあった)」の数値結果である。
 - ・自分の考えや課題の発表経験、教員への質問・意見の経験、学生同士の議論経験(66.7→100)、Blackboard・E-mail等の活用による課題等の受領や提出経験(66.7→100): 100%
 - ・定期的小テスト・レポート経験:(66.7→)84.6%
 - ・演習・実験・実習・フィールドワークなどの体験:(66.7→)69.2%
- 以上のことから、総じて、授業中の活動が活発に行われたことが分かる。前年度と比べ、学生同士の議論経験、Blackboard・E-mail等の活用による課題等の受領や提出経験は、33ポイント程向上している。

2. 本年度の授業時間外の学修態度について

- ・インターネットでの情報収集経験: 100%
 - ・他学生と授業内容について話し合いや勉強の経験:(66.7→)92.3%
 - ・図書館で資料文献を調べた経験:(100→)92.3%
 - ・教職員への学修に関する相談経験:(66.7→)76.9%
- 以上のことから、総じて、授業時間外の活動が活発に行われたことが分かる。前年度と比べ、他学生と授業内容について話し合いや勉強の経験は、25ポイント程向上している。

3. 本年度の週当たりの学修等時間について

- ・週当たりの授業出席科目数: 3-6科目が38.5%、7-12科目が30.8%、13科目以上が30.8%の割合である。大学院生全体の傾向と大きく異なる点は、13科目以上の割合が12ポイント程高い点である(全体18%)。
 - ・週当たりの授業時間以外での授業関連学修・経験時間: 1-3時間と19時間以上がそれぞれ30.8%、4-12時間が38.5%の割合である。学生間で数値のばらつきが見られる。
 - ・週当たりの授業と関連しない読書時間: 0-6時間が53.9%、7時間以上が46.2%の割合である。大学院生全体の傾向と大きく異なる点は、7時間以上の割合が17ポイント程高い点である(全体29%)。
 - ・週当たりのアルバイト・就労時間: 1-3時間と19時間以上がそれぞれ30.8%、4-12時間が38.5%の割合である。学生間で数値のばらつきが見られる。
 - ・週当たりの個人的な趣味活動時間: 0-3時間と4-6時間が30.8%、7-18時間が23.1%、19時間以上が15.4%の割合である。大学院生全体の傾向と類似している。
- 以上のことから、大学院生全体の傾向と比較し顕著な特徴は、授業出席科目数及び授業外読書時間の多さであり、総じて、授業内外での学修時間の確保ができていることが分かる。一方、授業関連学修・経験時間及びアルバイト・就労時間には学生間で数値のばらつきが見られる。

地方政治行政研究科-2

4. 入学時と比べて現在までに身に付いた力(学修成果)について

(1)学修成果の達成状況

以下の通りの結果となった。いずれの項目も、「よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた」の数値結果である。

- ・専門分野に関する知識・技能、情報を収集する力やそこから必要な情報を得る力、物事の課題を発見しその解決の方向性を考える力、社会(国民・地域・国際等)が直面する課題を理解する力、学修した内容をまとめてそれを発表する力、表現すべき内容を文章にして書ける力:100%
- ・他の人と協力して物事を進めていく力:(100→)92.3%
- ・必要な場合のリーダーシップを発揮できる力:(33.3→)92.3%
- ・パソコンで文書や資料を作成する力:(100→)92.3%
- ・外国語の運用能力:(66.7→)76.9%

以上のことから、総じて、学修によって身に付けることが期待される力は向上したことが分かる。前年度と比べ、必要な場合のリーダーシップを発揮できる力は59ポイント、また、外国語の運用能力は10ポイント程向上している。

(2)長所と課題

上記10項目のうち9項目において、身に付いた(「よく身に付いた＋身に付いた＋少し身に付いた」)の数値が90%以上となっており、学修成果の高い傾向が継続している。

過年度まで数値の推移への注視を必要としていた項目について「令和4年度→5年度→6年度」の実績を見ると、リーダーシップ発揮の力(84.7→33.3→92.3%)、及び外国語の運用能力(77.0→66.7→76.9%)となっている。リーダーシップ発揮の力については、本調査結果においては、他項目と同様高い数値を示している。一方、外国語の運用能力については数値の回復傾向が見られるものの、引き続き来年度以降もその推移を注視する必要がある。

(3)教育課程や教育内容・方法などの改善方策

上記に示された良好な状態を今後も持続できるよう、現在の取り組みの継続が求められている。また、外国語の運用能力については、本研究科は日本語での教育を前提としていることから留学生への支援を中心に取り組むことになる。但し、本調査の回答者の約半数は日本人学生であるにも関わらず約8割の回答者が外国語の運用能力の向上を示している現状に鑑み、現在の取り組みの継続を基本とすることが望ましいと考える。